志木市の文化財　第71集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 8

田子山遺跡第 51 地点

中野遺跡第 55 地点

中野遺跡第 57 地点

2018

埼玉県志木市教育委員会

は　じ　め　に

志木市教育委員会
教育長　柚 木　　博

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書８』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心から25㎞圏内という距離にあるため、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

当市を地理的に見てみると、市域には、荒川・新河岸川・柳瀬川といった大きな３つの河川が流れており、古より自然豊かな環境に恵まれていたものと想像できます。このことから、市内には現在柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺や荒川低地の自然堤防上に14カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

今回報告する田子山遺跡と中野遺跡ですが、市内でも古くから各種開発が盛んに実施されてきた地域であり、個人住宅・共同住宅・分譲住宅建設などの建設工事に伴い、発掘調査が実施されてきました。

今回報告する田子山遺跡第51地点は、平成10年度に分譲住宅建設を前提とした道路建設に伴い発掘調査が実施されました。この調査により、縄文時代中期、古墳時代後期、平安時代の遺構・遺物が検出されました。中でも、縄文時代の土坑から、市内で初めて有舌尖頭器１点が出土したことで注目されます。この有舌尖頭器ですが、縄文時代草創期という縄文時代の最古の時代の槍先ですが、逆に旧石器時代で主流であった槍先から見ると最後のものとなり、旧石器時代から縄文時代への道具の移り変わりの具体例を示す上で大変重要な発見となっています。

また、中野遺跡では、特に第57地点が、平成13年度に宝幢寺不動堂建設に伴い発掘調査を実施されました。この調査により、近世以降の土坑や井戸跡などが検出されました。おそらく、これらの遺構・遺物は、調査場所が古くから宝幢寺の敷地内であることから、宝幢寺関連のものと推測されます。特に調査区内に広がる硬化面やピット列などの発見から、宝幢寺への参道あるいは柵列のような施設であったことが想像されます。

以上、発掘調査・整理作業及び調査報告書刊行につきましては、関係各位の皆様からは多くのご協力をいただきました。ここに、心から感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財の理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶための一助になれば幸いに存じます。

例　　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する田子山遺跡（県№09－010）の田子山遺跡第51地点、中野遺跡（県№09－002）の中野遺跡第55・57地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者の事業者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。

3．本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、近世以降の遺物については、野澤　均氏にご教示を頂いた。

　大久保　聡　　第5章第1節（1）

　深井　恵子　　第2～4章第3節の遺構

4．遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・林ゆき子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木　修が行った。写真撮影は青木　修が行った。

5．表土剥ぎ作業については、株式会社大塚屋商店に委託し、重機オペレータは田中三二が担当した。

6．本報告書に掲載した旧石器・縄文時代の石器については、有限会社アルケーリサーチに実測を委託したものである。

7．本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

8．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育員会・富士見市立水子貝塚資料館・富士見市立難波田城資料館

江原　順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・斎藤　純・齋藤欣延・笹川紗希・佐藤一也・斯波　治・鈴木一郎・照林敏郎・根本　靖・野沢　均・早坂廣人・堀　善之・前田秀則・安井　翠・安田脩一・柳井彰宏・山田尚久・和田晋治

9．本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

　田子山遺跡第51地点／平成10年8月20日付け　教生文第3－310号

　中野遺跡第55地点／平成13年7月30日付け　教生文第3－356号

　中野遺跡第57地点／平成13年9月10日付け　教生文第3－460号

○埋蔵文化財の発掘調査について（通知）

　田子山遺跡第51地点／平成10年8月20日付け　教生文第2－82号

　中野遺跡第55地点／平成13年7月31日付け　教生文第2－47号

　中野遺跡第57地点／平成13年10月23日付け　教生文第2－60号

○埋蔵物の文化財認定について

　田子山遺跡第51地点／平成11年3月23日付け　教生文第5－157号

　中野遺跡第55地点／平成13年10月1日付け　教生文第5－141号

　中野遺跡第57地点／平成13年11月30日付け　教生文第5－173号

凡　　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第１図　1：20,000「志木市全図」株式会社パスコ調製

第２・22図　1：3.000　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成15年８月発行
株式会社ゼンリンを一部改変

2．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

4．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位は㎝である。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6．遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7．遺構の略記号は、以下のとおりである。

Ｙ＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡　　Ｈ＝古墳時代～平安時代の住居跡　　Ｄ＝土坑

Ｍ＝溝跡　　Ｗ＝井戸跡　　Ｐ＝ピット

志木市遺跡調査会調査組織（平成10～13年度）

〈役　　員〉

会　　長　秋山太藏（志木市教育委員会教育長）（昭和63年7月～平成12年6月）
〃　　細田信良（　　〃　　）（平成12年7月～平成17年6月）
副会長　川目憲夫（志木市教育委員会教育総務部長）（平成7年4月～平成12年3月）
〃　　谷合弘行（志木市教育委員会教育政策部長）（平成12年4月～平成15年3月）
理　　事　神山健吉（志木市文化財保護審議会委員長）
〃　　井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
〃　　高橋長次（　　〃　　）
〃　　高橋　豊（　　〃　　）
〃　　内田正子（　　〃　　）
理事兼事務局長　鈴木重光（生涯学習課長）（平成8年4月～平成12年3月）
土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）
（平成12年4月～平成16年3月）

〈監　　査〉

監　　事　萩原洋子（　　〃　　）（平成8年4月～平成14年3月）
永田伸夫（　　〃　　）（平成10年4月～平成14年3月）

〈事　務　局〉

担　当　課　志木市教育委員会教育総務部社会教育課（～平成12年3月）
志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課（平成12年4月～平成14年3月）
事　務　局　鈴木重光（生涯学習課長）（平成8年4月～平成12年3月）
土橋春樹（教育政策部参事兼生涯学習課長）（平成12年4月～平成16年3月）
関根正明（生涯学習課主査）（平成9年4月～平成15年7月）
佐々木保俊（　　〃　　）（～平成21年8月）
清水あや子（生涯学習課主任）（平成8年4月～平成12年3月）
新井由紀子（　　〃　　）（平成12年4月～平成14年3月）
尾形則敏（　　〃　　）

〈田子山遺跡第51地点の発掘調査〉

調査担当者　尾形則敏・佐々木保俊
調　査　員　深井恵子
発掘協力員　足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・伊野部三千子・岩森　都・
鎌本あけみ・砂川春子・髙倉光代・高杉朝子・高田美智子・
高橋恭子・竹内美代子・塚田和枝・永井真理・成田しのぶ・
二階堂美知子・広沢奈津子・久留浪子・星野恵美子・松浦恵子・
松崎陽子・宮川幸佳・柳沢美子・吉川泰央・吉谷顕子
整理協力員　梅原裕子・遠藤英子・川井信子・下村康代・中嶋清美・中村逸子・

橋本好子・山口優子・鎌本あけみ・髙田美智子・星野恵美子・松浦恵子

〈中野遺跡第55地点の発掘調査〉

調査担当者　佐々木保俊

発掘協力員　浅香輝朗・伊野部三千子・岸田純一・永井真理・松崎陽子

〈中野遺跡第57地点の発掘調査〉

調査担当者　尾形則敏

調査員　深井恵子

発掘協力員　遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・佐々木潤・鈴木浩子・星野恵美子・高田美智子・松浦恵子・山口優子・藤岡智子（早稲田大学）・福永亜希子（早稲田大学）・田村知子（昭和女子大学）

志木市教育委員会組織（平成30年度）

教育長　柚木　博

教育政策部長　土岐隆一

教育政策部次長　北村竜一

生涯学習課長　原田謙二

生涯学習課主幹　中原敦也

生涯学習課主査　浅見千穂

〃　武井香代子

〃　尾形則敏

生涯学習課主任　松永真知子

〃　徳留彰紀

〃　大久保　聡

生涯学習課主事補　鈴木楓月

志木市文化財保護審議会　井上國夫（会長）

〃　深瀬　克（委員）

〃　高橋　豊（委員）

〃　上野守嘉（委員）

〃　新田泰男（委員）

〈整理作業〉

担当者　尾形則敏・大久保聡

調査員　深井恵子・青木　修

調査補助員　星野恵美子・鈴木浩子

整理作業員　池野谷有紀・片山　望・二階堂美知子・林ゆき子・増田千春・松浦恵子・村田浩美・山口優子

目　　次

はじめに
例　　言／凡　　例／目　　次／挿図目次／表 目 次／図版目次
第１章　遺跡の立地と環境 …… 1
　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 7
第２章　田子山遺跡第51地点の調査 …… 9
　第１節　調査の経緯 …… 9
　第2節　縄文時代の遺構・遺物 …… 14
　第３節　古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物 …… 15
　第４節　遺構外出土遺物 …… 30
第３章　中野遺跡第55地点の調査 …… 37
　第１節　調査の経緯 …… 37
　第2節　検出された遺構・遺物 …… 39
第４章　中野遺跡第57地点の調査 …… 44
　第１節　調査の経緯 …… 44
　第２節　基本層序 …… 46
　第３節　検出された遺構・遺物 …… 46
第５章　調査のまとめ …… 67
　第１節　田子山遺跡第51地点の調査成果 …… 67
　第２節　中野遺跡第55地点の調査成果 …… 69
　第３節　中野遺跡第57地点の調査成果 …… 70
［付編］自然科学分析
　Ⅰ．田子山遺跡出土土器の胎土分析 …… 75

図　　版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）…… 2
第２図　田子山遺跡の調査地点（1／3.000）…… 10
第３図　遺構分布図（1／400）…… 11
第４図　遺構分布図（1／200）…… 12・13
第５図　211号土坑・出土遺物（1／60・2／3・1／3）…… 15
第６図　56号住居跡（1／60）…… 17
第７図　56号住居跡遺物出土状態（1／60）…… 18
第８図　56号住居跡出土遺物（1／4）…… 19
第９図　57号住居跡（1／60）…… 21
第10図　57号住居跡カマド（1／30）…… 21
第11図　57号住居跡出土遺物（1／4）…… 22
第12図　58号住居跡（1／60）…… 22
第13図　58号住居跡出土遺物（1／4）…… 22
第14図　59号住居跡（1／60）…… 24
第15図　59号住居跡カマド（1／30）…… 24
第16図　59号住居跡出土遺物（1／4）…… 25
第17図　60号住居跡（1／60）…… 26
第18図　60号住居跡出土遺物（1／4）…… 27
第19図　土坑（1／60）…… 27
第20図　16号ピット（1／60）…… 30
第21図　遺構外出土遺物（2／3・1／3）…… 31
第22図　中野遺跡の調査地点（1／3.000）…… 38
第23図　遺構分布図（1／150）…… 39
第24図　16号住居跡、５・６号溝跡、１～３号ピット（1／60）…… 40
第25図　16号住居跡出土遺物（1／3）…… 40
第26図　78号土坑（1／60）…… 41
第27図　遺構外出土遺物（1／3）…… 43
第28図　基本層序（1／30）…… 46
第29図　遺構分布図（1／200）…… 47
第30図　土坑１（1／60）…… 49
第31図　土坑２（1／60）…… 50
第32図　土坑出土遺物（1／4・1／3・4／5）…… 57
第33図　７号井戸跡（1／60）…… 60
第34図　７号井戸跡・２号ピット出土遺物（1／3）…… 60
第35図　近世以降の硬化面遺物出土状態（1／100）…… 62
第36図　硬化面出土遺物（1／4・1／3）…… 63
第37図　遺構外出土遺物（1／4・1／3）…… 65
第38図　土器胎土および粘土中の粒子組成図 …… 83

表　目　次

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 1
第２表　田子山遺跡第51地点の発掘調査工程表 …… 14
第３表　211号土坑出土土器一覧 …… 15
第４表　211号土坑出土石器一覧 …… 15
第５表　ピット一覧 …… 29
第６表　56号住居跡出土土器一覧（１） …… 32
　　56号住居跡出土土器一覧（２） …… 33
第７表　57号住居跡出土土器一覧 …… 33
第８表　58号住居跡出土土器一覧 …… 34
第９表　59号住居跡出土土器一覧 …… 34
第10表　60号住居跡出土土器一覧（１） …… 34
　　60号住居跡出土土器一覧（２） …… 35
第11表　平安時代ピット出土土器一覧 …… 35
第12表　遺構外出土石器一覧 …… 35
第13表　遺構外出土縄文土器一覧 …… 36
第14表　16号住居跡出土土器一覧 …… 41
第15表　遺構外出土縄文土器一覧 …… 43
第16表　中野遺跡第57地点の発掘調査工程表 …… 45
第17表　近世以降の土坑一覧 …… 54
第18表　井戸跡一覧 …… 54
第19表　近世以降のピット一覧（１） …… 55
　　近世以降のピット一覧（２） …… 56
第20表　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（１） …… 58
　　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（２） …… 59
　　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（３） …… 60
第21表　硬化面出土陶磁器・土器・ガラス製品一覧（１） …… 63
　　硬化面出土陶磁器・土器・ガラス製品一覧（２） …… 64
第22表　硬化面出土土製品・石製品・鉄製品一覧 …… 64
第23表　遺構外出土縄文・平安時代土器一覧 …… 65
第24表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（１） …… 65
　　遺構外出土陶磁器・土器一覧（２） …… 66
第25表　遺構外出土石製品・金属製品一覧 …… 66
第26表　土器試料とその特徴 …… 82
第27表　土器胎土および粘土中の粒子組成表 …… 82
第28表　胎土の粘土および砂粒の特徴 …… 84

図 版 目 次

図版１　田子山遺跡第51地点
１．調査風景　２．211号土坑　３～７．56号住居跡遺物出土状態
８．56号住居跡遺物出土状態（107地点）
図版２　田子山遺跡第51地点
１．56号住居跡　２．56号住居跡Ｐ１　３．56号住居跡旧カマド　４．56号住居跡掘り方
５～７．57号住居跡遺物出土状態　８．57号住居跡カマド支脚出土状態
図版３　田子山遺跡第51地点
１．57号住居跡　２．57号住居跡掘り方　３．57号住居跡カマド掘り方
４．58号住居跡　５．58号住居跡遺物出土状態　６．58号住居跡掘り方
７・８．59号住居跡遺物出土状態
図版４　田子山遺跡第51地点
１．59号住居跡貯蔵穴遺物出土状態　２．59号住居跡　３．59号住居跡カマド・貯蔵穴
４．59号住居跡カマド遺物出土状態　５．59号住居跡掘り方
６．59号住居跡カマド掘り方　７・８．60号住居跡遺物出土状態
図版５　田子山遺跡第51地点
１．60号住居跡遺物出土状態　２．60号住居跡掘り方　３．208号土坑
４．209号土坑　５．210号土坑　６．16号ピット　７．（Ｂ－８）Ｇ　ピット列
図版６　田子山遺跡第51地点
１．211号土坑出土遺物　２．56住居跡出土遺物
図版７　田子山遺跡第51地点
１．57号住居跡出土遺物　２．58号住居跡出土遺物　３．59号住居跡出土遺物
図版８　田子山遺跡第51地点
１．60号住居跡出土遺物　２．ピット出土遺物　３．遺構外出土遺物
図版９　中野遺跡第55地点
１．調査風景　２．16号住居跡、５・６号溝跡　３．78号土坑入口竪坑部
４．78号土坑主体部　５．16号住居跡出土遺物　６．78号土坑出土遺物
７．遺構外出土遺物
図版10　中野遺跡第57地点
１．表土剥ぎ風景　２．調査区整備風景　３．基本層序　４．83号土坑断面
５．83号土坑　６．84号土坑　７．85号土坑　８．87号土坑・１Ｐ他
図版11　中野遺跡第57地点
１．88号土坑　２．調査風景　３．89号土坑　４．92号土坑　５．７号井戸跡
６．道路状遺構　７．ピット列
図版12　中野遺跡第57地点
１．83号土坑出土遺物　２．84号土坑出土遺物　３．86号土坑出土遺物
４．87号土坑出土遺物
図版13　中野遺跡第57地点
１．88号土坑出土遺物　２．90号土坑出土遺物　３．92号土坑出土遺物

図版14　中野遺跡第57地点

１．7号井戸跡出土遺物　２．ピット出土遺物　３．硬化面出土遺物1

図版15　中野遺跡第57地点

１．硬化面出土遺物２　２．遺構外出土遺物

図版16　田子山遺跡第51地点

土器胎土中の微化石類

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05㎢（註１）、人口約７万５千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（７）、新邸遺跡（８）、中道遺跡（５）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地　目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中　　野	65,780㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城　　山	82,100㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中　　道	52,980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳？	古　墳？	古　墳？	なし
7	西原大塚	164,455㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新　　邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝　塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田　子　山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富　士　前	14,168㎡	宅　地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬　　場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グランド	館　跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	館　跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市　場　裏	13,800㎡	宅　地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大　　原	1,700㎡	宅　地	不　明	近世以降？	溝跡	なし
合　　計		506,193㎡					

平成30年8月31日現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）　平成30年８月31日現在

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた14遺跡である（第１図）。

（２）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成６（1994）年度には２ヶ所、平成７年（1995）度には１ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の２ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも１ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。

平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点２ヶ所、礫群９基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

最新では、平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑰地点からは、礫群１基が検出された。

２．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成４（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点、平成６（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器３点、第22地点から爪形文系土器１点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡１軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、

城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡１軒が確認されていが、平成27（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曽利Ｅ４式の両耳壷を出土する住居跡１軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１ヶ所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）１軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。最新資料として、平成26（2015）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2016・2017）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壷形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の３遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第８地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ１基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝

墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壷、吉ヶ谷式系の壷、在地系の壷などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壷が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

最新資料として、平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、市内最古と考えられる弥生時代後期の久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品１点と西原大塚遺跡17号方形周溝墓から出土した、鳥形土製品１点と壷形土器４点の計５点は、考古資料として、平成25年３月１日付けで、市指定文化財に指定されている。

４．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第２地点の１号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第８地点の２～８号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成７（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5ｍの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で約230軒、次いで中野遺跡で約55軒、中道遺跡と田子山遺跡で16軒ずつ、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7ｍの不整円形で２ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33ｍの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施さ

れた第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶（ふじゅしんぽう）が２枚とその近くからは鉄鎌１点と土錘１点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか９点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の冨壽神寶ほか２点の遺物は、考古資料として、平成25年３月１日付けで、市指定文化財に指定されている。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』（註２）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記（かいこくざっき）』（註３）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1988・2002）。

また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成８（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成６（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧（よろい）の札（さね）である鉄製品１点と鉄鏃１点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切

状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新た土坑45基・井戸跡２基・溝跡１本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「Ｔ字形」の火葬土坑５基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『舘村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第２地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成７（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭５枚を出土した土坑墓１基と13世紀に比定される青磁盤１点を出土した道路状遺構１条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第１地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓２基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『舘村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

７．近代以降

近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第２節　遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する田子山遺跡と中野遺跡について概観することにする。

まず、田子山遺跡は、志木市本町２丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.3㎞、柳瀬川駅の東約1.8㎞に位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約15ｍ、低地との比高差は約10ｍである。

遺跡の周辺を眺めてみると、北側は際立った断崖地形になっており、その眼下には新河岸川が流れている。遺跡の現況は、古くから個人専用住宅を中心として小規模住宅が密集している地区であり、最近では、過去に埋蔵文化財保存措置を講じた地点の建替えや新たに分譲住宅建設を実施する計画の照会があるなど、今後も増加する見込みである。

田子山遺跡は、これまでに158回の調査（平成30年10月30日現在）が実施され、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡であることが判明している。

中野遺跡は、志木市柏町１丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北方約1.2㎞に位置している。遺跡は、北側に柳瀬川を臨む台地上に位置し、標高９～11ｍを測り南から北に向かって傾斜する。台地下の低地の標高は６～７ｍで、台地から低地へなだらかに移行する。遺跡の西側には南方向に入り込んでいる柳瀬川からの狭い谷が認められ、城山遺跡と画している。遺跡を載せる台地上の現状は、宅地化が急速に進行している地域で、畑地は減少している。

本遺跡の最初の発掘調査は、昭和59（1984）年に実施された第２地点で、これまでに106地点の調査（平成30年９月30日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡であることが判明している。

［註］

註１　平成26年度「全国都道府県市区町村別面積調」により、9.06㎢から9.05㎢に変更された。

註２　『舘村旧記』は、舘村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒（なぬしみやはらなかえもんなかつね）が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註３　『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）６月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

［引用文献］

神山健吉　1988「「廻回雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第２章　田子山遺跡第51地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

平成10年７月、市内在住の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木行為計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市本町２丁目1729－１・５（面積1,475.17㎡）内において分譲住宅建設を前提とした宅地造成を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コード11228－09－010）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該土木工事予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

２．上記１の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成10年７月14日、教育委員会は、土木工事主体者である個人より埋蔵文化財確認調査依頼書・発掘届を受理し、７月22日に確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸に合わせ、３本のトレンチと調査区北西端に短軸方向に１本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代後期～平安時代の住居跡６軒・溝跡２本、その他土坑・ピットなどを検出した。

教育委員会は、この結果を直ちに依頼者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、面積1,472.17㎡のうち、道路建設部分のみ（面積431.09㎡）を発掘調査の対象とし、その他の宅地部分については、盛土保存で対応することで決定した。教育委員会は依頼者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、依頼者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成10年７月24日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。

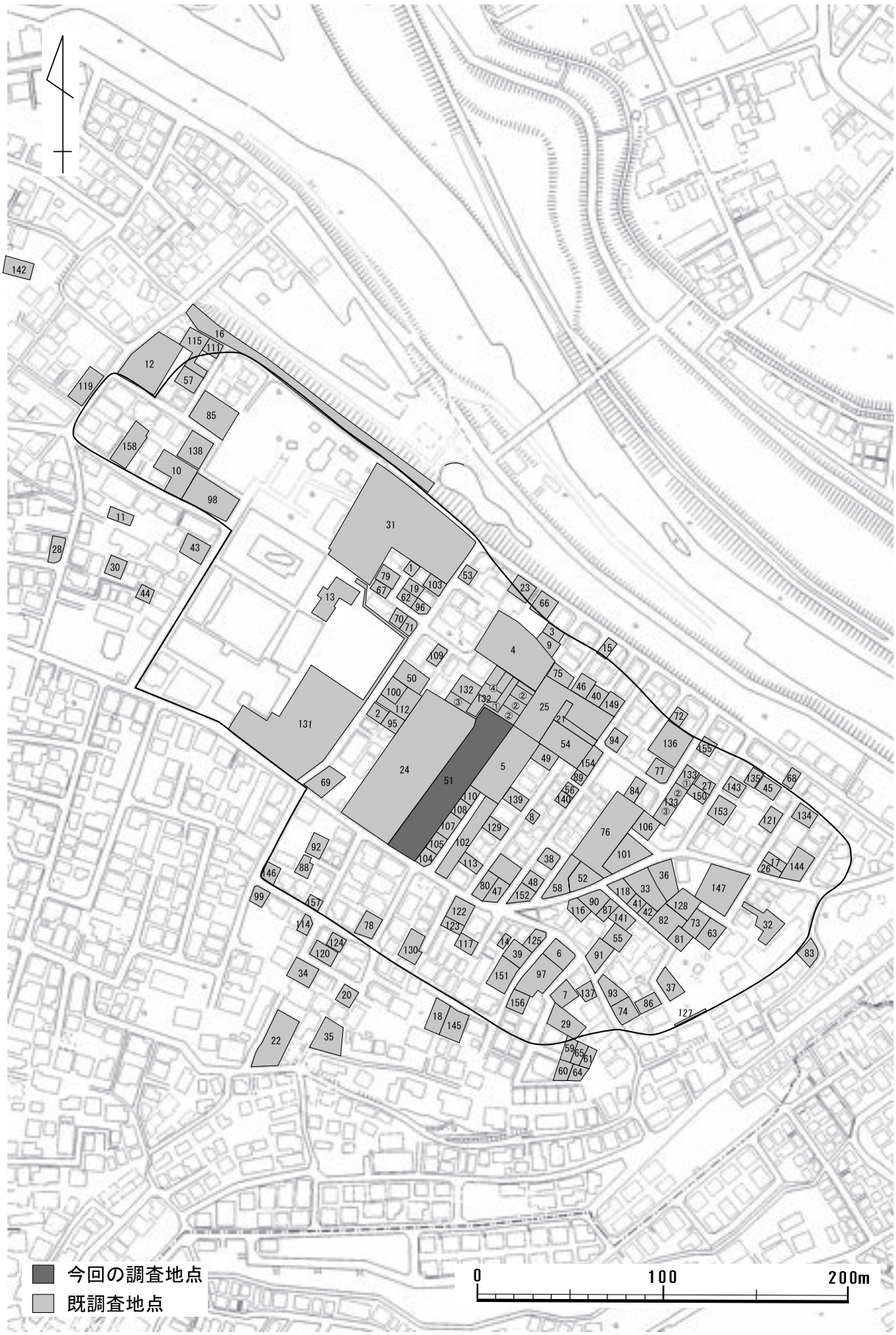
（２）発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することとする。

７月24日　重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始し、25日に終了する。今回は残土の搬出作業を行わず、残土置場については、発掘調査の対象とならなかった宅地部分に当てることとした。

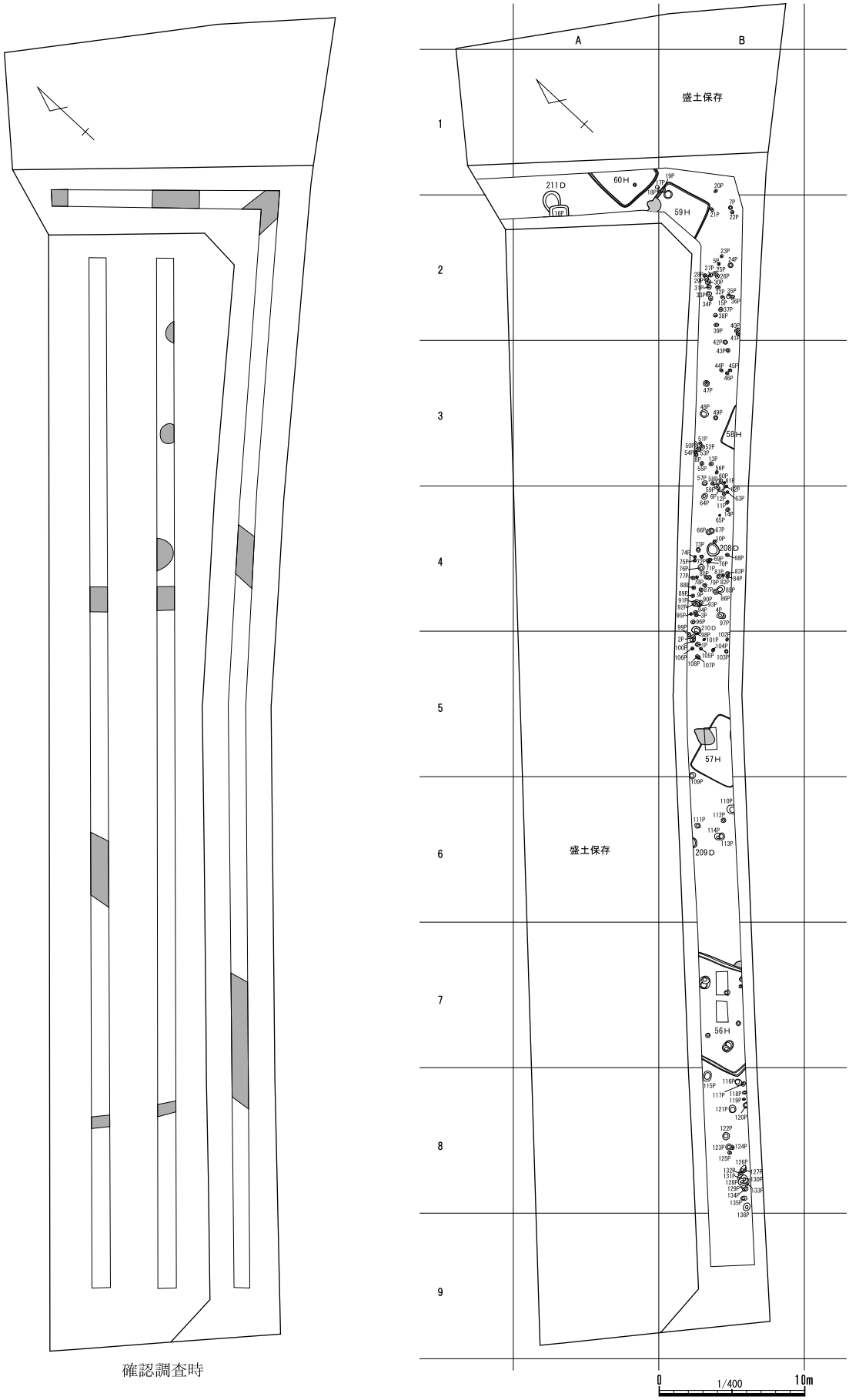
27日　人員導入による発掘調査を開始する。まず調査前の準備として、器材をトラックに積載し、現地に搬入する。その後、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。同日には、56号住居跡（56Ｈ）の精査を開始する。

30日　新たに平安時代の住居跡（57Ｈ）の精査を開始する。56Ｈについては精査開始時か

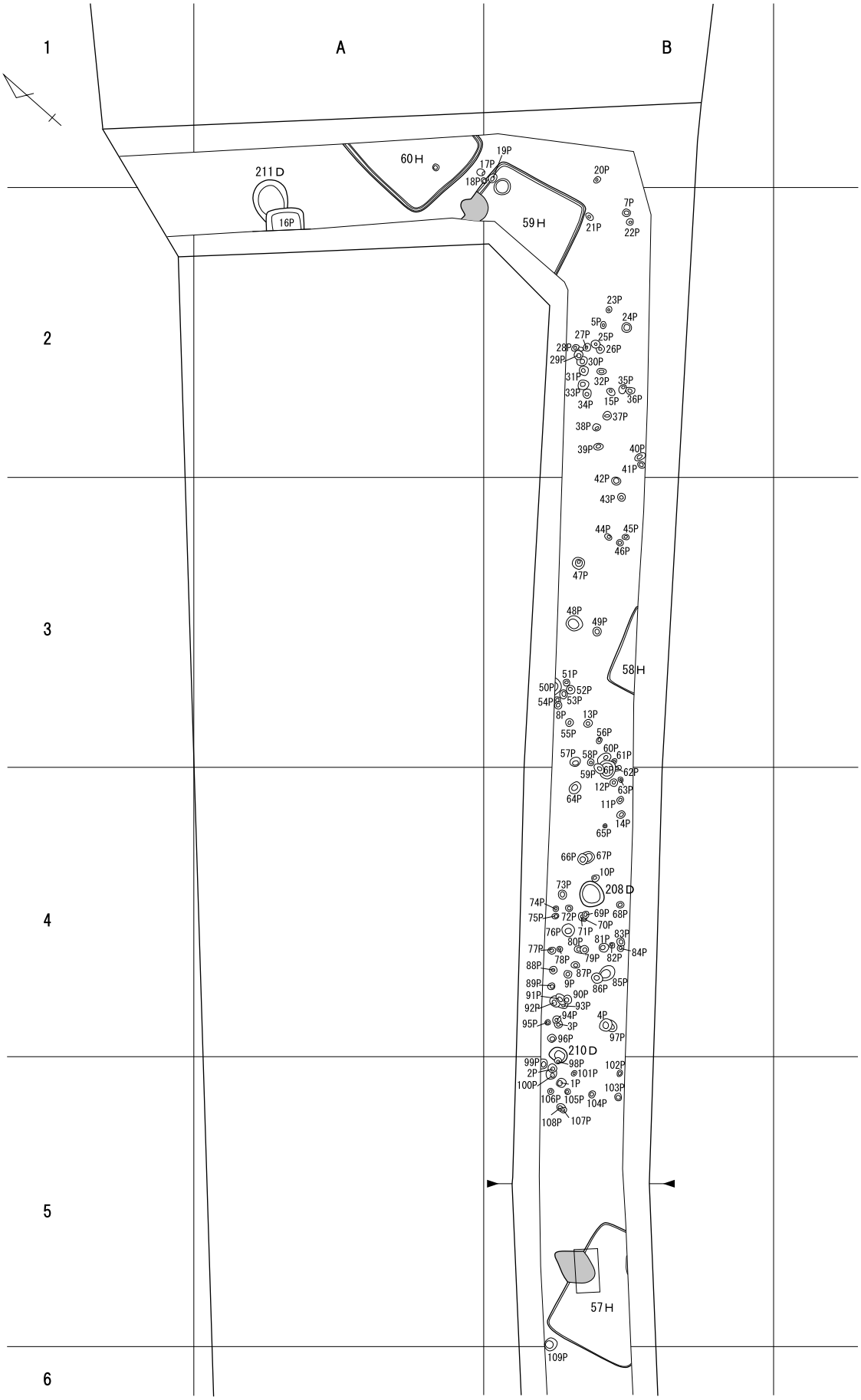


第２図　田子山遺跡の調査地点（1／3.000）

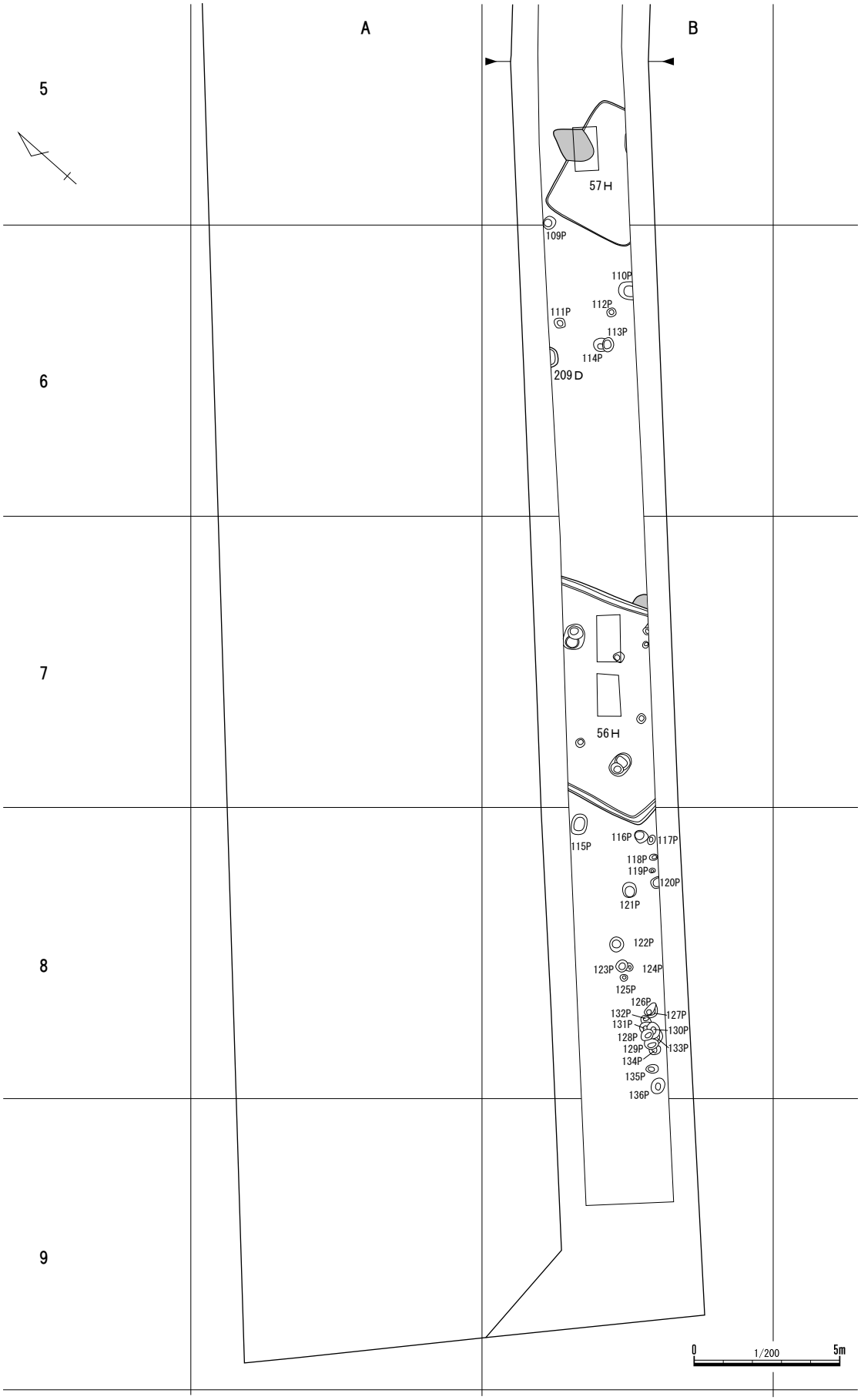
平成30年８月31日現在

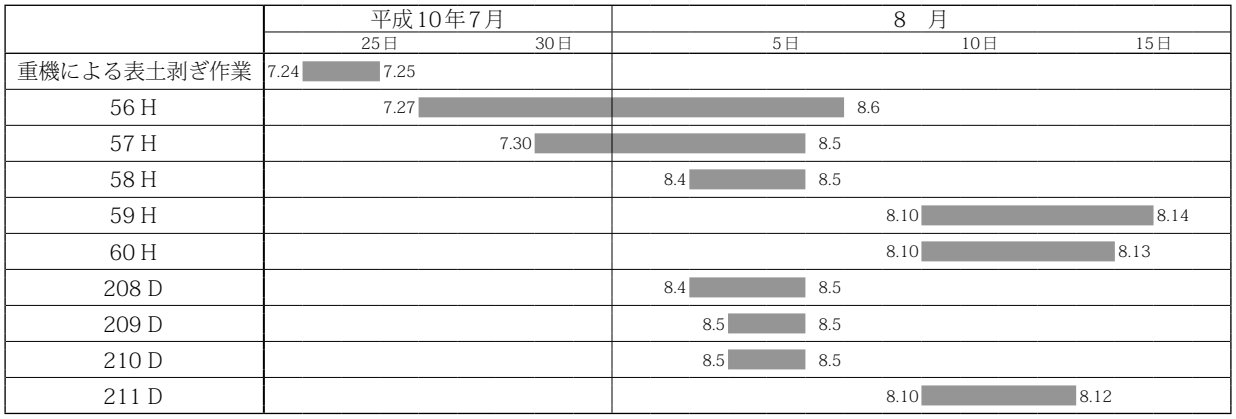


第３図　遺構分布図（1／400）



第４図　遺構分布図（1／200）


A
B
5
6
7
8
9
57H
109P
110P
111P
112P
113P
114P
209D
56H
115P
116P
117P
118P
119P
120P
121P
122P
123P
124P
125P
126P
127P
128P
129P
130P
131P
132P
133P
134P
135P
136P
0
1/200
5m



第２表　田子山遺跡第51地点の発掘調査工程表

ら平安時代の須恵器が出土しており、平安時代のものと考えていたが、覆土下層から床面上には安定して古墳時代後期の土師器が出土したことにより、時期を古墳時代後期のものと判断した。

８月３日　56・57 Hの精査と併行し、新たに平安時代の住居跡（58 H）の精査を開始する。

～７日　57 Hのカマドは比較的に遺存状態が良好で、天井部の粘土の被覆もみられ、土製支脚も出土している。57 Hのカマドの精査は５日に終了した。また、平安時代のものと思われる土坑３基（208～210 D）の精査を開始し、写真撮影・実測をした。

10～13日　新たに古墳時代後期の住居跡（59 H）と平安時代の住居跡（60 H）、縄文時代の土坑（211D）の精査を開始する。59 Hのカマドは両袖部をロームで馬蹄形に残し、その先端に長甕の破片を利用し補強しているタイプのものであった。

14日　59 Hのカマド精査を終了し、すべての調査を完了する。埋戻し作業はなし。

第２節　縄文時代の遺構・遺物

（1）概　要

本地点からは、縄文時代の土坑１基（211 D）が検出された。出土遺物としては、縄文土器１点・石器１点であるが、土器は前期中葉と思われるのもので、石器は草創期のものと思われる有舌尖頭器であり、時代的には伴うものではなかった。

（2）土　坑

211号土坑

遺　　構（第５図）

［位　　置］（Ａ－１・２）グリッド。

［検出状況］南側を16 Ｐに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸不明／短軸1.20m／深さ27㎝。**壁**：緩やかに立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－30°－Ｅ。

［覆　　土］３層に分層できた。

［遺　　物］土器の小破片１点と石器１点が出土した

［時　　期］縄文時代前期中葉か？

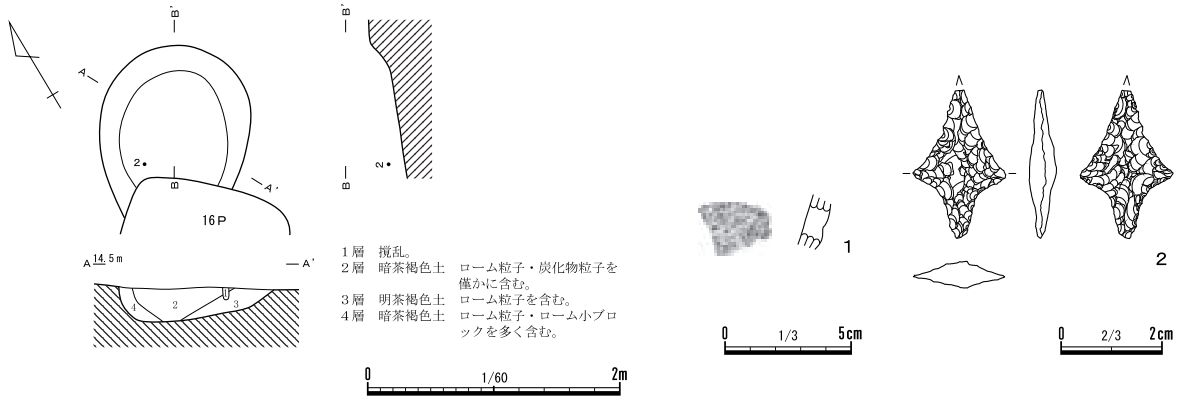
遺　　物（第５図、図版６－１－１・２、第３・４表）

［土　　器］（第５図１、図版６－１－１、第３表）

深鉢の胴部小破片である。遺存状態が悪く、器面は剥落しているため、詳細不明であるが、僅かに繊維を含むことから、縄文時代前期中葉の羽状縄文系土器と思われる。

［石　　器］（第５図２、図版６－１－２、第４表）

有舌尖頭器である。



第５図　211号土坑・出土遺物（1／60・2／3・1／3）

挿図番号 図版番号	種別	部位	法量 (cm)	特　　徴	胎　土	時　期 型　式	出土位置
第5図1 図版6-1-1	深鉢	胴部 小破片	厚 0.8	器面は剥落しており、遺存状態は悪い／明確な文様は不明	金雲母・角閃石・小石を僅かに繊維を含む	前期中葉か	覆土中

第３表　211号土坑出土土器一覧

挿図番号 図版番号	器 種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	特　　徴	出土位置
第5図2 図版6-1-2	有舌尖頭器	チャート	29.4	18.4	5.4	1.3	先端を僅かに欠損／先端部側縁は緩やかに内反／かえし部の張り出しが顕著／やや長めの棒状の舌部／正面の一部に素材面を残す	覆土中(坑底上12cm)

（単位：mm，g）

第４表　211号土坑出土石器一覧

第３節　古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物

（1）概　要

古墳時代後期の遺構としては、住居跡２軒（56・59Ｈ）・ピット５本が検出され、平安時代の遺構としては、住居跡３軒（57・58・60Ｈ）・土坑３基（208～210Ｄ）・ピット131本が検出された。遺物の出土状況としては、特に56Ｈに関しては、覆土上層から平安時代の土師器・須恵器が出土し、調査開始時には平安時代の遺構と考えていたが、覆土下層及び床面上からは古墳時代後期の土器が安定して出土したことから、遺構の時期を古墳時代後期と判断した。

また、調査区域内には多くのピットが存在し、その大部分が平安時代以降に比定できるものと考えられるが、今回詳細な報告は割愛し、第５表に掲載するにとどめることにする。

（２）住居跡

56号住居跡

遺　　構（第６・７図）

［位　　置］（Ｂ－７・８）グリッド。

［検出状況］北側部分は調査区外である。なお、南側部分は第107地点の調査により検出されていたため、その部分を含め本報告で統合した。

［構　　造］**平面形**：方形。**規模**：長軸不明／短軸6.80m／確認面からの深さ34～45㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－15°－Ｗ。**壁溝**：今回の調査部分では、巡らされていた。107地点では、狭小の調査であったため掘り方まで下げてしまった可能性がある。上幅24～35㎝／下幅10～16㎝／深さ４～18㎝。**床面**：東壁の旧カマド前に硬化した面が確認できた。貼床は６～19㎝の厚さで施されていた。**カマド**：旧カマドと思われるものが、東壁の中央付近から検出された。主軸方位はＮ－70°－Ｅ。壁への掘り込みは長さ45㎝・深さ35㎝。前面の床面からは、燃焼部と粘土が検出された。**貯蔵穴**：107地点での検出で、南東コーナー付近の掘り込みが、貯蔵穴と思われる。平面形は隅丸方形。長軸不明／短軸55㎝／深さ24㎝。覆土はＤ－Ｄ´の10・11層。**柱穴**：主柱穴は８本と思われるが、検出されたのは５本である。Ｐ１とＰ４は２本ずつ重複していた。深さは38～91㎝。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］９層に分層できた。床面上からは炭化材と焼土が検出された。

［遺　　物］土師器坏・甑・甕形土器、須恵器坏・壷形土器が出土した。その他、炭化種実（モモ）１点が出土した。

［時　　期］古墳時代後期（７世紀後葉）。

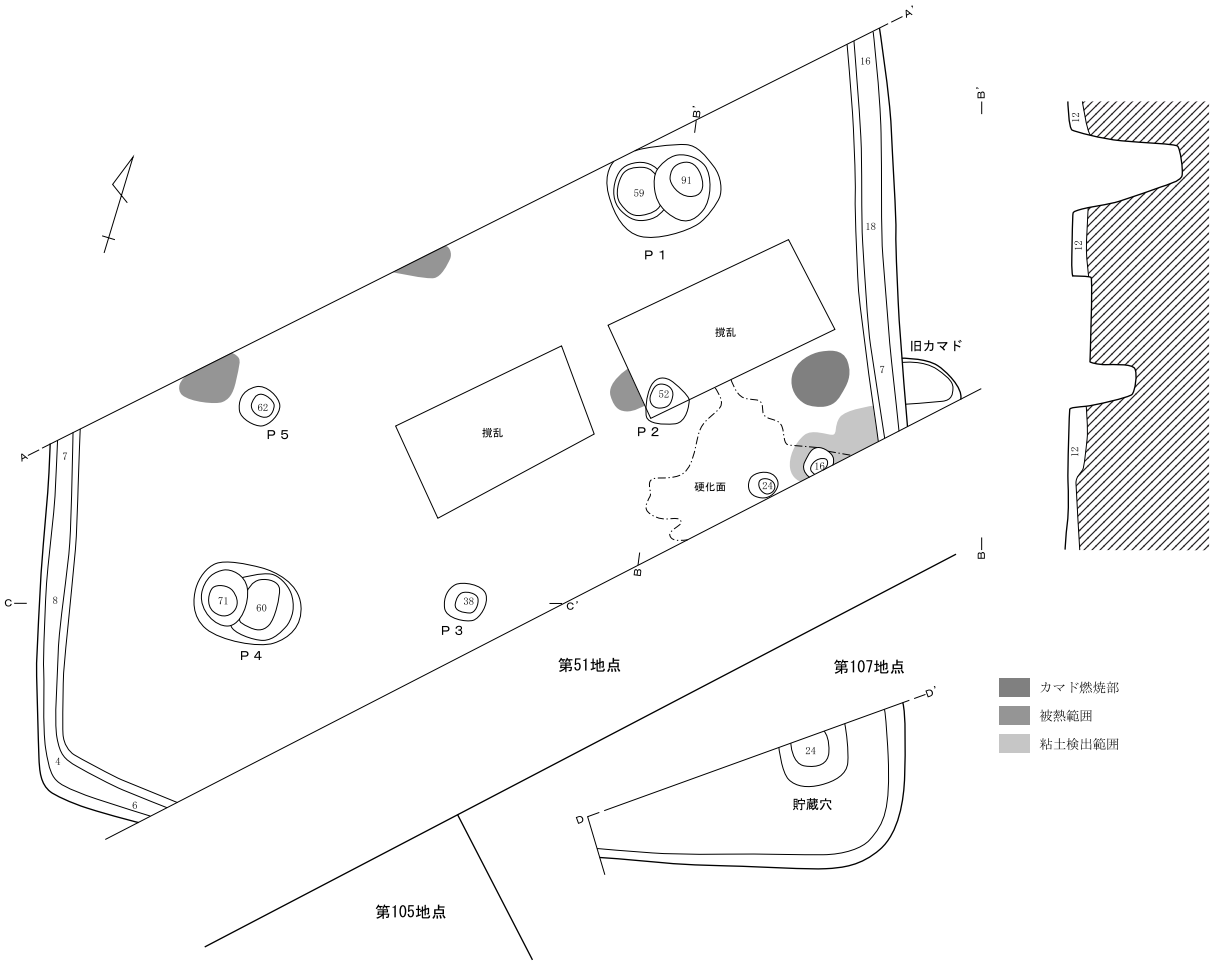
［所　　見］覆土上層からは平安時代（９世紀後葉）の土器が出土したが、下層及び床面上から古墳時代後期（７世紀後葉）の土器が安定して出土したことから時期の設定を行った。また、床面上からは炭化材と焼土が検出されたことから、焼失住居の可能性がある。

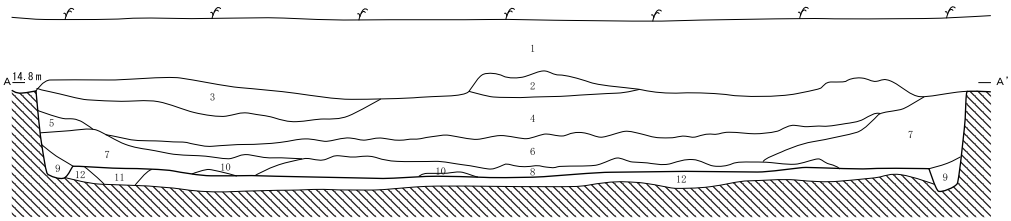
遺　　物（第８図、図版６－２、第６表）

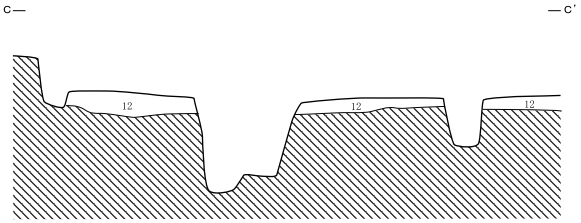
［土　　器］（第８図、図版６－２－１～16、第６表）

第107地点からは、土師器坏形土器（１・２）、須恵器壷形土器（３・４）、土師器甑形土器（５）、土師器甕形土器（６～８）が出土し、すでに報告済みであるが、今回は第51地点で出土した遺物を統合し掲載することとした。なお、第107地点で掲載した８の土師器甕形土器（胴部中位以下）は、今回出土した口縁部と接合が可能となったため、実測し修正を行った。

１・２・９～13は土師器坏形土器、５は土師器甑形土器、６～８・16は土師器甕形土器、14は須恵器坏形土器、15は須恵器埦形土器、３・４は須恵器壷形土器である。また、13～15は覆土上層からの出土で、平安時代（９世紀）の所産のものであり、混入品と考えられる。特に、13は南武蔵型坏で、当市での出土は希少である。

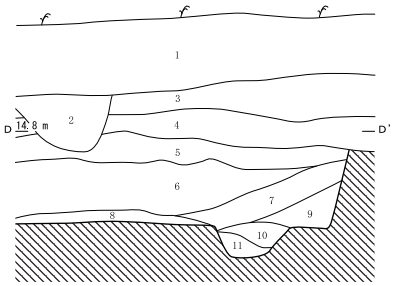






Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'・Ｃ－Ｃ'（51地点）

１層　表土及び撹乱。
２層　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
３層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
４層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
５層　明茶褐色土　ローム粒子を多く、炭化物粒子を含む。
６層　黒色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
７層　暗茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
８層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を含む。
９層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
10層　焼土。
11層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む(貼床)。
12層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む(貼床)。

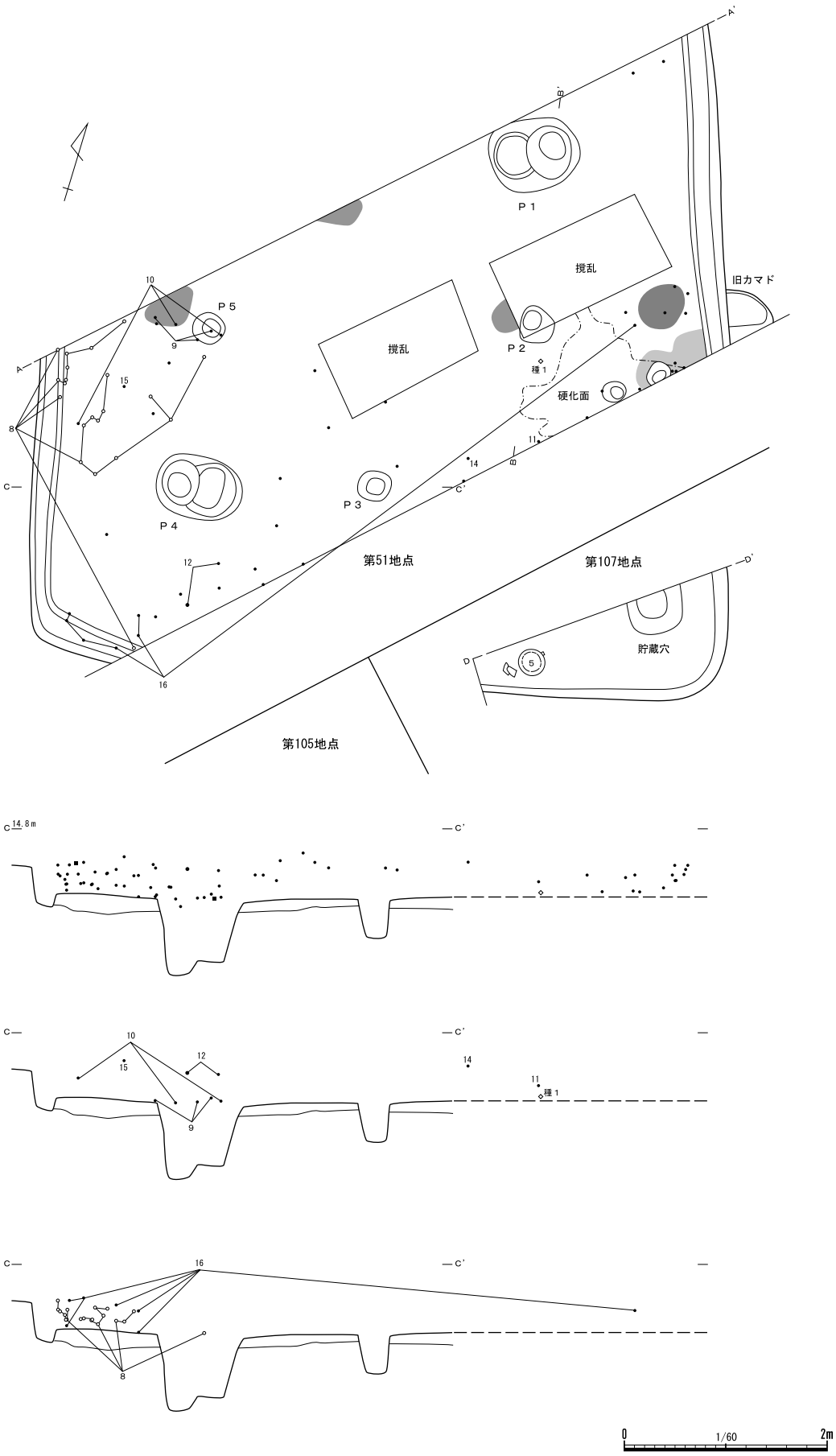


Ｄ－Ｄ'（107地点）

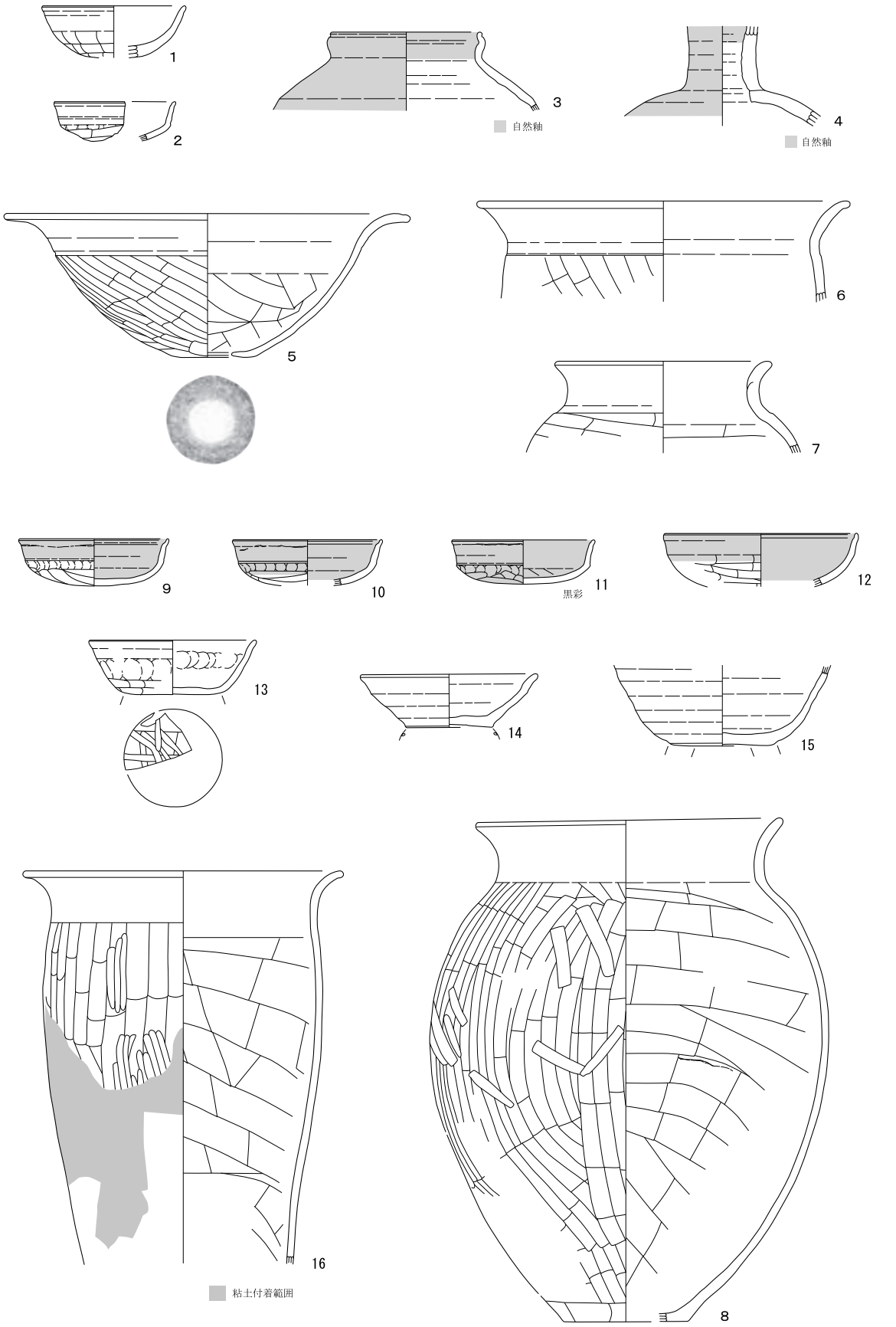
１層　盛土。
２層　撹乱。
３層　表土。
４層　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子を僅かに含む(軟質)。
５層　灰褐色土(7.5YR4/2)　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含み、ローム小ブロックを含む(軟質)。
６層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子を僅かに含み、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を多く、炭化材を含む(軟質)。
７層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を僅かに含む(やや硬質)。
８層　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・ロームブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む(軟質)。
９層　黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む(やや硬質)。
10層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子を僅かに、焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む(軟質)。
11層　灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を多く、炭化材を僅かに含む(軟質)。

0　1/60　2m

第６図　56号住居跡（1／60）



第７図　56号住居跡遺物出土状態（1／60）



１～８　第107地点出土遺物

第８図　56号住居跡出土遺物（1／4）

57 号住居跡

遺　　構（第９・10図）

［位　　置］（Ｂ－５・６）グリッド。

［検出状況］南東部分は調査区域外である。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸4.25m／短軸3.30m／確認面からの深さ25～33㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－75°－Ｅ。**壁溝**：検出されなかった。**床面**：壁際を除き、硬化した面が確認できた。貼床は２～20㎝の厚さで施されていた。**カマド**：北壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はＮ－10°－Ｗ。長さ158㎝／幅121㎝／壁への掘り込み85㎝。袖部は粘土で構築したものと思われるが、確認はできなかった。カマド内から支脚が１点出土した。**貯蔵穴**：検出されなかった。**柱穴**：検出されなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］４層に分層できた。

［遺　　物］須恵器坏・埦・皿形土器、土師器甕形土器、土製品（支脚）が出土した。

［時　　期］平安時代（９世紀末葉）。

遺　　物（第11図、図版７－１、第７表）

［土　　器］（第11図１～10、図版７－１～10、第７表）

１～３は須恵器坏形土器、４は須恵器埦形土器、５・６は須恵器皿形土器、７～10は土師器甕形土器である。

［土 製 品］（第11図11、図版７－１－11）

支脚である。高さ16.3㎝・最大径10.4㎝・重さ1,123ｇ。円筒形状タイプで、上面部分は一部を残し、欠損している。表面には縦方向に粗くヘラ削り面が残る。色調は淡黄褐色を呈し、粘土には砂粒をあまり含まない。カマド内からの出土である。

58 号住居跡

遺　　構（第12図）

［位　　置］（Ｂ－３）グリッド。

［検出状況］大半は調査区域外であり、北壁と北西コーナー付近のみの検出である。

［構　　造］**平面形**：方形か。**規模**：不明／確認面からの深さ17～23㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：不明。**壁溝**：検出されなかった。**床面**：壁から少し離れたところに、硬化した面が確認できた。貼床は２～10㎝の厚さで施されていた。**カマド**：確認できなかった。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：確認できなかった。

［覆　　土］４層に分層できた。

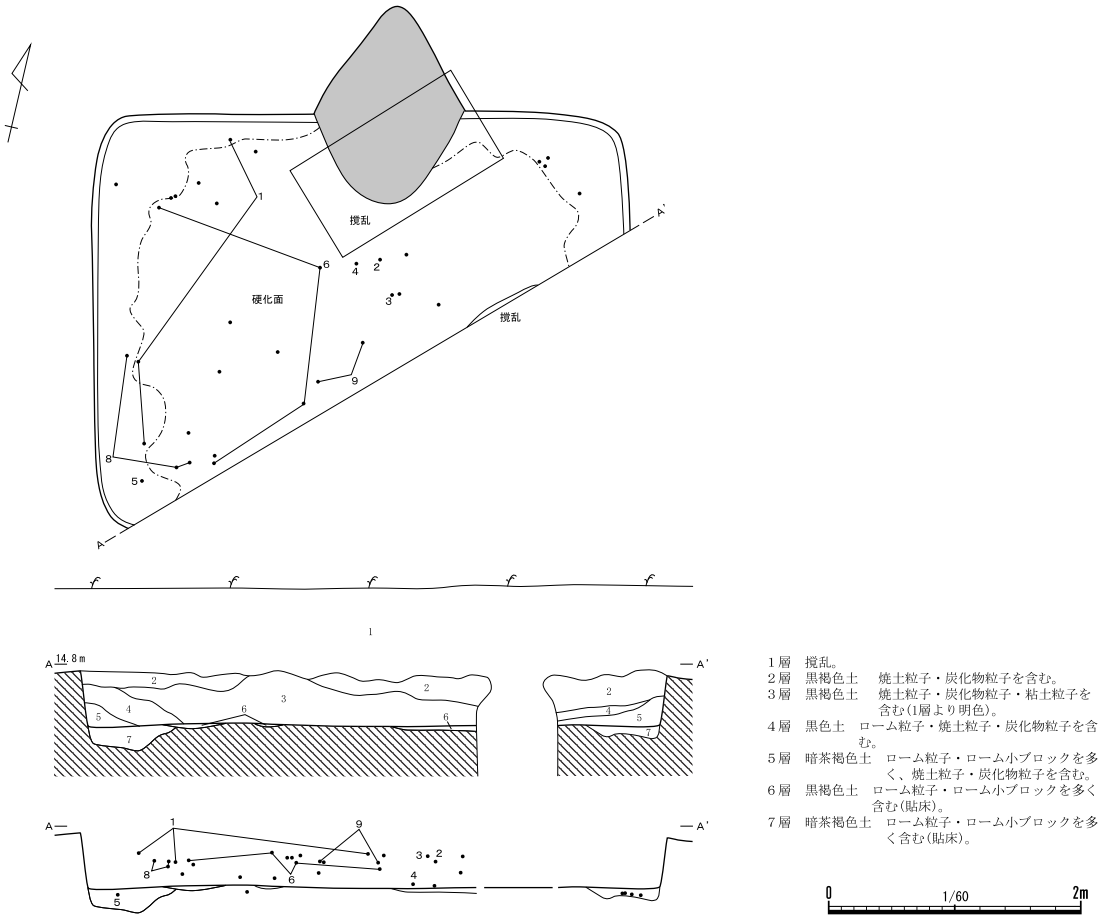
［遺　　物］土師器甕形土器、土師器壷形土器が出土した。

［時　　期］平安時代（９世紀後葉）。

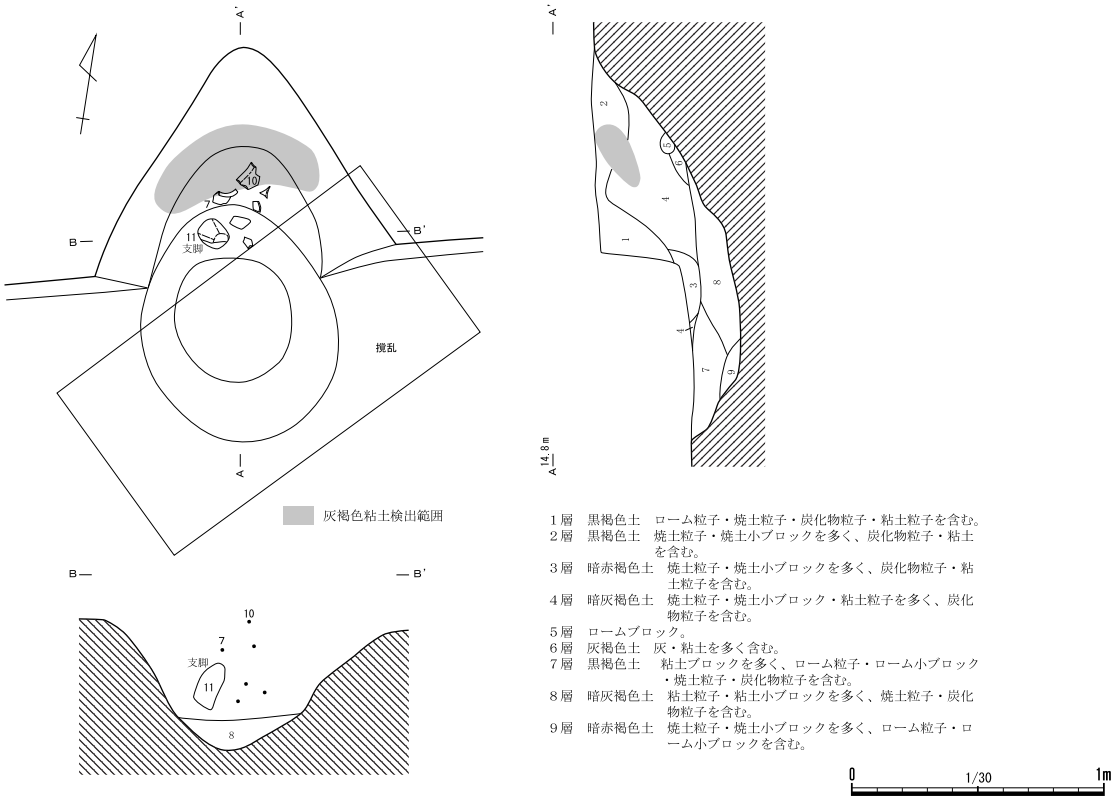
遺　　物（第13図、図版７－２、第８表）

［土　　器］（第13図１・２、図版７－２－１・２、第７表）

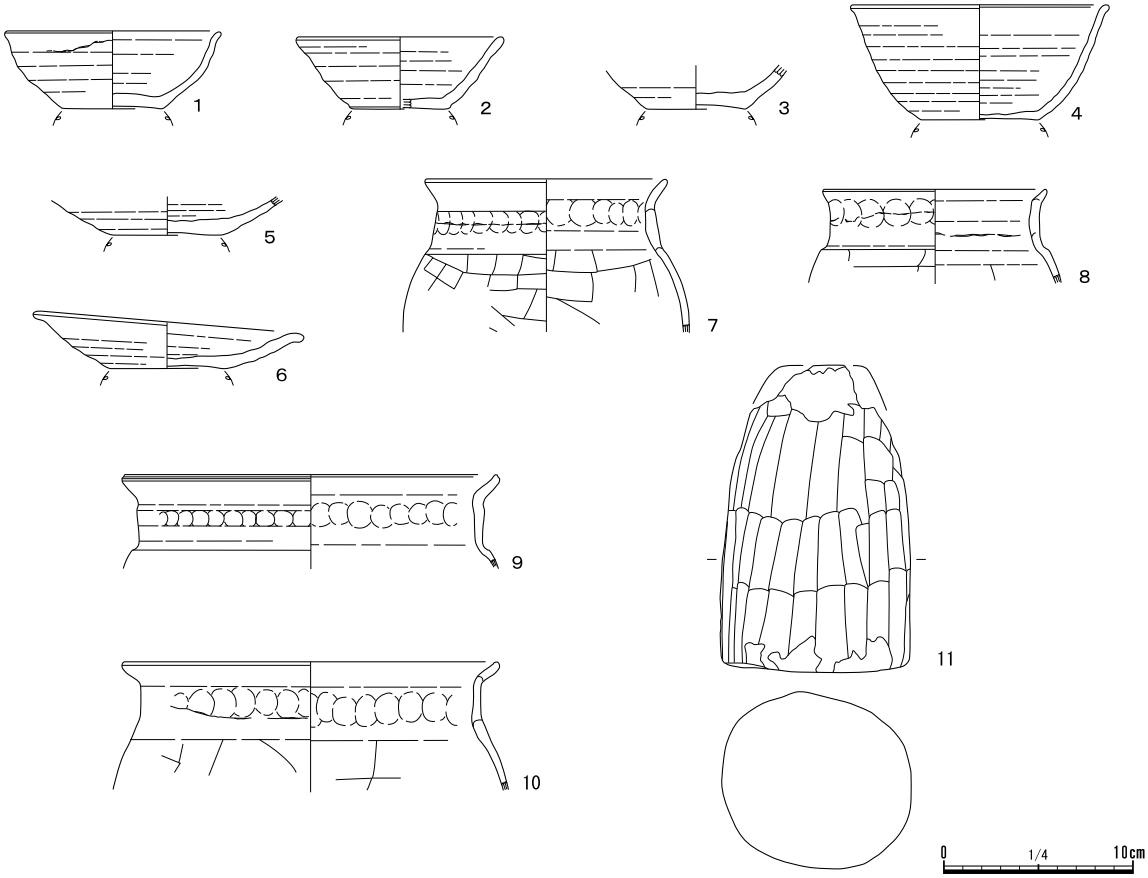
１は土師器甕形土器、２は須恵器壷形土器である。



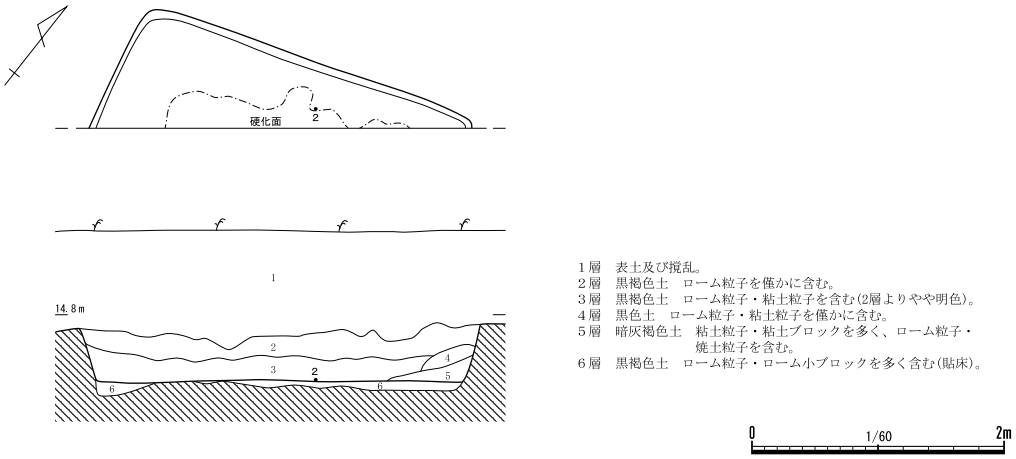
第９図　57号住居跡（1／60）



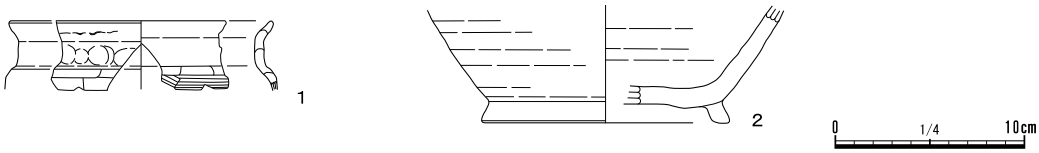
第10図　57号住居跡カマド（1／30）



第11図　57号住居跡出土遺物（1／4）



第12図　58号住居跡（1／60）



第13図　58号住居跡出土遺物（1／4）

59号住居跡

遺　　構（第14・15図）

［位　　置］（Ａ・Ｂ－１・２）グリッド。

［検出状況］住居西側は調査区域外である。

［構　　造］**平面形**：長方形か。**規模**：長軸不明／短軸3.76m／確認面からの深さ22～29㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－76°－Ｅ。**壁溝**：カマドを除き巡らされていた。上幅14～18㎝／下幅４～８㎝／深さ10～17㎝。**床面**：カマド前から住居内側に硬化した面が確認できた。貼床は３～20㎝の厚さで施されていた。**カマド**：北壁に位置する。左袖の一部は調査区域外である。主軸方位はＮ－10°－Ｗ。長さ185㎝／幅200㎝以上／壁への掘り込み55㎝。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して天井部と袖部を構築したものと思われる。両袖部の前面から長甕が出土した。**貯蔵穴**：東コーナーに位置する。平面形は楕円形。長軸60㎝／短軸55㎝／深さ24㎝。**柱穴**：検出されなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］８層に分層できた。

［遺　　物］土師器鉢・甕・甑形土器が出土した。

［時　　期］古墳時代後期（７世紀後葉）。

遺　　物（第16図、図版７－３、第９表）

［土　　器］（第16図１～５、図版７－３－１～５、第９表）

１は土師器鉢形土器、２～５は土師器甕形土器である。

60号住居跡

遺　　構（第17図）

［位　　置］（Ａ－１・２）グリッド。

［検出状況］住居北東側は調査区域外である。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸不明／短軸3.50m／確認面からの深さ２～６㎝。**壁**：調査区際の断面では70°程の角度で立ち上がっている。**長軸方位**：Ｎ－５°－Ｅ。**壁溝**：確認できた範囲では巡らされていた。上幅14～18㎝／下幅４～10㎝／深さ３～16㎝。**床面**：住居付近に硬化した面が確認できた。貼床は４～18㎝の厚さで施されていた。**カマド**：確認できなかった。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：入り口ピットと思われるＰ１のみの検出である。深さ16㎝。貼床下から７本のピットが検出された。

［覆　　土］10層に分層できた。

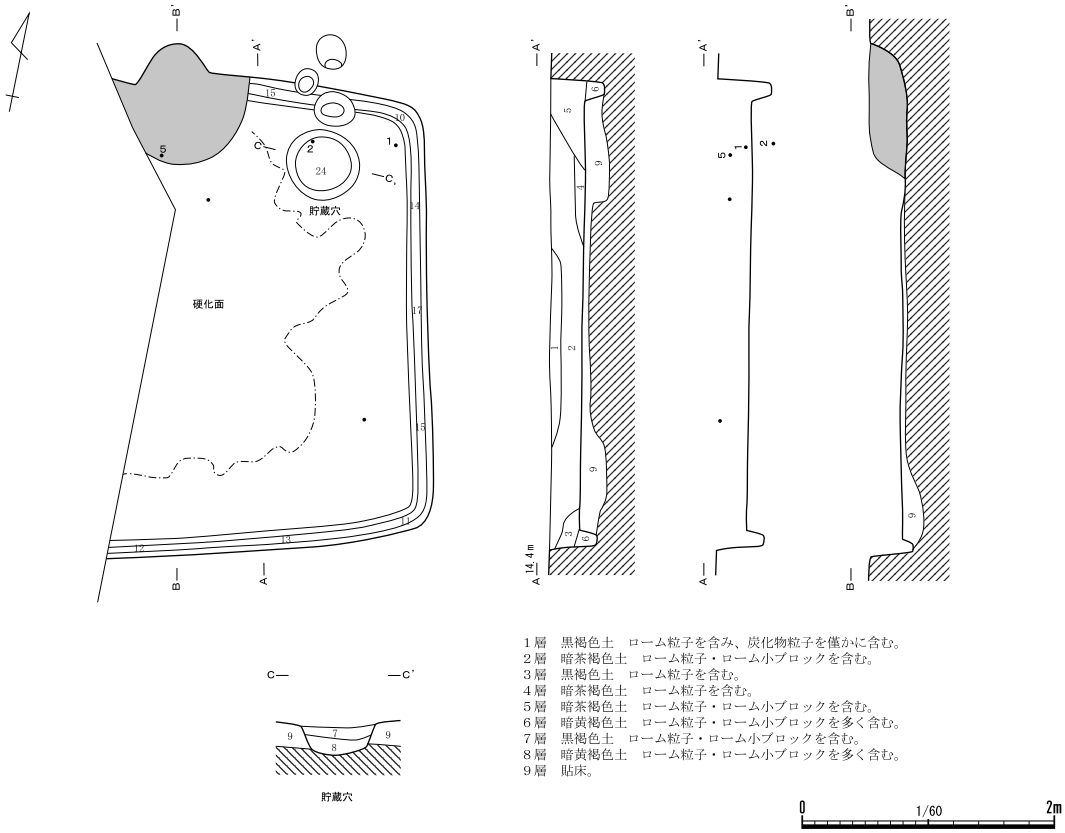
［遺　　物］須恵器坏・皿・埦・壺・甕形土器、土師器甕形土器が出土した。

［時　　期］平安時代（９世紀後葉）。

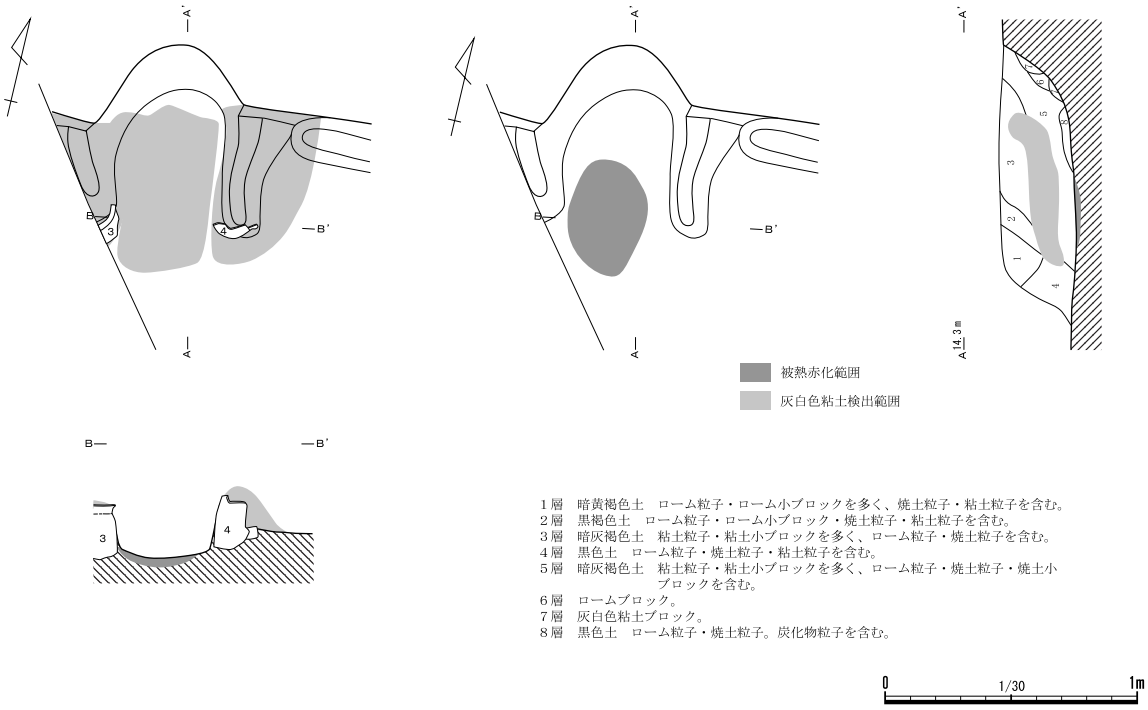
遺　　物（第18図、図版８－１、第10表）

［土　　器］（第18図１～９、図版８－１－１～９、第10表）

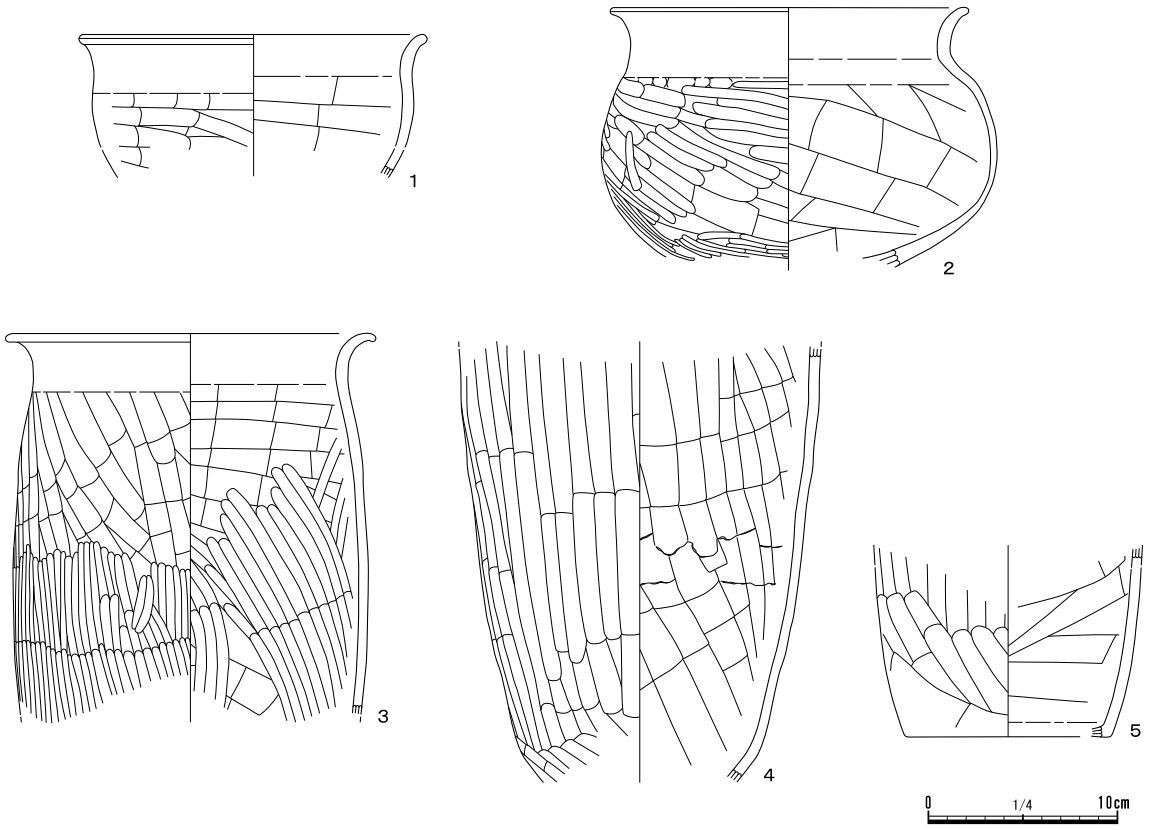
１は須恵器坏形土器、２・３は須恵器皿形土器、４は須恵器埦形土器、５は須恵器壷形土器、６～８は土師器甕形土器、９は須恵器甕形土器である。



第14図　59号住居跡（1／60）



第15図　59号住居跡カマド（1／30）



第16図　59号住居跡出土遺物（1／4）

（3）土坑

208号土坑

遺　　構（第19図）

［位　　置］（Ｂ－４）グリッド。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸0.87m／短軸1.80ｍ／深さ26㎝。**壁**：60°程の角度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－25°－Ｗ。

［覆　　土］ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から平安時代と思われる。

209号土坑

遺　　構（第19図）

［位　　置］（Ｂ－６）グリッド。

［検出状況］北西側は調査区域外である。

［構　　造］**平面形**：楕円形か。**規模**：長軸0.7m／短軸不明／深さ17㎝。**壁**：60°程の角度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－43°－Ｅ。

［覆　　土］２層に分層できた。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から平安時代と思われる。

210号土坑

遺　　構（第19図）

［位　　置］（Ｂ－４・５）グリッド。

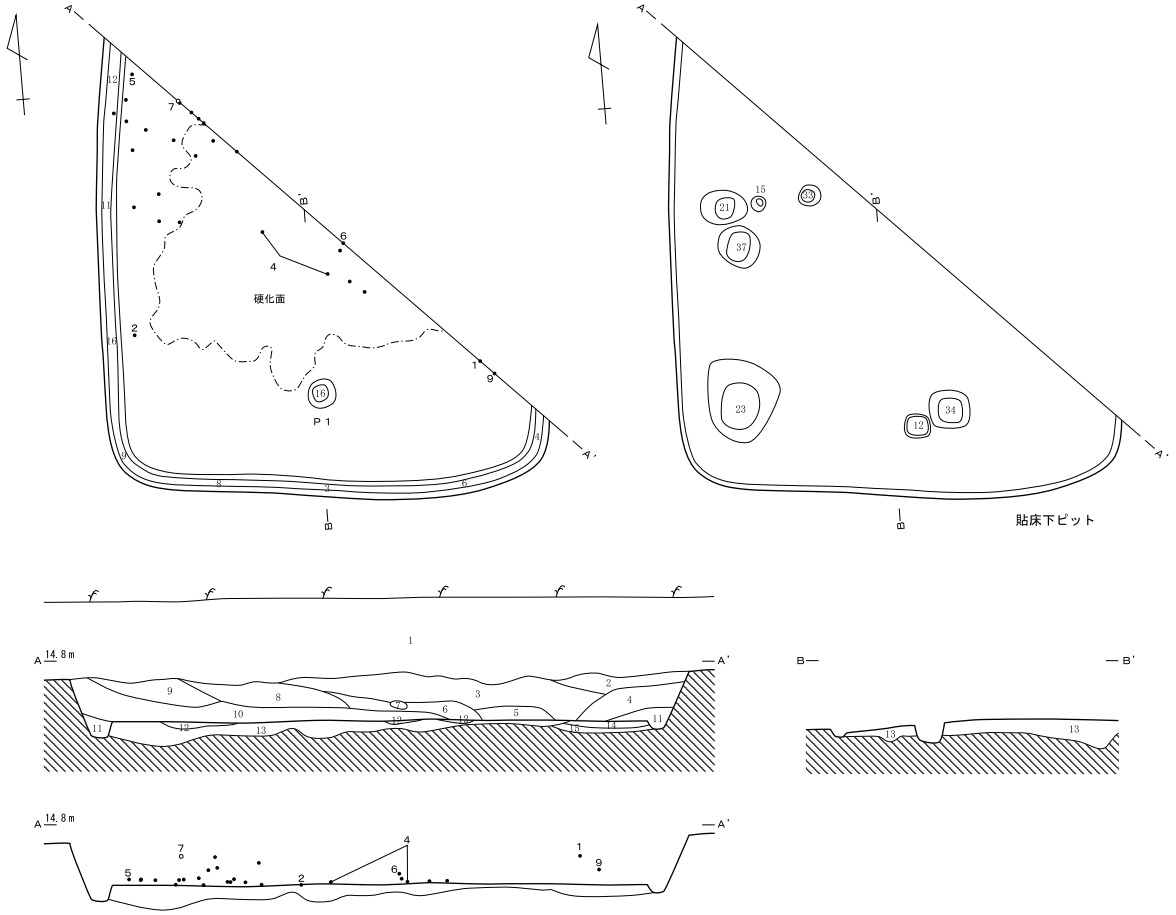
［検出状況］98 Ｐに切られる。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸0.62m／短軸0.50 m／深さ 17㎝。**壁**：北壁は傾斜角度25°・南壁は傾斜角度55°。**長軸方位**：Ｎ－15°－Ｗ。

［覆　　土］ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材小片を含む黒褐色土を基調とする。

［遺　　物］須恵器坏・土師器甕の小破片が出土したが図示できなかった。

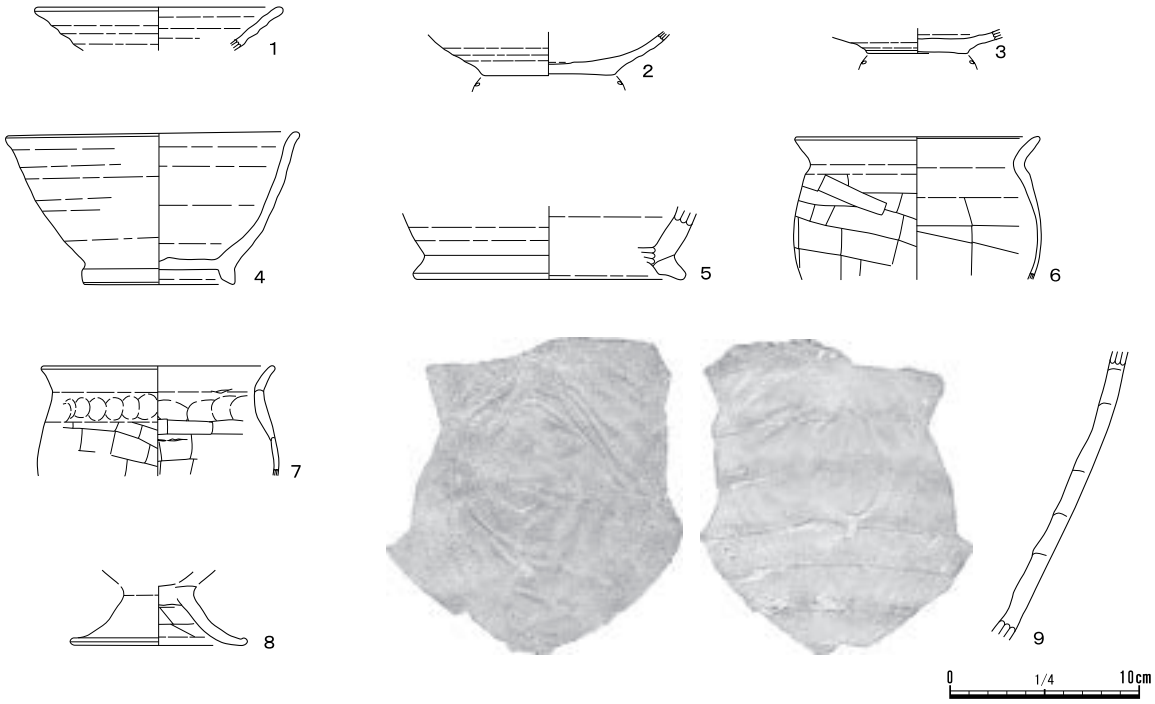
［時　　期］平安時代（９世紀代）。



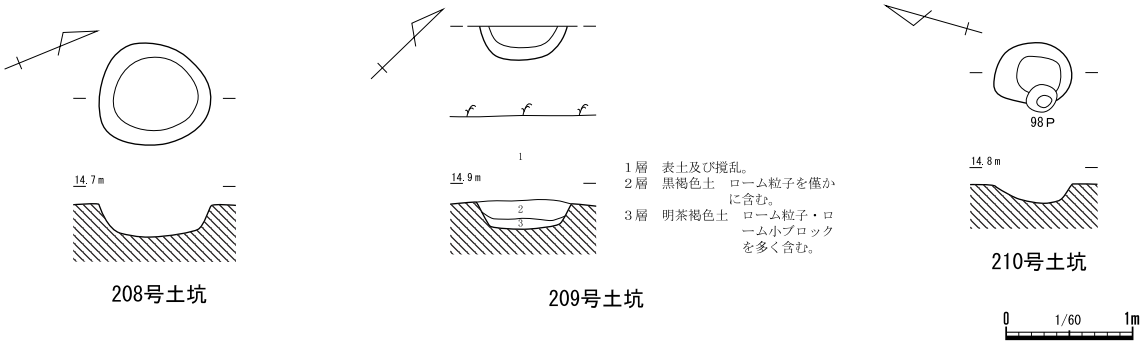
１層　表土及び撹乱。
２層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材小片を含む。
３層　黒褐色土　焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子・炭化物粒子・炭化材小片を含む。
４層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材小片を含む。
５層　暗茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
６層　暗灰褐色土　粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材小片・ローム粒子を含む。
７層　灰白色粘土ブロック。
８層　暗茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。
９層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
10層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。
11層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
12層　灰白色粘土　（貼床）。
13層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む（貼床）。
14層　暗灰褐色土　粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材小片・ローム粒子を含む。（貼床）。
15層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む(貼床)。

0　1/60　2m

第17図　60号住居跡（1／60）



第18図　60号住居跡出土遺物（1／4）



第19図　土坑（1／60）

（4）ピット

調査区域内には数多くのピットが存在するが、覆土の状況から大部分が平安時代のものと推測される。また、今回は土器小破片でも出土したピットについては、その土器から判断して時期を決定すると、古墳時代後期の５本（１～３・８・12Ｐ）、平安時代のピット７本（４・５・７・10・11・15・16Ｐ）である。ここでは、平安時代のピット７本を記述し、その他については、第５表を掲載するにとどめた。

４号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

［位　　置］（Ｂ－４）グリッド。

［構　　造］97Ｐと重複。**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸44㎝／短軸40㎝／深さ30㎝。

［遺　　物］土師器甕形土器の破片が出土した。

［時　　期］平安時代（９世紀後葉か）。

遺　　物（図版８－２－１、第11表）

［土　　器］（図版８－２－１、第11表）

１は土師器甕形土器と思われる。

５号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

［位　　置］（Ｂ－２）グリッド。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸25㎝／短軸18㎝／深さ24㎝。

［遺　　物］土師器甕形土器の小破片１点が出土したが、図示できなかった。

［時　　期］平安時代（９世紀代）。

７号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

［位　　置］（Ｂ－２）グリッド。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸27㎝／短軸26㎝／深さ42㎝。

［遺　　物］須恵器坏形土器、須恵器壷形土器の小破片が出土した。

［時　　期］平安時代（９世紀後葉か）。

遺　　物（図版８－２－１・２、第11表）

［土　　器］（図版８－２－１・２、第11表）

１は須恵器坏形土器、２は須恵器壷形土器である。

10号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

［位　　置］（Ｂ－４）グリッド。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸26㎝／短軸23㎝／深さ44㎝。

［遺　　物］土師器甕形土器の小破片１点が出土したが、図示できなかった。

［時　　期］平安時代（９世紀代か）。

11号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

［位　　置］（Ｂ－４）グリッド。

［構　　造］**平面形**：隅丸長方形。**規模**：長軸26㎝／短軸22㎝／深さ59㎝。

［遺　　物］土師器甕形土器の小破片１点が出土したが、図示できなかった。

［時　　期］平安時代（９世紀代か）。

15号ピット

遺　　構（第３・４図、第５表）

遺構名	位　置	平面形	規模（cm）			備　　考	時　　期
			長軸	短軸	深さ		
1 P	(B-5) G	隅丸方形	30	30	44		古墳後期(7c後葉)
2 P	(B-5) G	隅丸方形	29	29	40	100 P と重複	古墳後期(7c後葉)
3 P	(B-4) G	隅丸方形	不明	27	41	94P と重複	古墳後期(7c後葉)
4 P	(B-4) G	隅丸方形	44	40	30	97P と重複	平安(9c後葉か)
5 P	(B-2) G	楕円形	25	18	24		平安(9c代)
6 P	(B-3･4) G	隅丸方形	63	55	46	59～62P と重複	平安時代か
7 P	(B-2) G	隅丸方形	27	26	42		平安(9c後葉か)
8 P	(B-3) G	隅丸方形	26	25	55	54P と重複	古墳後期(7c後葉)
9 P	(B-4) G	隅丸方形	26	26	10		平安時代か
10 P	(B-4) G	隅丸方形	26	23	44		平安(9c代か)
11 P	(B-4) G	隅丸長方形	26	22	59		平安(9c代か)
12 P	(B-4) G	隅丸方形	26	26	34		古墳後期(7c後葉)
13 P	(B-3) G	楕円形	30	26	18		平安時代か
14 P	(B-4) G	隅丸方形	30	25	25		平安時代か
15 P	(B-2) G	楕円形	30	23	47		平安時代
16 P	(A-2) G	隅丸方形か	130	不明	98	211D を切る	平安時代か
17 P	(A-1) G	楕円形	27	24	46		平安時代か
18 P	(A-1) G	楕円形	22	18	11	59H を切る	平安時代か
19 P	(B-1) G	楕円形	33	27	54	59H を切る	平安時代か
20 P	(B-1) G	楕円形	26	19	15		平安時代か
21 P	(B-2) G	楕円形	30	20	15		平安時代か
22 P	(B-2) G	隅丸方形	24	23	41		平安時代か
23 P	(B-2) G	楕円形	23	19	19		平安時代か
24 P	(B-2) G	隅丸方形	34	33	15		平安時代か
25 P	(B-2) G	楕円形	31	27	24	26P と重複	平安時代か
26 P	(B-2) G	楕円形	28	不明	15	25P と重複	平安時代か
27 P	(B-2) G	楕円形	27	24	26		平安時代か
28 P	(B-2) G	楕円形	27	19	32		平安時代か
29 P	(B-2) G	隅丸方形	32	29	64	30P と重複	平安時代か
30 P	(B-2) G	隅丸方形	35	31	23	29P と重複	平安時代か
31 P	(B-2) G	隅丸方形	31	30	35		平安時代か
32 P	(B-2) G	楕円形	33	22	25		平安時代か
33 P	(B-2) G	隅丸方形	36	33	20		平安時代か
34 P	(B-2) G	隅丸方形	32	28	30		平安時代か
35 P	(B-2) G	楕円形	33	24	27	36P と重複	平安時代か
36 P	(B-2) G	隅丸方形	30	23	29	35P と重複	平安時代か
37 P	(B-2) G	隅丸方形	30	27	28		平安時代か
38 P	(B-2) G	隅丸方形	27	25	30		平安時代か
39 P	(B-2) G	楕円形	33	23	22		平安時代か
40 P	(B-2) G	楕円形	40	23	20		平安時代か
41 P	(B-2) G	隅丸方形	30	29	25		平安時代か
42 P	(B-3) G	楕円形	34	27	14		平安時代か
43 P	(B-3) G	隅丸方形	27	27	31		平安時代か
44 P	(B-3) G	楕円形	27	19	50		平安時代か
45 P	(B-3) G	楕円形	24	18	45		平安時代か
46 P	(B-3) G	隅丸方形	24	22	30		平安時代か
47 P	(B-3) G	隅丸方形	41	40	135		平安時代か
48 P	(B-3) G	隅丸方形	54	51	45		平安時代か
49 P	(B-3) G	隅丸方形	30	28	27		平安時代か
50 P	(B-3) G	隅丸方形	不明	不明	42		平安時代か
51 P	(B-3) G	隅丸方形	23	23	36		平安時代か
52 P	(B-3) G	隅丸方形	30	29	62		平安時代か
53 P	(B-3) G	楕円形	31	26	35		平安時代か
54 P	(B-3) G	隅丸方形	不明	21	36	8P と重複	平安時代か
55 P	(B-3) G	隅丸方形	27	27	27		平安時代か
56 P	(B-3) G	隅丸長方形	23	18	16		平安時代か
57 P	(B-3) G	楕円形	37	33	64		平安時代か
58 P	(B-3) G	隅丸方形	23	22	36		平安時代か
59 P	(B-4) G	楕円形	40	30	54	6P と重複	平安時代か
60 P	(B-3) G	楕円形	51	30	48	6P と重複	平安時代か
61 P	(B-3) G	楕円形	不明	17	25	6P と重複	平安時代か
62 P	(B-4) G	隅丸方形	不明	17	36	6P と重複	平安時代か
63 P	(B-4) G	楕円形	20	16	13		平安時代か
64 P	(B-4) G	楕円形	44	35	46		平安時代か
65 P	(B-4) G	隅丸方形	14	14	54		平安時代か
66 P	(B-4) G	隅丸方形	34	34	23	67P と重複	平安時代か
67 P	(B-4) G	隅丸方形	42	39	20	66P と重複	平安時代か
68 P	(B-4) G	隅丸方形	25	22	28		平安時代か

遺構名	位　置	平面形	規模（cm）			備　　考	時　　期
			長軸	短軸	深さ		
69 P	(B-4) G	隅丸方形	25	23	36	70･71P と重複	平安時代か
70 P	(B-4) G	楕円形	不明	16	29	69･71P と重複	平安時代か
71 P	(B-4) G	楕円形	30	不明	16	69･70P と重複	平安時代か
72 P	(B-4) G	隅丸方形	25	21	21		平安時代か
73 P	(B-4) G	楕円形	32	28	20		平安時代か
74 P	(B-4) G	隅丸方形	18	18	32		平安時代か
75 P	(B-4) G	楕円形	23	19	21		平安時代か
76 P	(B-4) G	隅丸方形	43	43	34		平安時代か
77 P	(B-4) G	隅丸方形	27	24	12		平安時代か
78 P	(B-4) G	隅丸方形	20	19	13		平安時代か
79 P	(B-4) G	隅丸方形	29	29	21		平安時代か
80 P	(B-4) G	隅丸方形	不明	25	14		平安時代か
81 P	(B-4) G	楕円形	32	31	20		平安時代か
82 P	(B-4) G	隅丸方形	18	18	18		平安時代か
83 P	(B-4) G	隅丸方形	26	25	48	84P と重複	平安時代か
84 P	(B-4) G	楕円形	25	23	23	83P と重複	平安時代か
85 P	(B-4) G	楕円形	58	47	22	86P と重複	平安時代か
86 P	(B-4) G	隅丸方形	38	35	30	85P と重複	平安時代か
87 P	(B-4) G	楕円形	30	22	19		平安時代か
88 P	(B-4) G	隅丸方形	26	25	13		平安時代か
89 P	(B-4) G	隅丸方形	25	23	18		平安時代か
90 P	(B-4) G	隅丸方形	30	27	41	91～93P と重複	平安時代か
91 P	(B-4) G	楕円形	44	28	17	90･92･93P と重複	平安時代か
92 P	(B-4) G	隅丸方形	39	32	16	90･91･93P と重複	平安時代か
93 P	(B-4) G	隅丸方形か	不明	不明	16	90～92P と重複	平安時代か
94 P	(B-4) G	楕円形	29	24	47	3P と重複	平安時代か
95 P	(B-4) G	隅丸方形	19	18	41		平安時代か
96 P	(B-4) G	隅丸方形	28	28	20		平安時代か
97 P	(B-4) G	楕円形	不明	36	30		平安時代か
98 P	(B-5) G	隅丸方形	23	22	24		平安時代か
99 P	(B-5) G	隅丸方形	33	不明	33		平安時代か
100 P	(B-5) G	隅丸方形	36	32	21		平安時代か
101 P	(B-5) G	楕円形	21	16	18		平安時代か
102 P	(B-5) G	楕円形	24	18	20		平安時代か
103 P	(B-5) G	隅丸方形	26	22	56		平安時代か
104 P	(B-5) G	隅丸長方形	26	22	26		平安時代か
105 P	(B-5) G	円形	20	20	20		平安時代か
106 P	(B-5) G	隅丸方形	21	21	19		平安時代か
107 P	(B-5) G	隅丸方形	21	20	49	108P と重複	平安時代か
108 P	(B-5) G	楕円形	29	26	19	107P と重複	平安時代か
109 P	(B-5･6) G	隅丸方形	45	40	31		平安時代か
110 P	(B-6) G	隅丸長方形	不明	61	22		平安時代か
111 P	(B-6) G	隅丸方形	37	35	42		平安時代か
112 P	(B-6) G	隅丸方形	32	29	24		平安時代か
113 P	(B-6) G	隅丸長方形	49	38	35	114P と重複	平安時代か
114 P	(B-6) G	楕円形	不明	46	21	113P と重複	平安時代か
115 P	(B-8) G	隅丸長方形	71	53	43		平安時代か
116 P	(B-8) G	隅丸方形	46	42	53		平安時代か
117 P	(B-8) G	楕円形	34	25	48		平安時代か
118 P	(B-8) G	楕円形	28	21	26		平安時代か
119 P	(B-8) G	楕円形	21	16	46		平安時代か
120 P	(B-8) G	隅丸方形	不明	38	35		平安時代か
121 P	(B-8) G	隅丸方形	53	48	45		平安時代か
122 P	(B-8) G	隅丸方形	50	49	64		平安時代か
123 P	(B-8) G	隅丸方形	42	38	30	124P と重複	平安時代か
124 P	(B-8) G	隅丸方形	28	不明	27	123P と重複	平安時代か
125 P	(B-8) G	隅丸方形	25	25	27		平安時代か
126 P	(B-8) G	楕円形	52	25	42	127P と重複	平安時代か
127 P	(B-8) G	楕円形	不明	不明	24	126･132P と重複	平安時代か
128 P	(B-8) G	隅丸方形	42	36	43	129～131P と重複	平安時代か
129 P	(B-8) G	楕円形	48	36	77	128･130･133･134P と重複	平安時代か
130 P	(B-8) G	楕円形	52	不明	61	128･131･133P と重複	平安時代か
131 P	(B-8) G	楕円形	不明	不明	47	128･130･132P と重複	平安時代か
132 P	(B-8) G	楕円形	不明	30	43	127･130･131P と重複	平安時代か
133 P	(B-8) G	楕円形	不明	不明	55	129･130P と重複	平安時代か
134 P	(B-8) G	隅丸方形	39	24	44	129P と重複	平安時代か
135 P	(B-8) G	楕円形	43	29	59		平安時代か
136 P	(B-8) G	楕円形	56	45	64		平安時代か

第５表　ピット一覧

［位　　置］（Ｂ－２）グリッド。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸30㎝／短軸23㎝／深さ47㎝。

［遺　　物］須恵器甕形土器の破片１点が出土した。

［時　　期］平安時代。

遺　　物（図版８－２－１、第11表）

［土　　器］（図版８－２－１、第11表）

１は須恵器甕形土器である。

16号ピット

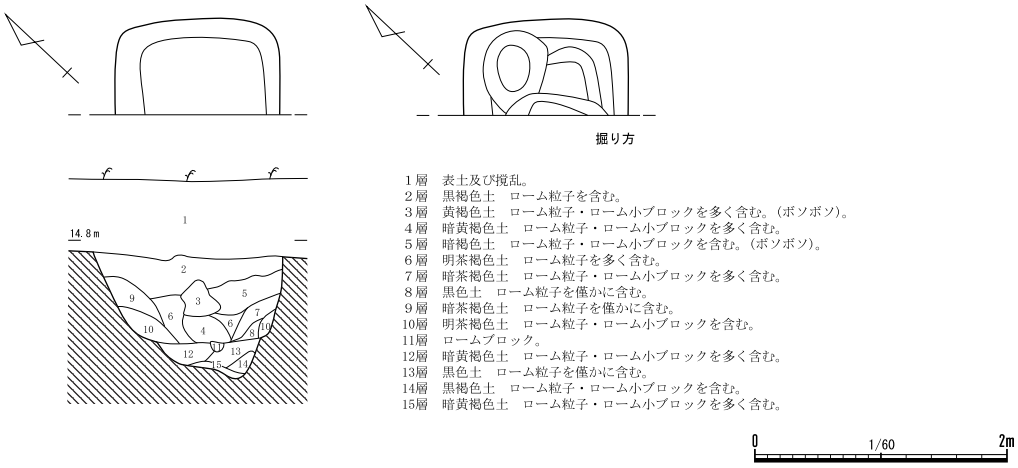
遺　　構（第20図、第５表）

［位　　置］（Ａ－２）グリッド。

［構　　造］211 Ｄを切る。**平面形**：隅丸方形か。**規模**：長軸130㎝／短軸不明／深さ98㎝。約70㎝の深さで平坦になっており、その下は掘り方状にでこぼこしている。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から平安時代と思われる。



第20図　16号ピット（1／60）

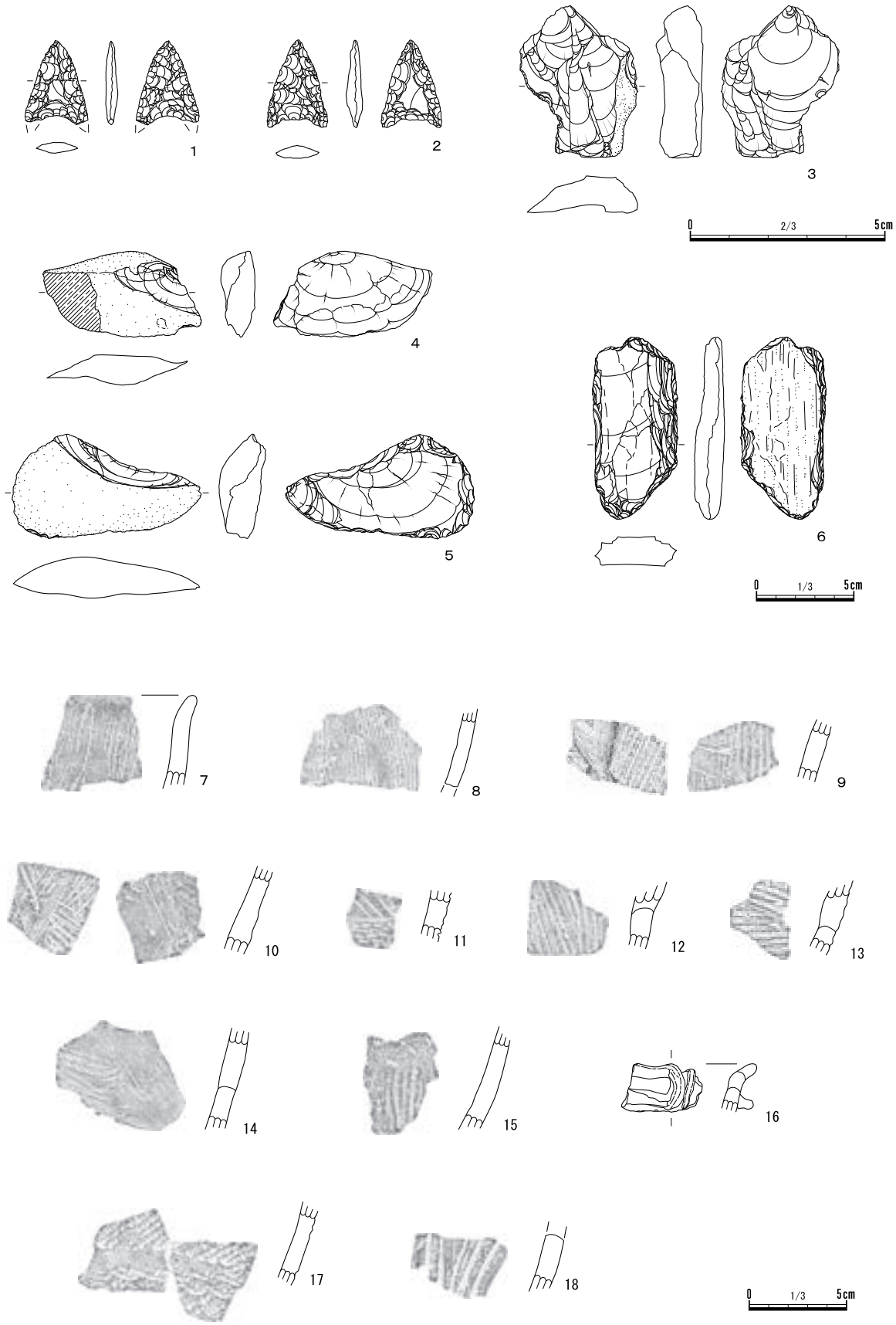
第４節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、縄文時代の土器に分類する。

（１）縄文時代の石器（第21図１～６、図版８－３－１～６、第12表）

１・２は石鏃、３・４は剥片、５は二次加工を有する剥片、６は打製石斧である。



第21図　遺構外出土遺物（2／3・1／3）

（２）縄文時代の土器（第21図７～18、図版８－３－７～18、第13表）

７・８は早期前葉の撚糸文系土器で、どちらも稲荷台式である

９～15は早期後葉の条痕文系土器である。そのうち、９は野島式、10・11は鵜ヶ島台式である。

16・17は中期前葉の五領ヶ台式土器と思われる。

18は中期中葉の勝坂式土器であろうか。

挿図番号	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第８図１ 図版6-2-1	土師器 坏	高 [3.6] 口 (9.9)	口縁部はやや外傾する／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／丸底／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	30%
第８図２ 図版6-2-2	土師器 坏	高 [2.7]	口縁部は外反する／口唇部内面に幅１㎜の沈線がまわる／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／内外面黒彩／いわゆる北武蔵型坏か	胎土の色調は暗茶褐色	砂粒を含み、茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～底部小破片
第８図３ 図版6-2-3	須恵器 坏	高 [6.8] 口 (10.4)	短頸壷か／口縁部は短く直立気味で、途中外面に幅３㎜程のやや太めの沈線がまわる／外面及び口頸部内面に自然釉がかかる／湖西製品か	胎土の色調は灰白色を基調	黒色粒子を僅かに含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部～体部上半20%
第８図４ 図版6-2-4	須恵器 坏	高 [7.0]	長頸壷／頸部は細長く直立する／肩部は緩やかなカーブをもち大きく張る／外面及び頸部上端に自然釉がかかる／湖西製品か	胎土の色調は灰白色を基調	黒色粒子を僅かに含む	ロクロ成形／ロクロ回転は右回転	覆土中	頸部～肩部破片
第８図５ 図版6-2-5	土師器 甑	高 9.9 口 28.0 底 5.7	浅鉢タイプ／口縁部は大きく外販する／底部は穿孔／穿孔は円形で径3.0㎝／底部外面は摩耗している／在地系土師器	明橙色を基調	金雲母・砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居西側の床面上	完形品
第８図６ 図版6-2-6	土師器甕	高 [7.0] 口 (25.8)	長甕／口縁部は「く」の字状に屈曲する／口唇部は丸い／最大径は口縁部／在地系土師器	内面：明橙色／外面：暗橙色	砂粒を多く、角閃石・石英・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～胴部上半20％
第８図７ 図版6-2-7	土師器 甕	高 [6.4] 口 (15.0)	小型丸甕か／口縁部は「コ」の字状を呈する／胴部は肩を張り球胴になるものであろう／外面及び口縁部内面は煤けている／在地系土師器	淡茶褐色	石英・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～胴部上半30％
第８図８ 図版6-2-8	土師器 甕	高 34.8 口 21.2 底 (8.6)	第107地点出土と接合したため、再実測により統合した／大型丸甕／胴部は球胴状を呈する／底部は平底／器面全体が黒いため黒色土器の可能性あり／在地系土師器	内面：明橙色／外面：淡茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	南東壁寄りの覆土中（床上5～26㎝）から散在的	70%
第８図９ 図版6-2-9	土師器 坏	高 3.3 口 10.4	いわゆる比企型坏／口縁部は外傾する／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／内面及び外面口縁部は赤彩／入間系土師器	胎土は淡茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：回転ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	住居北西際の覆土中（床上5～9㎝）	90%
第８図10 図版6-2-10	土師器 坏	高 [3.2] 口 10.4	いわゆる比企型坏／口縁部は外傾する／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は淡橙色	砂粒・小石を含む	内面：回転ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	住居北西際の覆土中（床上7～21㎝）	50%
第８図11 図版6-2-11	土師器 坏	高 3.1 口 (10.0)	いわゆる比企型坏／口縁部は外傾する／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／内面底部を除き全体が黒く煤けているため黒色土器としたが不明／入間系土師器と思われる	胎土は淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	住居中央からやや東壁寄りの覆土中（床上14㎝）	30%
第８図12 図版6-2-12	土師器 坏	高 [3.7] 口 (13.4)	いわゆる続比企型坏／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部と底部との境に稜もつ／内面及び外面口縁部は赤彩／入間系土師器と思われる	胎土は淡茶褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：回転ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居南コーナーの覆土中（床上31㎝）	30%
第８図13 図版6-2-13	土師器 坏	高 3.8 口(11.6) 底 (6.8)	南武蔵型坏／口縁部は僅かに外反する／底部は平底／外面体部下半から底部にかけて黒斑	淡茶褐色	砂粒を僅かに含む	内面：回転ナデ／外面：口縁部は横ナデ、体部は指頭押捺痕、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	覆土中	30%

第６表　56号住居跡出土土器一覧（１）

挿図番号	器種	法量(㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第8図14 図版6-2-14	須恵器 坏	高 3.7 口 (12.2) 底 (6.1)	口縁部は僅かに外反する／東金子窯製品	灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央付近の覆土中（床上38㎝）	20%
第8図15 図版6-2-15	須恵器 埦	高 [5.7] 底 7.4	大型で深身タイプ／底部は平底／東金子窯製品	淡灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部周辺ヘラ削り	住居北西際の覆土中（床上44㎝）	体部上半～底部70％
第8図16 図版6-2-16	土師器 甕	高 [27.2] 口 22.2	長甕／口縁部は大きく外反する／胴部上半に僅かに膨らみをもつ／最大径は口縁部／胴部中位以下に粘土が付着／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居南コーナーから北東壁にかけての覆土中（5～39㎝）から散在的	口縁部～胴部下半60％

第６表　56号住居跡出土土器一覧（２）

挿図番号	器種	法量(㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第11図1 図版7-1-1	須恵器 坏	高 4.1 口 11.5 底 5.4	口縁部は僅かに外反する／底部は平底／鳩山製品	濃灰色	白色針状物質・白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居西半部の覆土中（床上19～29㎝）から散在的	60%
第11図2 図版7-1-2	須恵器 坏	高 3.9 口 11.0 底 5.2	口縁部は僅かに肥厚し、外傾する／底部は平底／東金子窯製品	青灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央の覆土中（床上21㎝）	30%
第11図3 図版7-1-3	須恵器 坏	高 [2.3] 底 (5.4)	体部下半～底部破片／底部は平底／東金子窯製品か	青灰色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央の覆土中（床上25㎝）	体部下半～底部60％
第11図4 図版7-1-4	須恵器 埦	高 6.1 口 (13.6) 底 (6.2)	深身タイプ／口縁部は僅かに外反する／底部は平底／器面全体が黒く煤けているようで黒色土器か／東金子窯製品	胎土は灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央の覆土中（床上3㎝）	30%
第11図5 図版7-1-5	須恵器 皿	高 [2.1] 底 5.6	体部下半～底部破片／底部は平底／鳩山製品	淡灰色	白色針状物質・黒色粒子（磁鉄鉱か）を多く、白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居南西コーナーの床面上	体部下半～底部70％
第11図6 図版7-1-6	須恵器 皿	高 2.7 口 14.4 底 6.0	口縁部は外反する／底部は平底／内面に自然釉が被覆／東金子窯製品	暗青灰色を基調	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居西半部の覆土中（床上14～25㎝）から散在的	90%
第11図7 図版7-1-7	土師器 甕	高 [8.1] 口 (12.8)	小型甕／「コ」の字口縁／胴部上半に膨らみをもつ／頸部に輪積み痕が残る	暗茶褐色を基調	雲母・角閃石・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	カマド内	口縁部～胴部中位50％
第11図8 図版7-1-8	土師器 甕	高 [5.0] 口 (11.8)	小型甕／「コ」の字口縁／頸部と胴部との境に段をもつ／頸部に輪積み痕が残る	明茶褐色を基調	雲母・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	住居南西コーナーの覆土中（床上15～21㎝）から散在的	口縁部～胴部上半40％
第11図9 図版7-1-9	土師器 甕	高 [5.0] 口 (20.0)	いわゆる武蔵型甕／「コ」の字口縁／頸部と胴部との境に強い段をもつ／頸部に輪積み痕が残る	明茶褐色	雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	住居中央からやや南寄りの覆土中（床上19㎝）	口縁部破片
第11図10 図版7-1-10	土師器 甕	高 [6.8] 口 (18.0)	いわゆる武蔵型甕／「コ」の字口縁／頸部と胴部との境に弱い段をもつ／頸部に輪積み痕が残る	暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く、雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	カマド内	口縁部破片

第７表　57号住居跡出土土器一覧

挿図番号	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第13図1 図版7-2-1	土師器 甕	高 [3.6] 口 (14.0)	小型甕／「コ」の字口縁／頸部と胴部の境は強い段をもつ	暗茶褐色	砂粒をやや多く、雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	覆土中	口縁破片
第13図2 図版7-2-2	須恵器 壷	高 [6.3] 底 (13.2)	大型壷か／高台／内面に自然釉が被覆／東金子窯製品か	灰色	白色砂粒・黒色粒子・小石を含む	ロクロ成形	北壁寄りの床面上	胴部下半～底部 40％

第８表　58号住居跡出土土器一覧

挿図番号	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第16図1 図版7-3-1	土師器 鉢	高 [7.5] 口 (18.4)	口縁部は外反する／口唇部は丸い／最大径は口縁部にもつ／器面全体が暗茶褐色であるため、黒色土器の可能性あり／在地系土師器	胎土は暗橙色	砂粒をやや多く、雲母・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	北東コーナーの床面上	口縁部～胴部中位 20％
第16図2 図版7-3-2	土師器 甕	高 [13.9] 口 (19.0)	丸甕／口縁部は外反する／頸部と胴部との境は稜をもつ／最大径は胴部下半にもつ／在地系土師器	淡黄褐色	金雲母・砂粒を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴の覆土中（坑底上７㎝）	口縁部～胴部下半 70％
第16図3 図版7-3-3	土師器 甕	高 [20.7] 口 (19.6)	長甕／口縁部は外反する／口唇部は薄くシャープな作り／頸部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器／４と別個体	明橙色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後胴部中位以下に粗いヘラ磨き調整	カマド右袖の補強材（正置）	口縁部～胴部下半 50％
第16図4 図版7-3-4	土師器 甕	高 [23.3]	長甕／底部近くはやや内屈する／在地系土師器／３と別個体	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	カマド右袖の補強材（倒置）	胴部上半～下半 40％
第16図5 図版7-3-5	土師器 甕	高 [10.2] 底 (10.6)	底部は平底／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、雲母・角閃石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	カマド内（床上18㎝）	胴部下半～底部 30％

第９表　59号住居跡出土土器一覧

挿図番号	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第18図1 図版8-1-1	須恵器 坏	高 [2.3] 口 (13.2)	浅身／皿か／口縁部の外反は弱い／東金子窯製品	暗茶褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転	住居南東コーナーの覆土中（床上23㎝）	口縁部～体部下半 25％
第18図2 図版8-1-2	須恵器 皿	高 [2.3] 底 7.0	底部は平底／東金子窯製品か	淡灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	西壁寄りの床面上	体部中位～底部 30％
第18図3 図版8-1-3	須恵器 皿	高 [1.3] 底 5.3	底部は平底／東金子窯製品か	濃青灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	体部下半～底部 90％
第18図4 図版8-1-4	須恵器 埦	高 8.1 口 15.5 底 8.0	口縁部は僅かに外反する／高台／底部は平底／東金子窯製品か	青灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央の床面上	70%
第18図5 図版8-1-5	須恵器 壺	高 [3.9] 底 (14.4)	高台／内外面に自然釉が被覆／東金子窯製品か	淡灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居北西際の覆土中（床上５㎝）	胴部下半～底部 15％以下
第18図6 図版8-1-6	土師器 甕	高 [7.6] 口 (13.0)	小型甕／「く」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／外面は黒斑	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り	住居中央の覆土中（床上８㎝）	口縁部～胴部下半 25％

第10表　60号住居跡出土土器一覧（１）

挿図番号	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第18図7 図版8-1-7	土師器 甕	高 [5.9] 口 (12.4)	小型甕／屈曲が弱いが「コ」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／外面は黒斑	明茶褐色	砂粒をやや多く、雲母・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り／頸部内外面に指頭押捺痕	住居北西際の覆土中（床上23㎝）	口縁部～胴部中位20％
第18図8 図版8-1-8	土師器 甕	高 [3.4] 底 (9.4)	小型甕の脚台部／短脚／裾部は大きく外反する	明茶褐色	雲母・角閃石を含む	脚部：内外面横ナデ	覆土中	脚台部20％
第18図9 図版8-1-9	須恵器 甕	厚 1.0	胴部破片／鳩山製品	濃青灰色	白色砂粒・小石を含み、白色榛針状物質を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：ナデがていねいに施されるが、僅かに平行叩き目痕が残る	住居南東コーナーの覆土中（床上12㎝）	胴部破片

第10表　60号住居跡出土土器一覧（２）

図版番号	遺構名	器 種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	成形及び調整	遺存度	時　期
図版8-2-1	4P	土師器 甕	厚 0.8	いわゆる武蔵型甕／口縁部は外反する／やや器厚は厚め	暗茶橙色	白色砂粒・小石を含む	内外面：横ナデ	口縁部破片	平安時代（9c後葉か）
図版8-2-1	7P	須恵器 坏	高 (1.7) 底 [6.0]	平底／鳩山製品	淡灰色	白色針状物質・砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	体部下半～底部30％	平安時代（9c後葉か）
図版8-2-2	7P	須恵器 壷	厚 0.6	小型壷か／器厚が薄くシャープな作り／丸みの体部／東金子窯製品か	青灰色	白色砂粒・小石を含む	内面：当て道具痕／外面：平行叩き目痕	体部破片	平安時代（9c代か）
図版8-2-1	15P	須恵器 甕	高 (3.8)	平底／東金子窯製品か	灰色	白色砂粒をやや多く含む	内外面：ナデ	底部破片	平安時代

第11表　平安時代ピット出土土器一覧

挿図番号 図版番号	器 種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	特　　徴	出土位置
第21図1 図版8-3-1	石鏃	チャート	21.6	16.2	3.1	0.9	左右対称の凹基無茎形／側縁はほぼ直線状／基部の抉りは浅く弧状／両脚部の末端を欠損	56H
第21図2 図版8-3-2	石鏃	チャート	22.6	15.6	4.2	1.1	左右対称の凹基無茎形／側縁はほぼ直線状／基部の抉りは浅く台形状／裏面に素材面を残す	57H
第21図3 図版8-3-3	剥片	黒曜石	39.1	30.2	12.1	10.4	正面左側縁に微細な剥離面が連続する／打点欠損	56H
第21図4 図版8-3-4	剥片	ホルンフェルス	44.2	81.6	17.6	55.9	正面に原礫面を多く残す	56H
第21図5 図版8-3-5	二次加工を有する剥片	砂岩	53.5	97.2	23.9	111.4	裏面周縁に剥離が施される／削器か／正面に原礫面を残す	56H
第21図6 図版8-3-6	打製石斧	緑泥片岩	93.5	44.1	15.5	83.2	上端部を欠損／短冊形か／両側縁に調整剥離／裏面に原礫面を残す	56H

（単位：㎜，g）

第12表　遺構外出土石器一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文　様　・　特　徴	胎　土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第21図7 図版8-3-7	深鉢	口縁	厚 1.0	口縁部はやや外反する／口唇部は肥厚しない	Ｒの撚糸文を縦位に施文／色調は暗茶褐色	繊維・角閃石・雲母・白色砂粒を含む	早期前葉 （撚糸文系：稲荷台式）	遺構外 (B-2)G
第21図8 図版8-3-8	深鉢	胴	厚 0.6	僅かに外傾する	Ｒの撚糸文を縦位に施文／縄目は１よりやや細かい／色調は暗茶褐色	繊維・白色砂粒を含む	早期前葉 （撚糸文系：稲荷台式）	遺構外 (A-1・2)G
第21図9 図版8-3-9	深鉢	胴	厚 0.9	僅かに外傾する	隆帯は断面三角形／区画内は沈線が充填される／内面に縦位条痕文／色調は暗茶褐色	繊維・角閃石・白色砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系：野島式）	遺構外 (B-2)G
第21図10 図版8-3-10	深鉢	胴	厚 0.9	僅かに外傾する	Ｖ字状の太沈線に斜行沈線が施文される／内面に斜位条痕文／色調は淡茶褐色	繊維・石英・雲母・角閃石・白色砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系：鵜ケ島台式）	56 H
第21図11 図版8-3-11	深鉢	胴	厚 0.9	僅かに外傾する	半截竹管による横位の押引文の上位に斜行沈線文を施文／内面に縦位条痕文／色調は淡茶褐色	繊維・白色砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系：鵜ケ島台式）	遺構外 (B-1)G
第21図12 図版8-3-12	深鉢	胴	厚 1.0	僅かに外傾する	外面に縦位条痕文／色調は暗茶褐色	繊維・角閃石・白色砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系）	59H
第21図13 図版8-3-13	深鉢	胴	厚 0.9	僅かに外傾する	外面に斜位条痕文／色調は淡茶褐色を基調	繊維・角閃石・砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系）	遺構外 (B-8)G
第21図14 図版8-3-14	深鉢	胴	厚 1.0	僅かに外傾する	外面に斜位条痕文、内面も斜位条痕文か／色調は淡茶褐色を基調	繊維・石英・雲母・砂粒を含む	早期後葉 （条痕文系）	57 H
第21図15 図版8-3-15	深鉢	胴	厚 1.0	僅かに外傾する	外面に粗い縦位条痕文／色調は暗茶褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、繊維を僅かに含む	早期後葉 （条痕文系）	遺構外 (B-5)G
第21図16 図版8-3-16	深鉢	口縁	高 [2.6]	口縁部は外反する	隆帯により楕円区画文／右側は紐状／色調は淡茶褐色	角閃石・砂粒を含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	56 H
第21図17 図版8-3-17	深鉢	胴	厚 0.8	僅かに外傾する	２段の横位結節文が施文される／地文はＬＲ縄文／原体はやや太い／色調は暗茶褐色	白色砂粒・小石を多く、石英をを含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	57 H
第21図18 図版8-3-18	深鉢	胴	厚 0.8	やや外傾する	やや太めの半截竹管による平行沈線文を縦位に施文される	金雲母をやや多く含む	中期中葉 （勝坂式か）	遺構外 (B-5)G

第13表　遺構外出土縄文土器一覧

第３章　中野遺跡第55地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

今回の調査は、平成13年６月27日、工事着手の際に市民から志木市教育委員会（以下、教育委員会）への通報により発覚した後に実施したものである。通常では、工事主体者から開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があり、その後事前協議を経て保存措置を講じる流れになっているが、本調査は通常の経緯がない中で実施したものであった。工事内容は、志木市柏町１丁目1495番１号（総面積60.19㎡）地内に道路新設工事を実施しようとするものである。

市民からの通報後、教育委員会は工事主体者である田辺工務店（代表取締役　田辺　幸雄）に連絡し、理解を得た後、同日午後４時30分から、急きょ確認調査を実施した。使用する重機については、工事用のバックホーの提供を受け対応した。

確認調査の内容は、調査区の長軸方向中央に１本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区東端から弥生時代の住居跡１軒を確認した。教育委員会はこの結果をただちに工事主体者である田辺工務店に報告し、保存処置について検討を依頼した。

その後、教育委員会は田辺工務店から埋蔵文化財発掘届を受理し、保存措置について事前協議を行い、発掘調査を実施することで合意した。

そして、教育委員会では、工事主体者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、工事主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成13年６月28日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。

（２）発掘調査の経過

６月28日　すでに確認調査の際にバックホーによる表土剥ぎ作業を終了させていたため、本日からは、人員導入による発掘作業を開始する。まず、器材の搬入と調査準備を行い、その後調査区整備と遺構確認作業を開始する。遺構確認作業の結果、調査区内には、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒（16Ｙ）、近世以降の土坑１基（78Ｄ）・溝跡１本（５・６Ｍ）が存在していることを確認した。同日には、16Ｙ、78Ｄ、５・６Ｍの精査を開始した。

29日　昨日に引き続き遺構精査を実施する。特に78Ｄと認識していた土坑は、地下室の入口竪坑部と判明した。主体部と思われる部分は西側方向にドーム状の天井部を確認することができた。

本地点の調査は、本日をもって、すべての遺構の写真撮影・実測を終了し、精査を完了した。

第22図　中野遺跡の調査地点（1／3.000）

平成30年８月31日現在

第２節　検出された遺構・遺物

（1）概　要

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡１軒（16Ｙ）、近世以降の土坑１基（78Ｄ）・溝跡２本（５・６Ｍ）・ピット３本（１～３Ｐ）が検出された。

検出された遺構については、狭小な面積であるため、調査区内においてすべて全体を確認できなかった。そのため、16Ｙは調査の際に壷・台付甕形土器などの小破片が出土していることから、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡とされたが、他に古墳時代後期の土師器の破片２点が出土していることから、今後の調査により時期の変更になる可能性がある。

近世以降のものと思われる78Ｄについては、地下室の形態をもつ土坑であった。５・６Ｍについては、時期を決定する遺物が出土しなかったため、土層の観察から、近世以降とすることとする。

（2）住居跡

16号住居跡

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区東端部。

［検出状況］６Ｍに切られる。北壁は確認できたが、大部分は南側の調査区外にあるものと思われる。

［構　　造］**平面形**：不明。**規模**：不明／確認面からの深さ５～７㎝。**壁**：80°の角度をもち立ち上がる。**長軸方位**：不明。**壁溝**：なし。**床面**：硬化した面は検出されなかった。**貯蔵穴**：検出されなかった。**柱穴**：主柱穴と思われる１本（Ｐ１）が検出された。平面形は楕円形で、規模は42×36㎝。深さは80㎝。**入口施設**：検出されなかった。

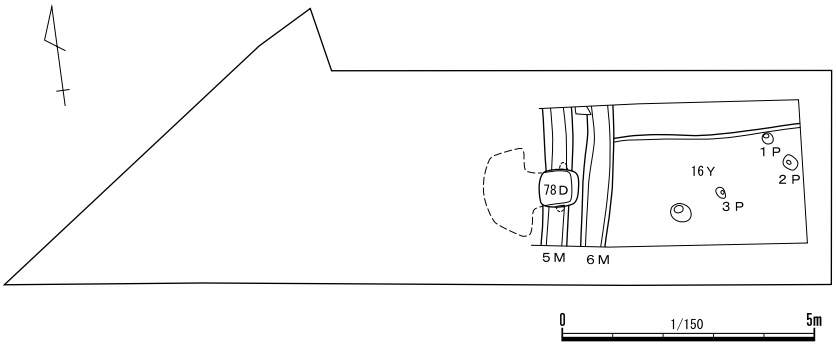
［覆　　土］２層に分層できた。

［遺　　物］壷・台付甕形土器の破片が出土したが、他に古墳時代後期の土師器２点が出土している。

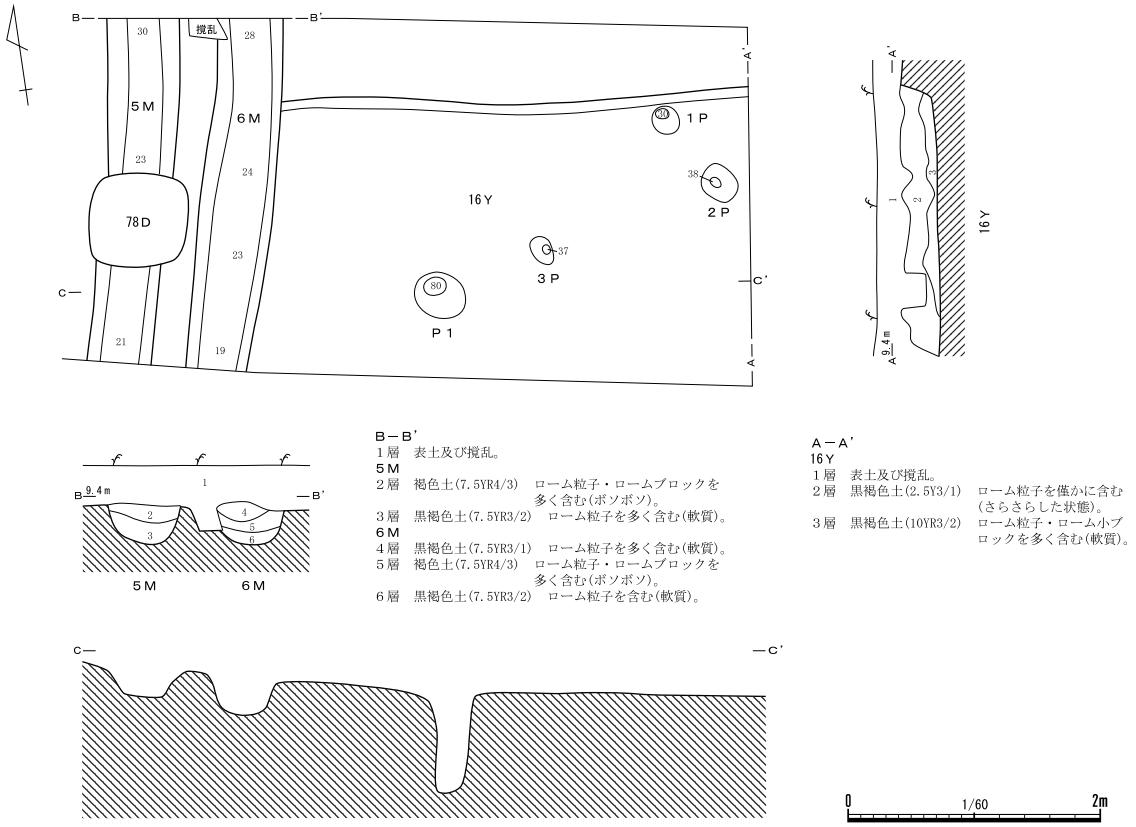
［時　　期］弥生時代後期～古墳時代前期。出土土器に古墳時代後期の土師器２点が出土していることから、今後の調査により変更の可能性がある。

遺　　物（第25図、図版９－５、第14表）

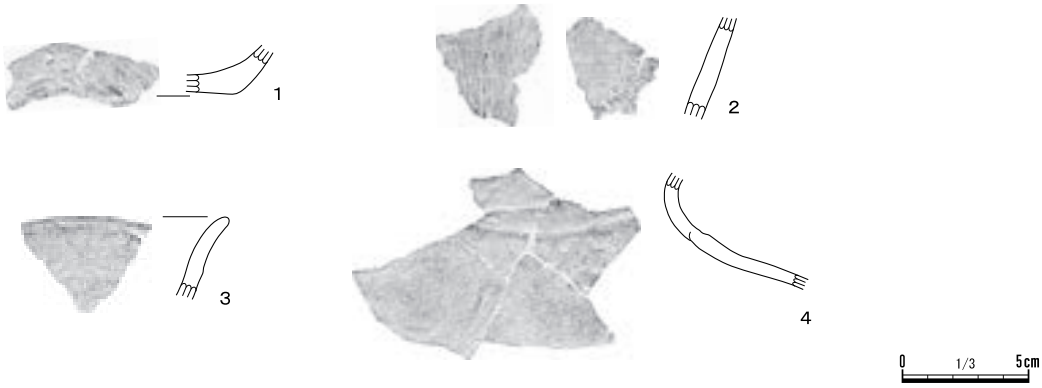
［土　　器］（第25図、図版９－５－１～４、第14表）



第23図　遺構分布図（1／150）



第24図　16号住居跡、５・６号溝跡、１～３号ピット（1／60）



第25図　16号住居跡出土遺物（1／3）

１・２は弥生時代後期から古墳時代前期の土器で、１は壷形土器の底部破片、２は台付甕形土器の胴部破片である。

３・４は古墳時代後期の土師器で、３は鉢形土器の口縁部破片、４は丸甕の頸部から胴部上半にかけての破片である。

（3）土　坑

78号土坑

遺　　構（第26図）

［位　　置］調査区中央からやや東寄り。５Ｍに切られる。

挿図番号 図版番号	器種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度	時　期
第25図1 図版9-5-1	壷	高 [1.7]	底部は平底	明茶褐色	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：ハケナデ／外面：粗いヘラ磨き調整	覆土中	底部破片	弥生時代後期～古墳時代前期
第25図2 図版9-5-2	甕	厚 0.8	僅かに膨らみをもつことから、部位は胴部下半と思われる／外面は黒く煤けている	胎土の色調は暗黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：ハケ目調整後上部はヘラナデ／外面：縦位のハケ目調整	覆土中	胴部下半	弥生時代後期～古墳時代前期
第25図3 図版9-5-3	土師器鉢か	高 [3.4]	口縁部は外反する／在地系土師器	黒褐色	砂粒を含む	内外面：横ナデ／外面には指紋が観察される	覆土中	口縁部破片	古墳時代後期（7c代）
第25図4 図版9-5-4	土師器 甕	高 [6.7]	丸甕／頸部は大きく外反する／胴部と頸部との境は弱い段をもつ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：頸部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：頸部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	覆土中	頸部～胴部上半破片	古墳時代後期（7c代）

第14表　16号住居跡出土土器一覧

［検出状況］入口竪坑部の検出により判明した。主体部については、西側方向に広がっていることを確認したが、陥落の恐れがあり危険なため、内部精査をすることができなかった。

［構　　造］地下室と思われる。主体部は入口竪坑部の西側に位置している。

［入口竪坑部］**平面形**：方形である。**規模**：78×76cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、途中の南北壁には足掛け穴と思われる12㎝ほどの窪みが１か所ずつ確認できた。**長軸方位**：Ｎ－85°－Ｗ。

［主体部］**平面形**：整った長方形ではなく、奥壁がややカーブしているようである。**規模**：1.76×0.9m／深さ116cm。坑底は平坦で、奥壁の天井部はやや低くなっている。**長軸方位**：Ｎ－Ｓ。

［連絡部］入口竪坑部と主体部との境は段差がなく、平坦である。

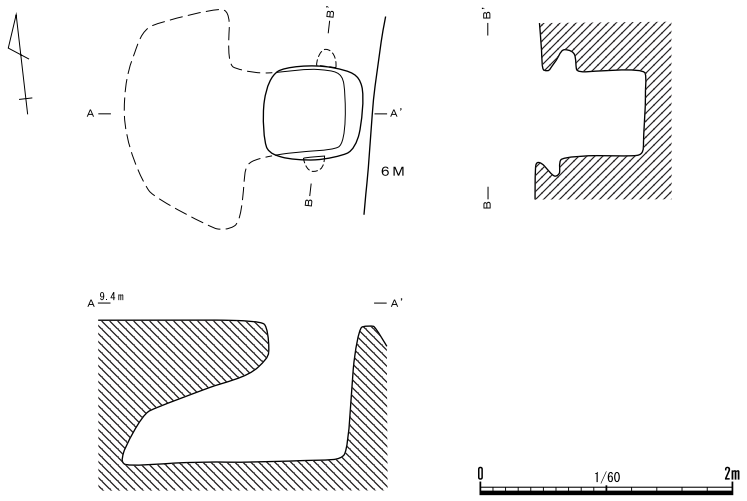
［遺　　物］瓦１点を出土した。

［時　　期］近世（19世紀後半）。

遺　　物（図版９－６）

［　瓦　］（図版９－６－１）

１は平瓦あるいは桟瓦の小破片である。長さ6.4㎝・幅6.3㎝・厚さ1.6㎝・重さ49ｇ。



第26図　78号土坑（1／60）

（４）溝　跡

５号溝跡

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区中央からやや東寄り。78 Ｄを切る。

［検出状況］６Ｍと並行してほぼ南北方向に走向し、南北ともに調査区外に延びるものと考えられる。16 Ｈを切る。

［構　　造］**規模**：検出長2.74 ｍ／検出最大上幅58㎝／下幅26～32㎝／深さ21～30㎝。溝底はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈する。**走向方位**：Ｎ－５°－Ｅ。

［覆　　土］２層に分層できた。

［遺　　物］平安時代の小型台付甕の小破片１点が出土したが、図示できなかった。

［時　　期］土層の観察から近世以降と思われる。

６号溝跡

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区中央からやや東寄り。

［検出状況］５Ｍと並行してほぼ南北方向に走向し、南北ともに調査区外に延びるものと考えられる。16 Ｈを切る。

［構　　造］**規模**：検出長2.80 ｍ／検出最大上幅60㎝／下幅30～36㎝／深さ19～28㎝。溝底はほぼ平坦である。断面形は、逆台形を呈する。**走向方位**：Ｎ－８°－Ｅ。

［覆　　土］３層に分層できた。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］土層の観察から近世以降と思われる。

（５）ピット

近世以降のものと思われるピット３本（１～３Ｐ）が調査区東端から検出された。３本のピットからはいずれも出土遺物はなかった。

１号ピット

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区東端。

［構　　造］16 Ｙを切る。**平面形**：楕円形。**規模**：長軸24㎝／短軸21㎝／深さ30㎝。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］近世以降か。

２号ピット

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区東端。

［構　　造］16 Ｙを切る。**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸30㎝／短軸25㎝／深さ38㎝。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］近世以降か。

３号ピット

遺　　構（第24図）

［位　　置］調査区東端。

［構　　造］16Ｙを切る。**平面形**：楕円形。**規模**：長軸25㎝／短軸15㎝／深さ37㎝。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］近世以降か。

（６）遺構外出土遺物（第27図１～４、図版９－７、第15表）

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の土器、中世以降の陶器に分類する。

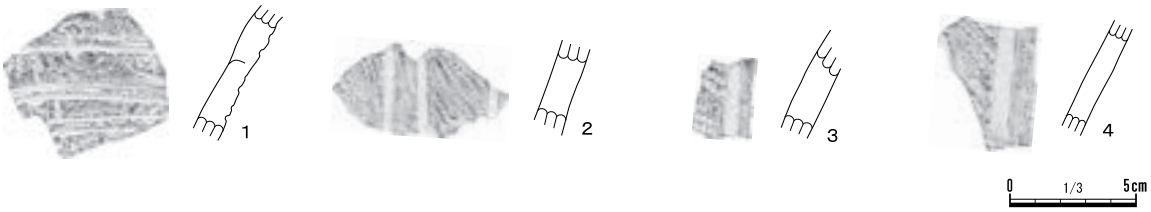
１．縄文時代の土器（第27図１～４、図版９－７－１～４、第15表）

１は前期末葉の諸磯ｂ式土器である。

２～４は中期末葉の土器で、加曽利ＥⅢ式土器である。

２．中世以降の陶器（図版９－７－５）

５は陶器碗か。内外面に灰釉が施され、胎土の色調は淡橙色を呈する。産地は瀬戸・美濃系。時期は18世紀代。16Ｙからの出土である。



第27図　遺構外出土遺物（1／3）

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (㎝)	器形・形態	文　様　・　特　徴	胎　土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第27図1 図版9-7-1	深鉢	胴	厚 1.0	上方は外反する器形	半截竹管による横位平行沈線文／地文は無節Ｌ縄文を横位に施文／色調は暗茶褐色	白色砂粒・小石を含む	前期末葉 （諸磯ｂ式）	16 Y
第27図2 図版9-7-2	深鉢	胴	厚 1.1	器形は外傾する	胴部文様は磨消懸垂文／地文はＬＲ縄文／色調は淡茶褐色	砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	16 Y
第27図3 図版9-7-3	深鉢	胴	厚 1.1	器形は外傾する	胴部文様は磨消懸垂文／地文はやや節が大きめのＬＲ縄文／色調は明茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	16 Y
第27図4 図版9-7-4	深鉢	胴	厚 0.8	器形は外傾する	胴部文様は磨消懸垂文／地文はＬＲ縄文／色調は明茶褐色を基調	砂粒を含む	中期後葉 （加曽利ＥⅢ式）	78 D

第15表　遺構外出土縄文土器一覧

第４章　中野遺跡第57地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

平成13年７月、宗教法人宝幢寺（代表役員　金剛　洋一）から志木市教育員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。志木市柏町１丁目1526番１号の一部（総面積494.07㎡）地内に不動堂建設を行うとした内容の取り扱いである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中野遺跡（コード11228－09－002）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．開発計画の策定を行った上で、埋蔵文化財確認調査依頼書を提出された後に埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

２．上記１の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

７月30日、教育委員会は宝幢寺より、埋蔵文化財確認調査依頼書・埋蔵文化財発掘届を受理した。

これにより、教育委員会では、中野遺跡第57地点（総面積494.07㎡）とし、８月３日に確認調査を実施した。確認調査は、調査区内のほぼ東西方向にトレンチを４本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区東半部を中心に硬化した面が広範囲に広がっていることと数本のピットを確認した。そのため、時代的には近世以降の建物部分の版築面ないし通路であった部分の硬化面である可能性があると判断した。

教育委員会はこの結果をただちに工事主体者である宝幢寺に報告し、保存処置について検討を依頼した。その結果、保存措置としては、盛土保存は不可能であるということから、発掘調査を実施することに決定した。そして、教育委員会では、工事主体者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、工事主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

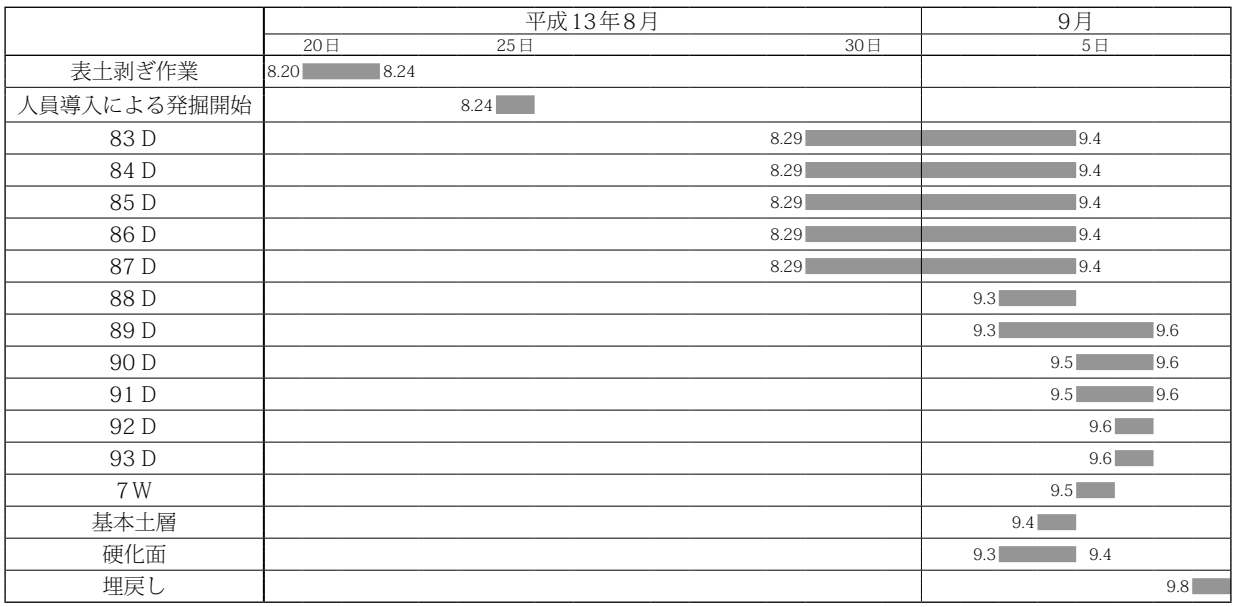
これにより、平成13年８月20日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。

（２）発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第16表の発掘調査工程表に示した。

８月20日　　本日より重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始する。残土置場については、調査区北西端とし、残土はダンプに積載し移動させることにした。

24日　　表土剥ぎ及び残土搬出作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始する。まず、



第16表　中野遺跡第57地点の発掘調査工程表

器材の搬入と調査準備を行い、その後、中央ベルト（セクションＡ－Ａ´）を設定し、その境に調査区をおおよそ南北で２分し、まず調査区南半部の調査区整備と遺構確認作業を開始した。その結果、調査区内には近世以降の土坑・井戸跡・ピットなどが分布していることがわかった。午後からは基準点測量を行う。

29日　本日より調査区南半部の遺構精査を開始し、最初に近世以降の土坑と思われる83～87号土坑（83～87 D）を掘り始める。83 Dはやや深い土坑で、84 Dからは銅銭（寛永通宝か）１枚が出土した。

30日　86 Dは溝状の掘り込みで上面には硬化した面が広がり、西側上端にはピット列が並んでいる状況である。さらに調査区北半部の調査区整備と遺構確認作業を開始した。

９月３日　調査区南半部においては、近世以降の土坑と思われる88号土坑（88 D）の精査を行う。調査区北半部においては、近世以降の土坑と思われる89号土坑（89 D）の精査を開始する。また、確認面上層には硬化面を確認することができたため、その硬化範囲の精査を行った。

４日　調査区南半部においては、83～85・88 Dの写真撮影・実測を完了した。また、基本土層の観察地点を１個所設定し、掘り始める。調査区北半部においては、硬化面の精査と遺物出土状況の平板測量を行い、遺物を取り上げる。

５日　調査区南半部においては、基本土層を掘り終え、断面実測を完了する。調査区北半部においては、新たに近世以降と７号井戸跡（７W）、90・91号土坑（90・91 D）の精査を開始する。７Wからは貝殻（タニシ）が多く出土した。

６日　調査区北半部の７Wの精査を完了し、新たに近世以降の土坑と思われる92・93号土坑（92・93 D）の精査を開始し、同日には写真撮影・実測をすべて終了する。

７日　精査途中のピットの掘りを終了し、写真撮影・実測を終了し、すべての調査を完了する。午後からは器材の片付けを行い、搬出作業も完了する。

８日　埋戻し作業を完了する。

第２節　基本層序

中野遺跡は、武蔵野台地北端の柳瀬川右岸の標高８～11ｍの台地上に位置する。今回の調査において、基本層序を確認した位置は、（Ｂ－２）グリッドの南端南面Ａ－Ａ´セクションで、立川ローム第Ｘ層上層まで確認した。特に今回の地点の特徴としては、立川ロームⅢ層及びⅣ層上部までロームが確認できなかったことである。これについては、第Ⅱ層の硬化面層が直上に堆積していることから、おそらく、地形はカットされ、造成されているものと判断できる。

以下、基本層序を第28図に示し、各層についての説明をする。

第Ⅰ層　表土及び撹乱

第Ⅱ層　近世硬化面層（造成面層）

調査区北半部に広がる硬化面部分である。ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基本とする。厚さ５㎝前後。造成は第Ⅳ層上部まで及んでいる。

第Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層（ソフトローム層）

造成により、すべて削り取られているものと考えられる。

第Ⅳ層　黄褐色硬質ローム層（ハードローム層）

造成は上部まで及んでおり、削平されている。

第Ⅴ層　暗黄褐色ローム層（第１黒色帯）

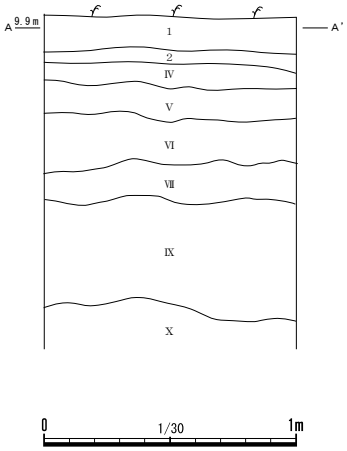
第Ⅵ層　黄褐色土層（ＡＴ包含層準）

第Ⅶ層　暗黄褐色ローム層（第２黒色帯上半部）

第Ⅷ層　黄褐色ローム層

第Ⅸ層　暗黄褐色ローム層（第２黒色帯下半部）

第Ⅹ層　黄褐色ローム層



第28図　基本層序（1／30）

第３節　検出された遺構・遺物

（1）概　要

今回の調査で検出された遺構は、すべて近世以降の遺構で、土坑11基（83～93Ｄ）・井戸跡１基（７Ｗ）・ピット101（１～101Ｐ）本であった。ただし、遺物には一部、中世のものが含まれる。また、調査区東半部から北半部にかけて広範囲にわたり硬化面が確認されている。この硬化面は、基本的に前記の土坑・井戸跡などの上層に堆積しており、本地点で最新の遺構として判断できる。

今回検出された中世以降の遺構・遺物は、大部分が宝幢寺関連のものと考えらえる。

なお、各遺構の時代設定は、遺物が出土した場合は陶磁器・土器などの年代を中心に詳細年代を明示したが、それ以外は近世以降と表記した。

第29図　遺構分布図（1／200）

（２）土　坑

83号土坑

遺　　構（第30図、第17表）

［位　　置］（Ｃ・Ｄ－２・３）グリッド。

［検出状況］84・88Ｄに切られ、85Ｄと重複する。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸3.20ｍ／短軸2.70ｍ／深さ113㎝。**壁**：北壁では約40°と緩斜面で南壁では約70°と急斜面である。**坑底**：平坦ではなく凸凹でピット状を呈する。**長軸方位**：Ｎ－37°－Ｗ。

［覆　　土］９層に分層された。

［遺　　物］比較的に多く遺物は出土し、陶磁器、瓦、板碑、銅製品（キセルの吸口）が出土した。

［時　　期］近世（18～19世紀）。

遺　　物（第32図、図版12－１－１～20、第20表）

［陶 磁 器］（第32図１～３、図版12－１－１～17、第20表）

１～10は磁器、11～17は陶器である。

［　瓦　］（図版12－１－18）

18は平瓦の小破片であろうか。色調は灰色。長さ6.4㎝・幅6.3㎝・厚さ1.8㎝・重さ63ｇ。

［板　　碑］（図版12－１－19）

板碑の小破片である。長さ10.5㎝・幅4.4㎝・厚さ1.5㎝・重さ103ｇ。石材は緑色片岩。

［銅 製 品］（第32図20、図版12－１－20）

20はキセルの吸口である。長さ6.6㎝・最大幅0.9㎝・吸口部径0.4㎝・厚さ0.1㎝・重さ6.8ｇ。

84号土坑

遺　　構（第30図、第17表）

［位　　置］（Ｃ－３）グリッド。

［検出状況］83・85・88に切られる。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸3.00m以上／短軸0.95m／深さ40㎝前後。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－５°－Ｅ。

［遺　　物］陶磁器、瓦、銅銭（寛永通宝か）が出土した。

［時　　期］近世（19世紀）。

遺　　物（第32図５、図版－12－２、第20表）

［陶 磁 器］（図版12－２－１～３、第20表）

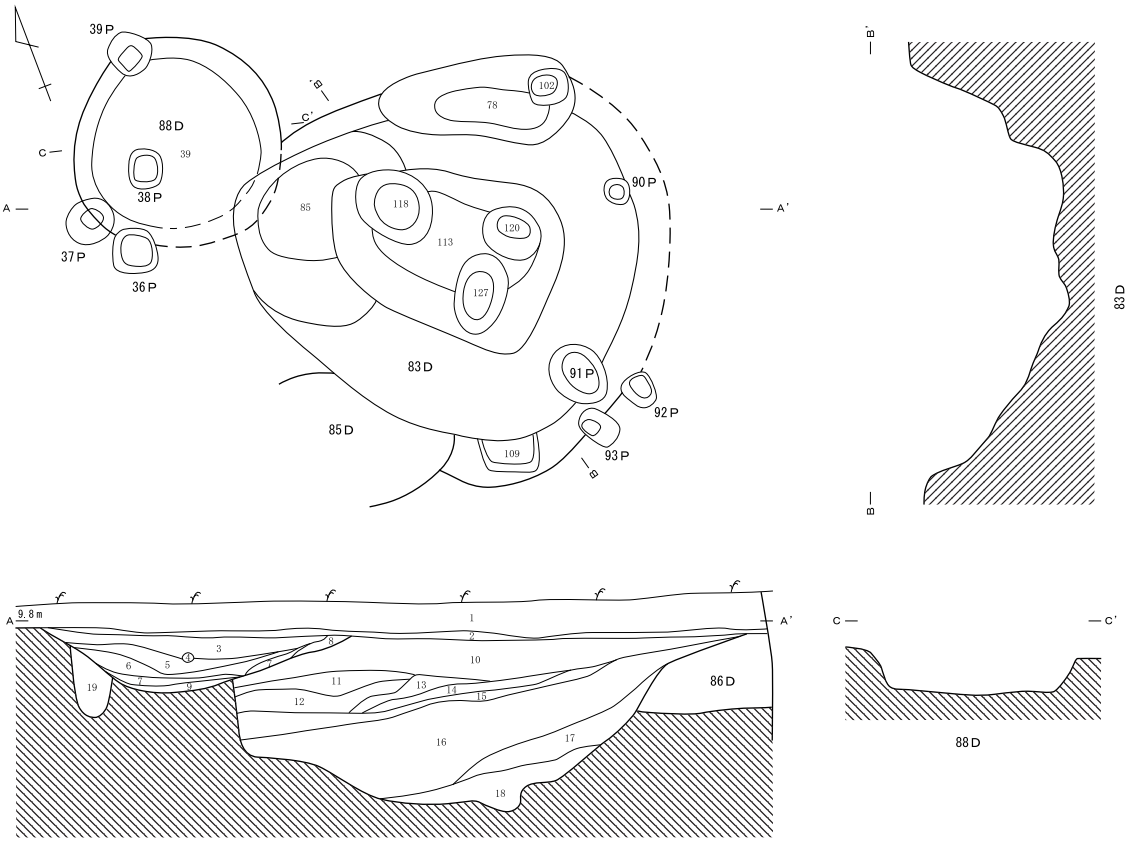
１・２は磁器、３は陶器である。

［　瓦　］（図版12－２－４）

４は平瓦の小破片であろうか。長さ11.4㎝・幅6.2㎝・厚さ1.6㎝・重さ117ｇ。

［銅　　銭］（第32図５、図版12－２－５）

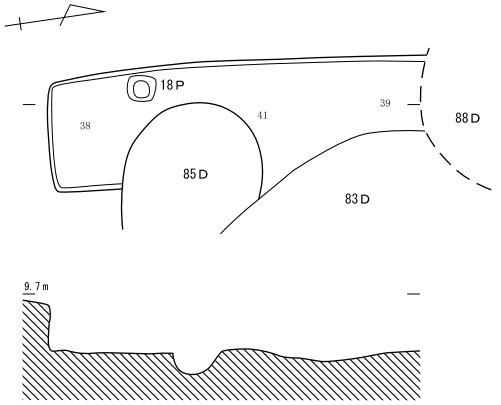
５は寛永通宝の破片であろう。表面に「通」の文字のみ見える。推定外径2.2㎝・方孔一片0.6㎝・厚さ0.1㎝・重さ0.7ｇ。



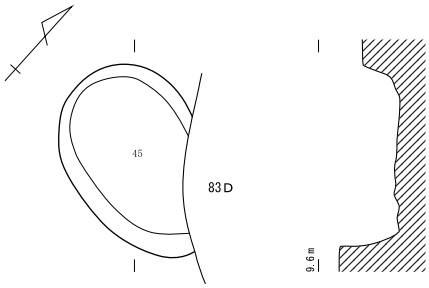
１層　表土及び撹乱。
２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
88D
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
４層　ロームブロック。
５層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
６層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
７層　炭化材層　灰を多く含む。
８層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
９層　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。

83D
10層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・礫を含む。
11層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
12層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
13層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
14層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
15層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
16層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
17層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
18層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
37P
19層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

83・88号土坑



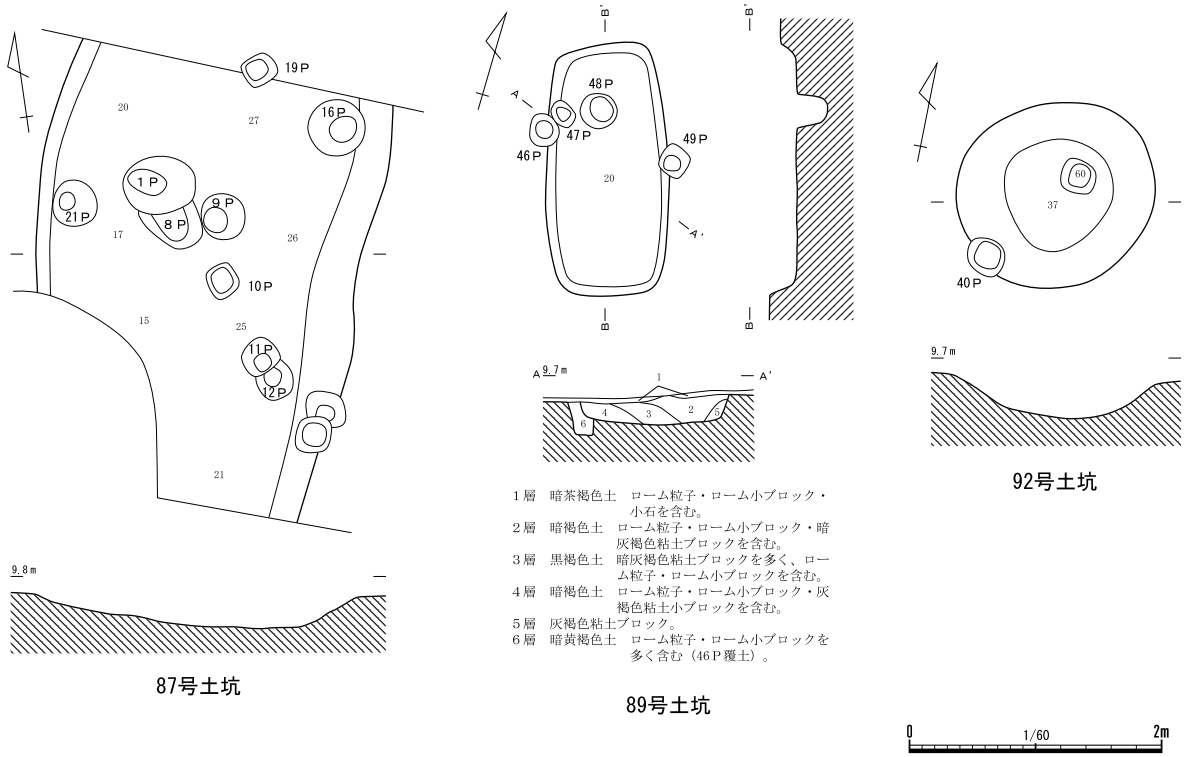
84号土坑



85号土坑

0　1/60　2m

第30図　土坑１（1／60）



第31図　土坑２（1／60）

85号土坑

遺　　構（第30図、第17表）

［位　　置］（Ｃ・Ｄ－３）グリッド。

［検出状況］84Ｄを切り、83Ｄに切られる？

［構　　造］**平面形**：楕円形。規模：長軸1.62m／短軸1.10m／深さ45㎝。**壁**：80°の角度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－80°－Ｗ。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土から観察して近世以降と思われる。

86号土坑

遺　　物（第29図、第17表）

［位　　置］（Ｄ－３）グリッド。

［検出状況］調査区東端に南北方向に延びる。

［構　　造］**平面形**：溝状。**規模**：長軸8.00m以上／短軸不明／深さ35㎝前後。**壁**：60°に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－20°－Ｅ。

［覆　　土］上層に硬化土層が堆積している。下層はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む黒褐色土を基調とする。

［遺　　物］陶磁器、土器の破片が出土した。

［時　　期］近世（19世紀）。

［所　　見］本遺構については、今回土坑として扱ったが、調査区東端部において南北方向に厚さ５㎝

前後の硬化面が堆積しており、さらに西側には南北方向にピット列が延びていることから、柵列を伴う溝跡あるいは道路状遺構の可能性がある。

遺　　物（第32図４、図版12－３、第20表）

［陶磁器・土器］（第32図、図版12－３－１～４、第20表）

１・２は磁器、３は陶器、４は土器である。

87号土坑

遺　　構（第31図、第17表）

［位　　置］（Ｃ－３・４）グリッド。

［検出状況］南側は撹乱により破壊されている。

［構　　造］平面形：溝状。規模：長軸3.40m以上／短軸2.60m前後／深さ15～27㎝。壁：ダラダラと緩やかに立ち上がる。長軸方位：Ｎ－20°－Ｅ。

［遺　　物］陶磁器、土器の破片が出土した。

［時　　期］近世（19世紀）。

遺　　物（第32図１、図版12－４、第20表）

［陶磁器・土器］（第32図１、図版12－４－１～６、第20表）

１は磁器、２～４は陶器、５・６は土器である。

88号土坑

遺　　構（第29図、第16表）

［位　　置］（Ｃ－２・３）グリッド。

［検出状況］83・84Ｄを切る。

［構　　造］平面形：円形。規模：長軸1.66m前後／短軸1.62／深さ39㎝。壁：約70°の角度で立ち上がる。長軸方位：Ｎ－18°－Ｅ。

［遺　　物］陶器、瓦、石製品（砥石）が出土した。

［時　　期］近代（19世紀後葉以降）。

遺　　物（第32図３、図版13－１、第20表）

［陶　　器］（図版13－１－１、第20表）

１は陶器である。

［　瓦　］（図版13－１－２）

２は平瓦の破片と思われる。長さ5.6㎝・幅8.0㎝・厚さ1.9㎝・重さ97ｇ。色調は橙色。胎土には砂粒をやや多く含む。

［石 製 品］（第32図３、図版13－１－３）

３は砥石である。長さ9.4㎝・幅3.3㎝・厚さ2.4㎝・重さ103ｇ。短軸断面は長方形、長軸断面は山形を呈する。側面には成形痕が残る／使用面の主体は１面であるが、他に２面僅かに使用痕が見られる。石材は凝灰岩である。

89号土坑

遺　　構（第31図、第17表）

［位　　置］（Ｃ－１・２）グリッド。

［検出状況］硬化面下からの検出である。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸2.00m／短軸0.98m／深さ20㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－18°－Ｗ。

［覆　　土］５層に分層された。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土から観察して近世以降と思われる。

90号土坑

遺　　構（第29図、第17表）

［位　　置］（Ｄ－２）グリッド。

［検出状況］東側は撹乱により破壊されている。91・93Ｄと長軸方向はほぼ同一である。

［構　　造］**平面形**：溝状の長方形。**規模**：長軸2.70m以上／短軸0.68m／深さ42～48㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－70°－Ｗ。

［遺　　物］陶磁器、土器の小破片が出土したが、図示できたのは陶器２点。

［時　　期］近世（19世紀）。

遺　　物（第32図１・２、図版13－２、第20表）

［陶　　器］（第32図１・２、図版13－２－１・２、第20表）

１・２は陶器である。

91号土坑

遺　　構（第29図、第17表）

［位　　置］（Ｃ・Ｄ－２）グリッド。

［検出状況］90・93Ｄと長軸方向はほぼ同一である。

［構　　造］**平面形**：溝状の長方形。**規模**：長軸2.45m／短軸0.60m／深さ44㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－72°－Ｗ。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土から観察して近世以降と思われる。

92号土坑

遺　　構（第31図、第17表）

［位　　置］（Ｃ－２）グリッド。

［検出状況］７Ｗを切る。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸1.60m／短軸1.46m／深さ34㎝。**壁**：皿状に緩やかに立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－65°－Ｅ。

［遺　　物］今回の調査で最も遺物が多かった。陶磁器、土器、銅製品、瓦、銅製品が出土した。

［時　　期］近世～近代（19世紀～19世紀後葉）。

遺　　物（第32図１～６・23・24・29～31、図版13－３、第20表）

［陶磁器・土器］（第32図１～６・23・24、図版13－３－28、第20表）

１～16は磁器、17～23は陶器、24～26は土器である。

［　瓦　］（図版13－３－27・28）

27・28は瓦で、27は丸瓦、28は平瓦である。27は長さ9.8㎝・最大幅7.7㎝・厚さ2.0㎝・重さ165ｇ。胎土の色調は淡茶褐色を基調とし、外面は燻され黒色。８は長さ9.0㎝・最大幅5.5㎝・厚さ1.6㎝・重さ98ｇ。色調は灰色、表面は内外面燻され黒色。

［銅 製 品］（第32図29～31、図版13－３－29～31）

29～31は用途不明品である。これら３点は１セットで飾り金具になるものか。29は環状のもので、途中に先端がやや鋭利な留め具のようなものが装着されている。長径2.4㎝・短径2.1㎝・厚さ0.3㎝・重さ4.0ｇ。30は円形の盤で、中央に0.5×0.2㎝の長方形の孔が穿たれている。径2.7㎝・高さ0.2㎝・厚さ0.1㎝弱・重さ0.8ｇ。30は29より大きな円形の盤で、径0.1㎝の鋲留穴を２か所もつ。最大径3.6㎝・高さ0.3㎝・厚さ0.1㎝以下・重さ1.5ｇ。

93号土坑

遺　　構（第29図、第17表）

［位　　置］（Ｃ－２）グリッド。

［検出状況］90・91Ｄと長軸方向はほぼ同一である。

［構　　造］**平面形**：溝状の長方形。**規模**：長軸1.95m／短軸0.50m／深さ35㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－70°－Ｗ。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土から観察して近世以降と思われる。

（３）井戸跡

７号井戸跡

遺　　構（第33図、第18表）

［位　　置］（Ｂ・Ｃ－２）グリッド。

［検出状況］硬化面下からの検出で、92Ｄに切られる。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：開口部径1.76ｍ×不明。深さ80㎝以下は平面形が円形に整い、規模は0.85×0.80m。危険を伴うため、深さ170㎝までの精査で終了した。開口部は漏斗状に大きく広がり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。足掛け穴は確認面から97㎝下がったところに、幅20㎝・奥行き８㎝のものが一ヶ所確認できた。

［遺　　物］陶器、鉄製品（錠前）が出土した。その他として、貝（タニシ）がまとまって出土した。

［時　　期］近代（19世紀後葉以降）。

遺　　物（第34図２、図版14－１、第20表）

［陶　　器］（図版14－１－１、第20表）

１は擂鉢の胴部破片である。

遺構名	位　置	平面形	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物（掲載点数｜全点数）																						遺構年代	備　考
							陶器		磁器		土器		土製品		石製品		鉄製品		銅製品		瓦		板碑		ガラス製品		銅銭			
83D	(C･D-2･3)G	楕円形	3.20	2.70	1.13	N-37°-W	6	20	10	24	1	4	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	1	0	0	近世（18～19c）	
84D	(C-3)G	長方形	3.00以上	0.95	0.40前後	N-5°-E	1	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	近世（19c）	銅銭：寛永通宝か
85D	(C･D-3)G	楕円形	1.62	1.10	0.45	N-80°-W	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世以降	
86D	(D-3)G	溝状	8.00以上	不明	0.35前後	N-20°-E	1	1	2	8	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世（19c）	溝跡あるいは道路状遺構の可能性がある。
87D	(C-3･4)G	溝状	3.40以上	2.60前後	0.15～0.27	N-20°-E	3	7	1	3	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	近世（19c）	
88D	(C-2･3)G	円形	1.66	1.62	0.39	N-18°-E	1	3	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	近代（19c後葉以降）	
89D	(C-1･2)G	長方形	2.00	0.98	0.20	N-18°-E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世以降	
90D	(D-2)G	溝状の長方形	2.70以上	0.68	0.42～0.48	N-70°-W	2	6	0	2	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世（19c）	
91D	(C･D-2)G	溝状の長方形	2.45	0.60	0.44	N-72°-W	0	1	0	4	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世以降	
92D	(C-2)G	楕円形	1.60	1.46	0.34	N-65°-E	8	19	15	39	3	11	0	2	0	0	0	0	3	3	2	19	0	0	0	0	0	0	近世～近代（19c～19c後葉）	
93D	(C-2)G	溝状の長方形	1.95	0.50	0.35	N-70°-W	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近世以降	
合　計							22	58	30	84	7	28	0	2	1	1	0	0	3	4	5	25	1	1	0	1	1	1		

（単位：m）

第17表　近世以降の土坑一覧

遺構名	位　置	平面形	長軸長	短軸長	深さ	特　徴	出土遺物（掲載点数｜全点数）																				遺構年代	備　考
							陶器		磁器		土器		土製品		石製品		鉄製品		銅製品		瓦		板碑		ガラス製品		銅銭			
7W	(B･C-2)G	楕円形	1.76	不明	1.70以上	壁の途中に足掛け穴1か所あり	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近代（19c後葉以降）	その他、貝（タニシ）77個／130g
合　計							1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

（単位：m）

第18表　井戸跡一覧

[鉄 製 品]（第34図２、図版14－１－２）

２は錠前である。長さ3.3㎝・最大幅5.0㎝・厚さ1.4㎝・重さ20.2ｇ。完形品である。

[　貝　]（図版14－１）

タニシである。出土数量は総数77点・総重量130ｇである。

（4）ピット

本地点で検出されたピットは全部で101（１～101Ｐ）本であったが、ここでは、今回の調査で遺物の出土したものを図示し、説明することとする。その他は第19表に内容を掲載した。各ピットの時期については、すべて近世以降と考えられる。

１Ｐからは磁器２点、陶器１点が出土した（図版14－２－１～３、第20表）。

２Ｐからは鉄製品１点（釘）が出土した。長さ3.8㎝・幅0.6㎝・厚さ0.4・重さ1.0ｇ。先端部を欠損する（第34図１、図版14－２－１）。

３Ｐからは磁器１点が出土した（図版14－２－１、第20表）。

４Ｐからは磁器１点が出土した（図版14－２－１、第20表）。

５Ｐからは陶器１点、土器２点が出土した（図版14－２－１～３、第20表）。

６Ｐからは陶器１点が出土した（図版14－２－１、第20表）。

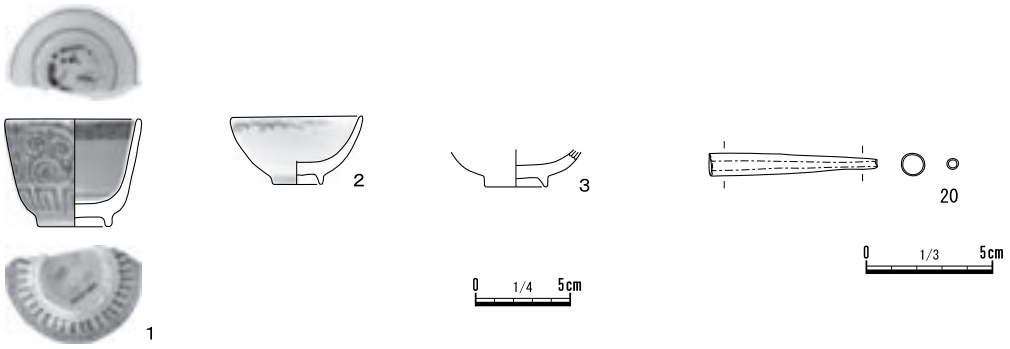
７Ｐからは陶器１点が出土した（図版14－２－１、第20表）。

遺構名	位置	平面形	規模(cm)			特　　徴	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
1 P	(C-3) G	楕円形	58	46	35	87D底から8Pと重複	磁器２点・陶器1点	近代(19c後葉)
2 P	(C-1) G	隅丸長方形	68	45	44		鉄製品(釘)1点	近世以降
3 P	(C-1) G	円形	32	32	68		磁器1点	近世(19c)
4 P	(C-1) G	楕円形	45	40	67	5Pと重複	磁器1点	近世
5 P	(C-1) G	隅丸方形	37	37	55	4Pと重複	陶器1点・土器2点	近世(19c)
6 P	(D-1) G	隅丸長方形	44	36	40		陶器1点	近世(19c)
7 P	(D-1) G	隅丸方形	37	35	62	67Pと重複	陶器1点	近世(17c)
8 P	(C-3) G	楕円形か	不明	40	23	87D底から1Pと重複	なし	近世以降
9 P	(C-3) G	円形	35	34	75	87D底から	なし	近世以降
10 P	(C-3) G	隅丸方形	25	34	75	87D底から	なし	近世以降
11 P	(C-4) G	隅丸方形	28	26	56	87D底から12Pと重複	なし	近世以降
12 P	(C-4) G	隅丸方形	30	不明	40	87D底から11Pと重複	なし	近世以降
13 P	(C-4) G	隅丸方形	29	27	67	14Pと重複	なし	近世以降
14 P	(C-4) G	隅丸方形	32	26	38	13Pと重複	なし	近世以降
15 P	(D-3) G	隅丸方形	33	30	28		なし	近世以降
16 P	(C-3) G	円形	45	45	75	87D底から	なし	近世以降
17 P	(C-3) G	隅丸方形	24	23	46		なし	近世以降
18 P	(C-3) G	隅丸方形	22	20	40	84D底から	なし	近世以降
19 P	(C-3) G	隅丸方形	25	22	11	87D底から	なし	近世以降
20 P	(C-3) G	隅丸方形	35	33	97		なし	近世以降
21 P	(C-3) G	円形	36	35	38		なし	近世以降
22 P	(C-3) G	隅丸長方形	40	32	70	87D底から	なし	近世以降
23 P	(C-3) G	隅丸方形	31	30	77		なし	近世以降
24 P	(B-3) G	隅丸方形	25	23	50	25Pと重複	なし	近世以降
25 P	(B-3) G	隅丸方形	36	33	45	24Pと重複	なし	近世以降
26 P	(C-4) G	隅丸方形	30	不明	28		なし	近世以降
27 P	(B-4) G	円形	28	28	43		なし	近世以降
28 P	(B-3) G	隅丸方形	23	23	9		なし	近世以降
29 P	(A-4) G	隅丸方形	25	25	16		なし	近世以降
30 P	(A-4) G	隅丸長方形	45	32	24		なし	近世以降
31 P	(B-3) G	楕円形	35	22	95		なし	近世以降
32 P	(B-3) G	隅丸方形	25	25	36		なし	近世以降
33 P	(B-3) G	隅丸方形	21	18	20		なし	近世以降
34 P	(B-3) G	隅丸方形	25	23	35		なし	近世以降
35 P	(B-3) G	隅丸方形	22	20	24		なし	近世以降
36 P	(C-3) G	隅丸方形	38	35	62	88Dと重複	なし	近世以降
37 P	(C-3) G	楕円形	40	33	74	88Dと重複／ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし	近世以降
38 P	(C-2) G	隅丸方形	31	28	26	87D底から	なし	近世以降
39 P	(C-2) G	隅丸方形	34	32	36	88Dと重複	なし	近世以降
40 P	(C-2) G	隅丸方形	30	28	41	92Dと重複	なし	近世以降
41 P	(B-2) G	隅丸長方形	35	25	47	42Pと重複	なし	近世以降
42 P	(B-2) G	楕円形	26	17	25	41Pと重複	なし	近世以降
43 P	(B-2) G	隅丸方形	20	20	23		なし	近世以降
44 P	(B-2) G	隅丸長方形	25	16	18		なし	近世以降
45 P	(C-2) G	隅丸方形	25	23	40		なし	近世以降
46 P	(C-2) G	隅丸方形	26	24	31	89Dに切られる／ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし	近世以降
47 P	(C-2) G	隅丸方形	22	17	18	87D底から	なし	近世以降
48 P	(C-2) G	隅丸方形	29	27	26	87D底から	なし	近世以降
49 P	(C-2) G	隅丸方形	23	23	33	89Dと重複	なし	近世以降
50 P	(C-2) G	隅丸方形	25	23	39	ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし	近世以降

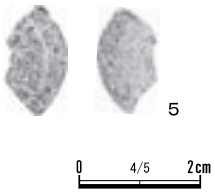
第19表　近世以降のピット一覧（1）

遺構名	位置	平面形	規模(cm)			特　　徴	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
51 P	(C-2) G	隅丸方形	22	21	26		なし	近世以降
52 P	(C-2) G	隅丸方形	28	26	41		なし	近世以降
53 P	(C-2) G	楕円形	28	23	39	ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし	近世以降
54 P	(C-2) G	隅丸方形	18	18	55	55P と重複	なし	近世以降
55 P	(C-2) G	隅丸方形	25	20	41	54P と重複	なし	近世以降
56 P	(C-1) G	隅丸方形	27	24	27		なし	近世以降
57 P	(C-1) G	円形	28	28	54		なし	近世以降
58 P	(C-1) G	隅丸長方形	30	25	31		なし	近世以降
59 P	(C-1) G	隅丸方形	20	18	16		なし	近世以降
60 P	(C-1) G	隅丸方形	22	20	22		なし	近世以降
61 P	(C-1) G	隅丸方形	32	30	26		なし	近世以降
62 P	(C-1) G	楕円形	30	25	44	63・64P と重複	なし	近世以降
63 P	(C-1) G	隅丸方形	23	21	33	62・65P と重複	なし	近世以降
64 P	(C-1) G	隅丸方形	30	不明	21	62P と重複	なし	近世以降
65 P	(C-1) G	円形	30	30	15	63P と重複	なし	近世以降
66 P	(D-1) G	隅丸方形	29	25	59		なし	近世以降
67 P	(D-1) G	楕円形か	不明	38	43	7P と重複	なし	近世以降
68 P	(D-1) G	隅丸方形か	32	28	51	69P と重複	なし	近世以降
69 P	(D-1) G	隅丸方形	18	不明	43	68P と重複	なし	近世以降
70 P	(D-1) G	隅丸方形	29	26	28		なし	近世以降
71 P	(D-1) G	楕円形	39	32	73		なし	近世以降
72 P	(D-1) G	楕円形	46	36	98		なし	近世以降
73 P	(D-1) G	楕円形	42	30	103	74P と重複	なし	近世以降
74 P	(D-1) G	隅丸方形	不明	53	54	73P と重複	なし	近世以降
75 P	(D-1) G	隅丸方形	55	52	73		なし	近世以降
76 P	(D-1) G	隅丸方形	32	28	28		なし	近世以降
77 P	(D-1・2) G	隅丸方形	40	27	54		なし	近世以降
78 P	(D-2) G	隅丸方形	20	17	20		なし	近世以降
79 P	(D-2) G	楕円形	42	35	75	80・81P と重複／ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調	なし	近世以降
80 P	(D-2) G	隅丸方形	38	不明	45	79・81P と重複／ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調	なし	近世以降
81 P	(D-2) G	楕円形	不明	38	18	79・80P と重複	なし	近世以降
82 P	(D-2) G	楕円形	35	30	69	ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調	なし	近世以降
83 P	(D-2) G	隅丸長方形	45	35	70		なし	近世以降
84 P	(D-2) G	楕円形	41	35	54	85P と重複	なし	近世以降
85 P	(D-2) G	隅丸方形	31	22	44	84P と重複	なし	近世以降
86 P	(D-2) G	隅丸方形	32	30	72	91D と重複	なし	近世以降
87 P	(D-2) G	隅丸方形	34	31	27	88D 底から 88P と重複	なし	近世以降
88 P	(D-2) G	隅丸方形	23	20	9	88D 底から 87P と重複	なし	近世以降
89 P	(D-2) G	隅丸長方形	25	14	18	88D 底から	なし	近世以降
90 P	(D-2・3) G	隅丸方形	20	20	34	83D と重複	なし	近世以降
91 P	(D-3) G	楕円形	52	42	56	83D と重複	なし	近世以降
92 P	(D-3) G	隅丸方形	28	24	29	83D と重複	なし	近世以降
93 P	(D-3) G	隅丸長方形	33	22	38	83D と重複	なし	近世以降
94 P	(D-3) G	楕円形	40	30	80	95P と重複	なし	近世以降
95 P	(D-3) G	隅丸方形	38	不明	59	94・96P と重複	なし	近世以降
96 P	(D-3) G	隅丸方形	25	25	49	95P と重複	なし	近世以降
97 P	(D-3) G	楕円形	35	28	93	98P と重複	なし	近世以降
98 P	(D-3) G	隅丸方形か	22	20	40	97P と重複	なし	近世以降
99 P	(D-3) G	隅丸方形	30	25	93	100P と重複	なし	近世以降
100 P	(D-3) G	隅丸方形	28	26	82	99P と重複	なし	近世以降
101 P	(D-3) G	円形	35	26	99		なし	近世以降

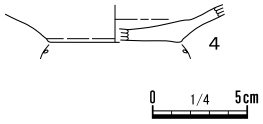
第19表　近世以降のピット一覧（２）



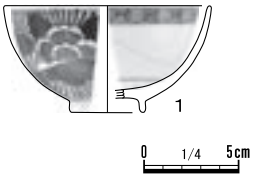
83号土坑出土遺物



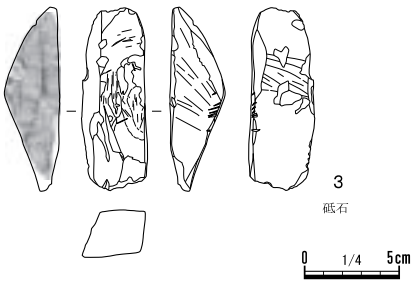
84号土坑出土遺物



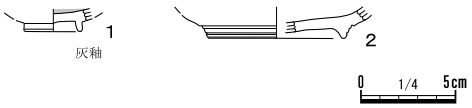
86号土坑出土遺物



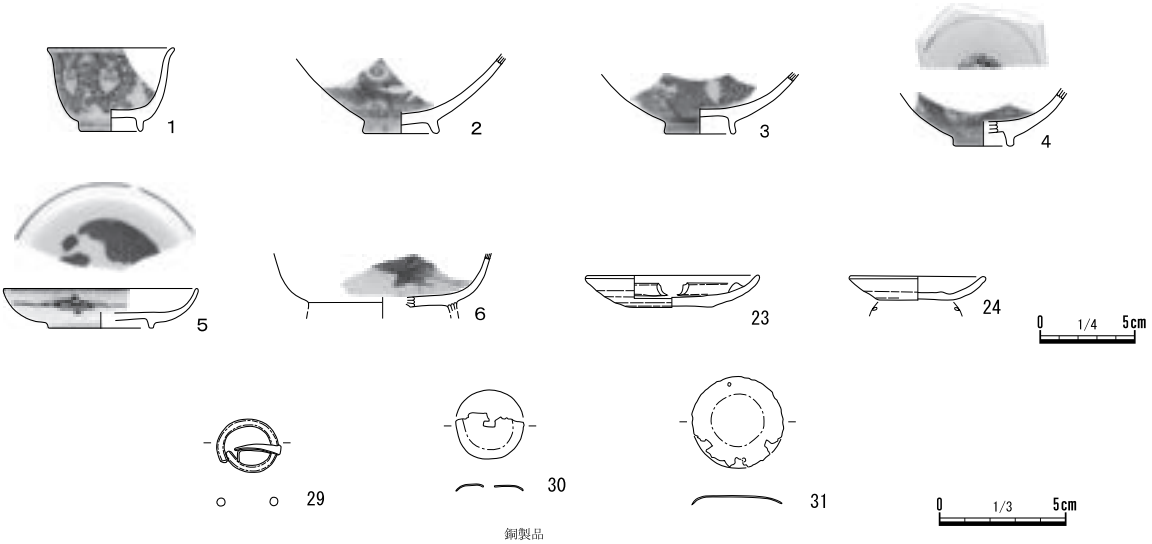
87号土坑出土遺物



88号土坑出土遺物



90号土坑出土遺物



92号土坑出土遺物

第32図　土坑出土遺物（1／4・1／3・4／5）

挿図番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (㎝)	製作の特徴等	推定産地	時期
第32図1 図版12-1-1	83 D	磁器	碗	高 5.7 口 7.0 底 3.7	染付／高台あり／外面：蛸唐草文、高台に二重圏線、見込松竹梅環状／内面：口縁部四方襷文、底部に成化年製／遺存度60％	肥前系	近世 （18c後葉）
第32図2 図版12-1-2	83 D	磁器	杯	高 3.6 口 5.8 底 2.6	染付／高台あり／外面：笹文、他；無文／遺存度80％	肥前系	近世 （18c中～後葉）
第32図3 図版12-1-3	83 D	磁器	碗	高 [2.0] 底 3.2	高台あり／体部～底部破片	肥前系	近世 （19c中葉）
図版12-1-4	83 D	磁器	瓶	高 [4.0]	把手あり／青磁／体部小破片	肥前系	近世 （18c後葉）
図版12-1-5	83 D	磁器	碗	厚さ 1.0	染付／高台あり／外面：草花文、圏線／体部～底部破片	肥前系	近代 （19c後葉）
図版12-1-6	83 D	磁器	碗	高 [2.5]	染付／高台あり／外面：網目文、圏線／体部～底部破片	肥前系	近世 （18c後葉）
図版12-1-7	83 D	磁器	皿	厚さ 0.5	内面：型紙摺り／菊花文／口縁～体部破片	瀬戸系	近代 （19c後葉）
図版12-1-8	83 D	磁器	皿	高 [1.2]	型造り／染付／高台あり／内面：植物文か／体部～底部小破片	肥前系	近代 （19c後葉）
図版12-1-9	83 D	磁器	皿	高 [1.5]	染付／高台あり／内面：松文／体部～底部小破片	肥前系	近世 （19c中葉）
図版12-1-10	83 D	磁器	皿	高 [2.5]	染付／高台あり／内面：草花文／外面：松文、三重圏線／体部～底部破片	肥前系	近世 （19c中葉）
図版12-1-11	83 D	陶器	皿	高 [1.4]	付け高台／内面：灰釉／胎土の色調は灰色／底部破片	瀬戸・美濃系	近世 （17c後葉）
図版12-1-12	83 D	陶器	天目茶碗	高 [1.5]	削り出し高台／内面：鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／底部破片	瀬戸・美濃系	近世 （17c後葉）
図版12-1-13	83 D	陶器	徳利	厚さ 0.7	外面：灰釉／胎土の色調は灰色／体部破片	瀬戸・美濃系	近代 （19c後葉）
図版12-1-14	83 D	陶器	灯明受皿	高 [2.6]	内面：鉄釉／外面：口縁部鉄釉／胎土の色調は灰白色／破片	瀬戸・美濃系か	近世 （19c代）
図版12-1-15	83 D	陶器	灯明受皿	高 [2.5]	内外面：透明釉／胎土の色調は明茶褐色／破片	在地系	近世 （19c代）
図版12-1-16	83 D	陶器	擂鉢	高 [2.7]	底部は輪台状／鉄釉／櫛目13本一単位／底部破片	瀬戸系	近・現代
図版12-1-17	83 D	陶器	壷	厚 1.2 把手厚 2.3	把手あり／内外面：鉄釉／胎土の色調は灰色／胴部破片	瀬戸系	近・現代
図版12-2-1	84D	磁器	碗	高 [2.0]	高台あり／外面：淡緑色釉／体部～底部破片	肥前系	近世
図版12-2-2	84D	磁器	碗	厚 0.6	染付／外面：草花文／体部小破片	肥前系	近世 （19c代）
図版12-2-3	84D	陶器	擂鉢	高 [6.3]	口縁帯３段／内面：櫛目10本一単位、間隔蜜／胎土の色調は茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／口縁部～胴部破片	備前系	近代 （19c後葉）
図版12-3-1	86D	磁器	碗	高 [4.9]	鉄釉／海鼠釉／口縁部～体部破片	瀬戸系	近世 （19c中葉）
図版12-3-2	86D	磁器	碗	高 [5.5]	筒形／文様なし／口縁部～体部破片	瀬戸系	近代 （19c後葉）
図版12-3-3	86D	陶器	擂鉢	厚 1.0	内面：櫛目７本以上一単位、間隔疎／胎土の色調は灰色／胎土に小石を含む／胴部下半破片	瀬戸系	中世 （15c中葉）
第32図4 図版12-3-4	86D	土器	皿	高 [2.0] 底 (7.5)	平底ロクロ成形／底部に回転糸切り痕／色調は明黄褐色／胎土に茶褐色粒子・砂粒を含む／体部～底部30％	在地系	中世 （15c中葉）
第32図1 図版12-4-1	87D	磁器	碗	高 5.6 口 (11.0) 底 (3.8)	染付／高台あり／化学コバルト／外面：草花文、二重圏線／内面：口縁部雷文、見込二重圏線、松竹梅文か／体部～底部破片	瀬戸系	近・現代
図版12-4-2	87D	陶器	天目茶碗	厚 0.6	内外面：鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／体部小破片	瀬戸・美濃系	中世 （15c中葉）
図版12-4-3	87D	陶器	擂鉢	高 [5.5]	口縁帯２段／内面：櫛目12本以上一単位、間隔蜜／胎土の色調は茶褐色／胎土に石英・白色砂粒を含む／口縁部破片	備前系	近代 （19c後葉）
図版12-4-4	87D	陶器	甕	厚 1.0	胎土の色調は明茶褐色／胎土に砂粒を含む／胴部小破片	常滑	中世 （15c後葉）
図版12-4-5	87D	土器	捏鉢か	高 [3.7]	口縁部は肥厚する／最大厚 1.1㎝／色調は灰色／胎土に白色砂粒・小石を含む／口縁部～胴部上半破片	常滑	中世 （15c後葉）
図版12-4-6	87D	土器	土鍋	高 [2.9]	色調は灰色／胎土に白色砂粒・小石を含む／胴部下半～底部破片	在地系	中世 （15c後葉）

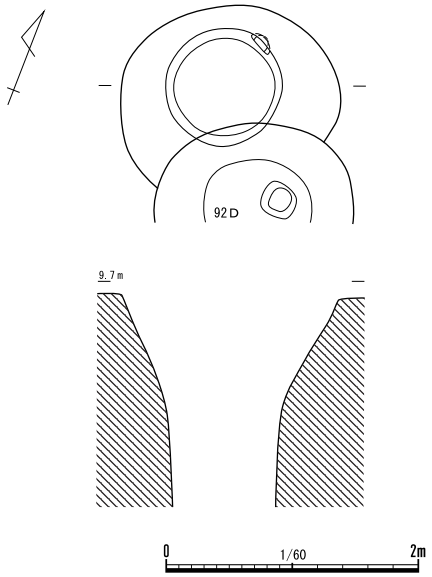
第20表　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	遺構名	種別	器 種	法量 (cm)	製 作 の 特 徴 等	推定産地	時 期
図版 13-1-1	88D	陶器	土管	厚 2.8	口唇部は肥厚する／内面に８本平行沈線文／内外面に鉄釉／胎土の色調は茶褐色／胎土に白色砂粒をやや多く含む／口縁部破片	常滑	近代 （19c後葉以降）
第32図１ 図版 13-2-1	90D	陶器	皿	高 [1.7]	削り出し高台／内面灰釉／胎土の色調は灰色／体部～底部破片	瀬戸・美濃系	近世 （17c）
第32図２ 図版 13-2-2	90D	陶器	小碗	高 [1.7] 底 3.0	高台／胎土の色調は淡黄褐色／体部～底部破片	瀬戸・美濃系	近世 （19c）
第 32図１ 図版 13-3-1	92 D	磁器	碗	高 4.4 口 (6.5) 底 3.2	端反形／型紙刷り／文様：草花文／遺存度50％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第 32図２ 図版 13-3-2	92 D	磁器	碗	高 [4.3] 底 (4.0)	口縁部欠損／型紙刷り／文様：草花文／体部～底部30％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第 32図３ 図版 13-3-3	92 D	磁器	碗	高 [3.3] 底 (3.8)	口縁部欠損／化学コバルト／外面型紙刷り／文様：菊花文／体部～底部30％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第 32図４ 図版 13-3-4	92 D	磁器	碗	高 [3.0] 底 (3.0)	口縁部欠損／化学コバルト／型紙刷り／文様：草花文／体部～底部30％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第 32図５ 図版 13-3-5	92 D	磁器	小皿	高 2.1 口 (10.4) 底 5.1	染付／化学コバルト／内面：草花文／外面：七宝崩し繋ぎ／遺存度30％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第 32図６ 図版 13-3-6	92 D	磁器	鉢	高 [3.2]	染付／内面：鶴／外面底部中央に窪み／体部～底部20％	肥前系	近世 （18c後葉）
図版 13-3-7	92 D	磁器	皿	厚 0.8	染付／内面：唐草文／外面：圏線が残る／底部破片	肥前系	近世 （18c前葉）
図版 13-3-8	92 D	磁器	小碗	高 [2.4]	染付／内面：圏線が残る／外面：圏線が残る／底部破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-9	92 D	磁器	碗	高 [2.2]	染付／内面：無文／外面：網目文／体部～底部破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-10	92 D	磁器	碗	高 [2.1]	染付／内面：無文／外面：草花文／体部～底部破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-11	92 D	磁器	碗	高 [4.3]	染付／内面：瓔珞文／外面：梅花文／口縁～体部破片	瀬戸系	近世 （19c中葉）
図版 13-3-12	92 D	磁器	蓋	厚 0.4	染付／内面：無文／外面：風景文／天井部～口縁部小破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-13	92 D	陶器	小瓶	厚 0.3	赤色絵具／体部小破片	唐津	近世 （18c中葉）
図版 13-3-14	92 D	磁器	急須	高 [3.5]	染付／蓋受部あり／外面：植物文／体部破片	瀬戸系	近世 （19c）
図版 13-3-15	92 D	磁器	鉢	高 [5.7]	染付／口唇部は平坦／内面：無文／外面：草花文／口縁～体部下半破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-16	92 D	磁器	鉢	高 [3.2]	染付／平底／内面：無文／外面：圏線／体部下半～底部破片	肥前系	近世 （19c）
図版 13-3-17	92 D	陶器	急須	高 [2.2]	碁笥底／型造り／外面底部に布目痕／色調は茶褐色／体部下半～底部破片	益子系	近世 （19c）
図版 13-3-18	92 D	陶器	土瓶	厚 2.5 把手厚 0.9	Ｕ字状把手あり／外面に植物文／胎土の色調は淡黄褐色／体部上半破片	益子系	近世 （19c）
図版 13-3-19	92 D	陶器	鉢	高 [3.7]	口唇部は平坦で外面に肥厚している／内外面に灰釉／口縁部破片	瀬戸系	近世 （19c）
図版 13-3-20	92 D	陶器	鉢	厚 0.9	胎土の色調は淡黄褐色／内外面に鉄釉／底部破片	瀬戸系	近世 （19c）
図版 13-3-21	92 D	陶器	甕	厚 1.0	胎土の色調は茶褐色／胴部破片	常滑	近世
図版 13-3-22	92 D	陶器	甕	厚 1.2	胎土の色調は黒褐色を基調／胎土に白色砂粒・小石を含む／外面に鉄釉／胴部上半破片	常滑	近世
図版 13-3-23	92 D	陶器	灯明受皿	高 1.7 口 9.2 底 4.2	平底／油溝はヘラ切り／内面を中心に鉄釉／ロクロ成形／底部は回転ヘラ削り／遺存度60％	在地系か	近世 （19c）
図版 13-3-24	92 D	土器	灯明受皿	高 1.3 口 7.3 底 3.9	平底／一部内外面に煤付着あり／胎土の色調は橙色／胎土に砂粒を僅かに含む／底部に回転糸切り痕／遺存度70％	在地系	近世 （19c）
図版 13-3-25	92 D	土器	焼塩壷	高 [3.4]	口唇部の蓋受部は平坦で短く外傾／色調は黒色／胎土の色調は灰色／胎土に砂粒を僅かに含む／口縁部～体部小破片	在地系	近世 （17c）

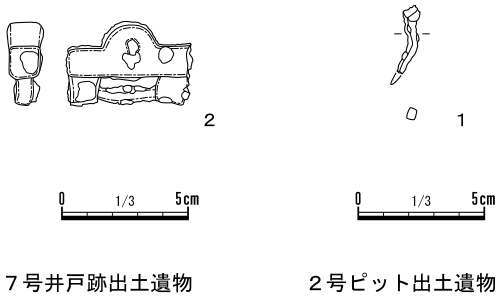
第20表　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版 13-3-26	92 D	土器	土鍋	高 [5.4]	口唇部は平坦／口縁部はやや内湾／外面に輪積み痕あり／胎土の色調は暗茶褐色／胎土に角閃石・砂粒を含む／口縁部～体部破片	在地系	近世 (17c)
第34図2 図版 14-1-1	7W	陶器	擂鉢	厚 1.2	櫛目７本／色調は明茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／胴部小破片	備前系	近代 (19c後葉)
図版 14-2-1	1P	磁器	小碗	高 [1.4] 底 2.8	高台あり／外面染付／文様は草花文か？／圏線／外面底部に圏線・見込みに角福銘／体部下半～底部破片	瀬戸系	近代 (19c後葉)
図版 14-2-2	1P	磁器	碗	厚 0.8	外面染付／コンニャク版／外面：草花文／体部破片	肥前系	近世 (18c後葉)
図版 14-2-3	1P	陶器	擂鉢	厚 1.0	内面に櫛目８本以上／色調は明茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／胴部破片	備前系	近世 (19c)
図版 14-2-1	3P	磁器	碗	厚 0.5	染付／外面：二重網目文／口縁部～体部破片	肥前系	近世 (18c後葉)
図版 14-2-1	4P	磁器	碗	厚 0.3	白磁／口縁部～体部破片	肥前系	近世
図版 14-2-1	5P	陶器	碗	厚 0.5	げんこつ碗／口縁部～体部破片	瀬戸・美濃系	近世 (18c後葉)
図版 14-2-2	5P	土器	皿	高 1.9	色調は淡橙色／胎土に茶褐色粒子・角閃石・砂粒・小石を含む	在地系	近世 (19c)
図版 14-2-3	5P	土器	土鍋	高 [4.6]	色調は黒色／胎土の色調は灰白色／胎土に角閃石・砂粒を含む／体部～底部破片	在地系	近世 (17c)
図版 14-2-1	6P	陶器	土鍋	高 [3.8]	口縁部内面に受部をもつ／灰釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／口縁部～体部破片	瀬戸・美濃系	近世 (19c)
図版 14-2-2	7P	陶器	碗	高 [2.0] 底 4.8	高台は削り高台／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／底部破片／	唐津	近世 (17c)

第20表　土坑・井戸跡・ピット出土陶磁器・土器一覧（３）



第33図　７号井戸跡（1／60）



７号井戸跡出土遺物　　２号ピット出土遺物

第34図　７号井戸跡・２号ピット出土遺物（1／3）

（５）硬化面

確認調査の段階から硬化した面が調査区東半部から北半部にかけて広範囲に確認できたが、その硬化面が何に由来するかは確定できなかった。これについては、今回検出された遺構がすべて近世以降に比定できること、さらに本地点が宝幢寺領域であることから、硬化面そして今回検出された近世以降の遺構・遺物は、宝幢寺関連のものと考えられる。

さらに、こうした硬化面と調査東端部の溝状ではあるが86Ｄとした土坑及びピット列を関連付けることにより、宝幢寺への参拝通路及び柵列であったのではないかと推測される。調査区西半部において、「コ」の字形の版築面が確認できた範囲については、宝幢寺関連の何らかの施設（堂）の基礎部分と思われる。

遺　　構（第35図）

［位　　置］（Ａ－２）グリッド。

［構　　造］**広がり**：硬化面の範囲は、概して、調査区南東端の（Ｄ－１～３）グリッドには南北方向に幅２ｍ程、調査区北東端の（Ｂ～Ｄ－１～３）グリッドには東西方向に幅10ｍほどと大きく「Ｌ」字状に屈曲するように確認できた。規模は南北・東西方向約15ｍ。**形状**：地形的には、調査区東側が下がっており、Ａグリッドと Ｄグリッドの高低差は、0.6～１ｍである。硬化面の硬化状況は、特に（Ｃ・Ｄ－１・２）グリッド周辺が最も硬化しており、硬化した厚さは５～10㎝。

［遺　　物］陶磁器、土器、土製品、ガラス製品、石製品（石筆）、鉄製品（釘）が出土した。

［時　　期］近世以降（19世紀後半）。

遺　　物（第36図、図版14－３、図版15－１、第21・22表）

［陶磁器・土器］（第36図１～５・９～11、図版14－３－１～18、第21表）

１～８は磁器、９～17は陶器、18は土器である。

［ガラス製品］（図版14－３－19～21、第21表）

19～21はガラス容器の破片で、19は蓋、20・21は瓶の底部と思われる。

［土 製 品］（図版15－１－22・23、第22表）

22・23は素焼人形で、22は供物、23は大黒である。

［石 製 品］（第36図24、図版15－１－24、第22表）

24は石筆である。

［鉄 製 品］（第36図25～29、図版15－１－25～29、第22表）

25は不明品で、26～29は釘である。

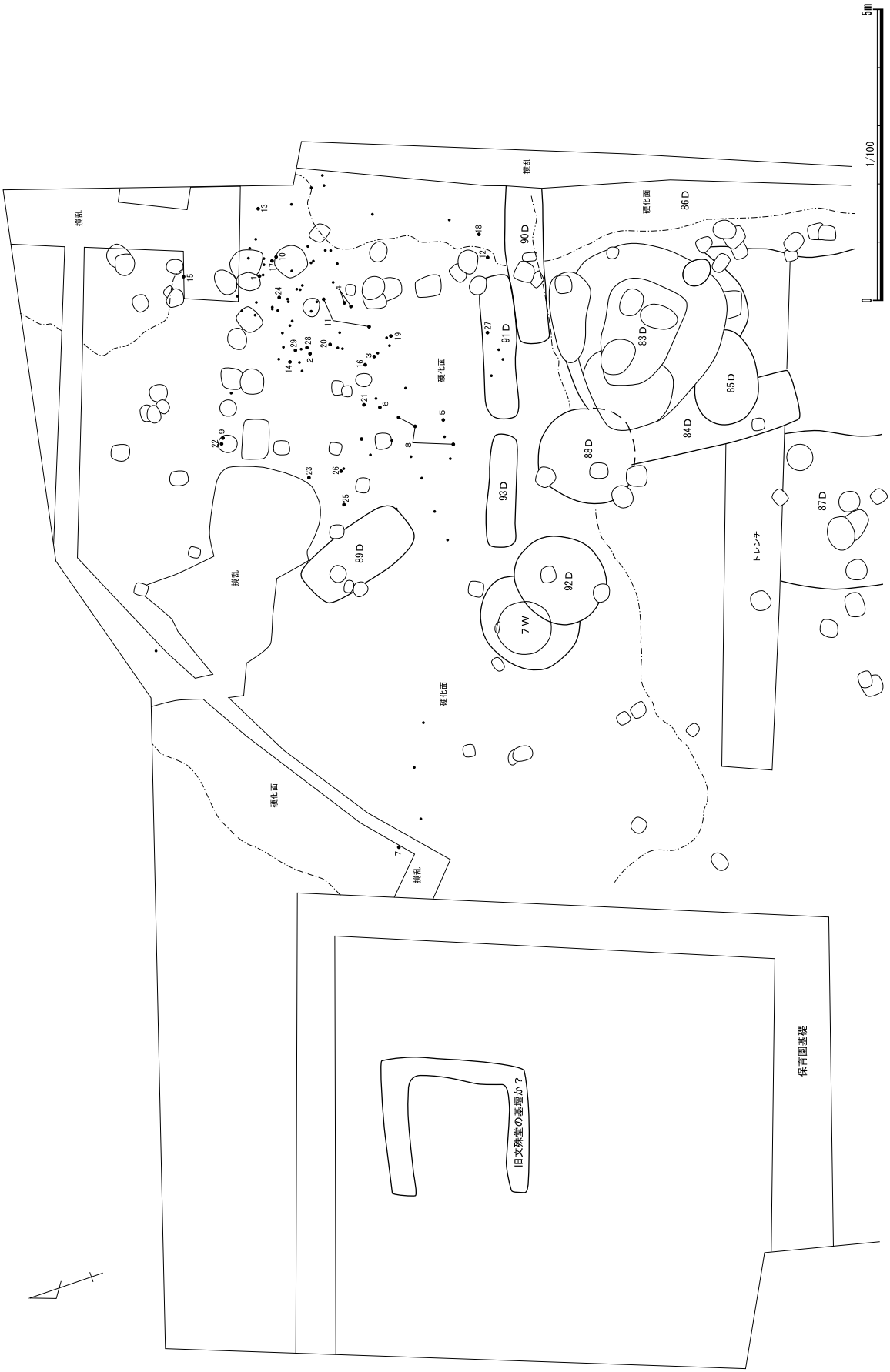
（６）遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。ただし、近世以降の遺物については、前項（５）の旧文殊堂及び硬化面に関連する遺物と考えられる。

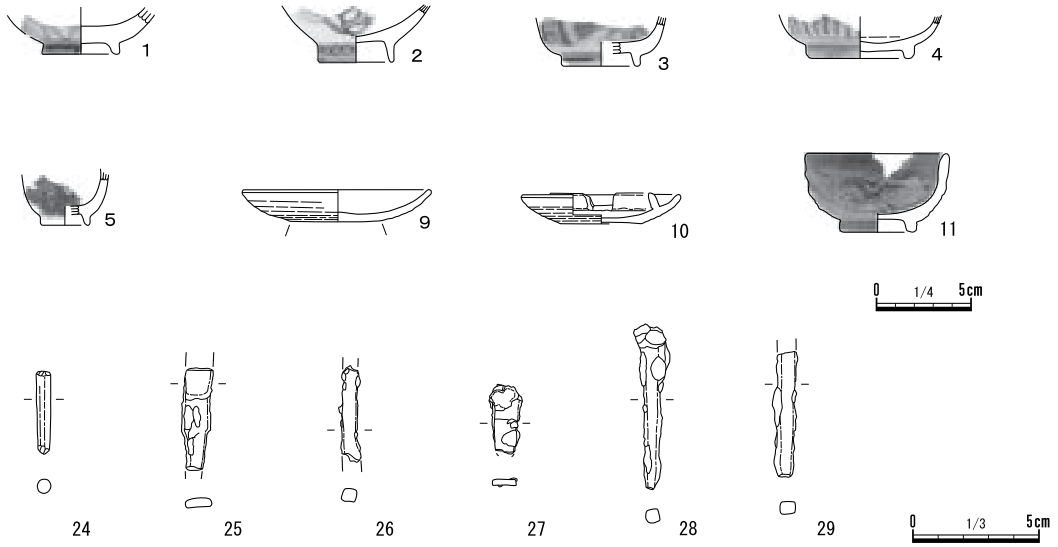
今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の土器、平安時代の土器、近世以降の遺物に分類する。

１．縄文時代の土器（第37図１～４、図版15－２－１～４、第23表）

１は早期末葉の条痕文系土器、２は中期中葉の勝坂式土器、３は中期後葉の加曽利ＥⅠ式土器、４は



第35図　近世以降の硬化面遺物出土状態（1／100）



第36図　硬化面出土遺物（1／4・1／3）

図版番号	種別	器種	法量(cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
第36図1 図版14-3-1	磁器	碗	高 [2.5] 底 4.2	高台あり／染付／外面：二重網目文、圏線／内面：無文／体部下半～底部破片／くらわんか茶椀	肥前系	近世 （18c中葉）
第36図2 図版14-3-2	磁器	碗	高 [3.1] 底 (4.0)	高台あり／染付／外面：植物文、高台七宝繋ぎ、底部一重圏線／内面：無文／体部下半～底部破片	肥前系	近代 （19c後葉以降）
第36図3 図版14-3-3	磁器	碗	高 [2.7] 底 (4.2)	高台あり／型紙摺り／外面：山水文、高台圏線、底部圏線／内面：無文／体部中位～底部破片	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
第36図4 図版14-3-4	磁器	瓶	高 [2.2] 底 5.7	高台あり／染付／外面：縞、高台二重圏線／体部下半～底部30％	肥前系	近世 （18c後葉）
第36図5 図版14-3-5	磁器	猪口	高 [2.8] 底 (2.6)	紅猪口か／高台あり／化学コバルト／外面：山水文、高台圏線／体部中位～底部30％	瀬戸系	近代 （19c後葉以降）
図版14-3-6	磁器	蓋	高 [2.2]	摘みあり／染付／外面：花文／内面：無文／体部下半～底部破片	瀬戸系	近世 （19c前葉）
図版14-3-7	磁器	皿	高 [1.5]	高台あり／染付／見込みに松竹梅／体部下半～底部破片	肥前系	近世 （19c）
図版14-3-8	磁器	急須	高 [5.1]	受部あり／外面：植物文／胴部破片	肥前系	近代 （19c後葉以降）
第36図9 図版14-3-9	陶器	灯明皿	高 1.7 口 10.1 底 5.0	平底／外面底部を除き鉄釉／見込みに環状痕／胎土の色調は灰色／遺存度80％	不明	近世 （19c）
第36図10 図版14-3-10	陶器	灯明受皿	高 1.6 口 (8.4) 底 (4.2)	平底／内外面に鉄釉／油溝ヘラ削り／胎土の色調は淡黄褐色／遺存度40％	不明	近世 （19c）
第36図11 図版14-3-11	陶器	碗	高 4.3 口 7.4 底 4.0	内面及び口縁部外面に青ひび／外面：走り駒・左馬／胎土の色調は淡黄褐色／遺存度50％	相馬駒焼	近世 （19c以降）
図版14-3-12	陶器	皿	高 [1.5]	志野釉／見込みピン留め／胎土の色調は黄白色／底部破片	瀬戸・美濃系	近世 （17c前葉）
図版14-3-13	陶器	鍋	厚 0.6	受部あり／内外面に灰釉／胎土の色調は灰褐色／胴部小破片	瀬戸・美濃系	近世 （18c）
図版14-3-14	陶器	徳利	厚 0.9	灰釉／胎土の色調は淡黄褐色／胴部破片	瀬戸系	近世 （19c）
図版14-3-15	陶器	擂鉢	厚 1.9	内面：櫛目９本一単位、間隔蜜重複／色調は茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／胴部破片	備前系	近代 （19c後葉以降）
図版14-3-16	陶器	甕	厚 1.3	内外面に鉄釉、内面ハケ塗り／胎土の色調は黄白色／胎土に砂粒を含む／胴部破片	瀬戸系	近世 （19c）

第21表　硬化面出土陶磁器・土器・ガラス製品一覧（１）

図版番号	種別	器種	法量(cm)	製作の特徴等	推定産地	時期
図版 14-3-17	陶器	甕	高 [6.7]	受部あり／折り返し口縁／肩張り／胎土の色調は灰褐色／胎土に白色砂粒・砂粒をやや多く含む口縁部～体部上半破片	常滑系	中世（15c）
図版 14-3-18	土器	焙烙	高 5.7	口唇部は平坦／平底／外面に煤付着／胎土の色調は淡黄褐色／胎土に砂粒を含む／口縁部～底部破片	在地系	近世（18c）
図版 14-3-19	ガラス製品	おはじき	厚 0.5	上部中央は凹んでいる／凹みに草花文あり／色調は黄緑色／遺存度 60％	不明	近・現代
図版 14-3-20	ガラス製品	小瓶	高 [1.3] 底 3.6	底部中央は凹んでいる／色調は透明色／体部下半～底部破片	不明	近・現代
図版 14-3-21	ガラス製品	瓶	高 [3.1]	ビール瓶か／底部中央は上底／器面に商標か「◎」／色調は茶色／体部下半～底部破片	不明	近・現代

第21表　硬化面出土陶磁器・土器・ガラス製品一覧（２）

挿図番号 図版番号	種別	種　類	長さ	幅	厚さ	重さ	特　　徴	時　期
図版 15-1-22	土製品	素焼人形	6.2	5.3	1.0	27.0	供物／色調は灰色／完形品	近世（19c 以降）
図版 15-1-23	土製品	素焼人形	5.1	3.6	0.5	23.0	大黒／中空／色調は灰白色／裾部が一部欠損する	近世（19c 以降）
第36図24 図版 15-1-24	石製品	石筆	3.2	0.6	0.6	1.7	全体に細かい面をもち光沢を帯びる／頭部付近に僅かに被熱痕あり／石材は滑石／完形品	近世以降
第36図25 図版 15-1-25	鉄製品	不明品	4.1	1.1	0.5	5.3	茎部あり／扁平／身部断面は長方形／鉄鏃か	近世以降
第36図26 図版 15-1--26	鉄製品	釘	3.8	0.8	0.5	2.8	断面は長方形／頭部は欠損する	近世以降
第36図27 図版 15-1-27	鉄製品	釘	2.7	1.3	0.4	1.8	扁平／頭部は屈曲／先端部は欠損する	近世以降
第36図28 図版 15-1-28	鉄製品	釘	6.6	1.2	0.9	8.3	頭部は丸い／断面は長方形／ほぼ完形品	近世以降
第36図29 図版 15-1-29	鉄製品	釘	5.0	0.7	0.8	4.3	断面は長方形／頭部・先端部は欠損する	近世以降

（単位：cm，g）

第22表　硬化面出土土製品・石製品・鉄製品一覧

後期前葉の称名寺Ⅰ式土器と思われる。

２．平安時代の土器（図版15－２－５、第23表）

５は須恵器坏形土器の口縁部破片である。

３．近世以降の遺物（図版15－２－６～38、第24・25表）

[陶 磁 器]（図版15－２－６～32、第24表）

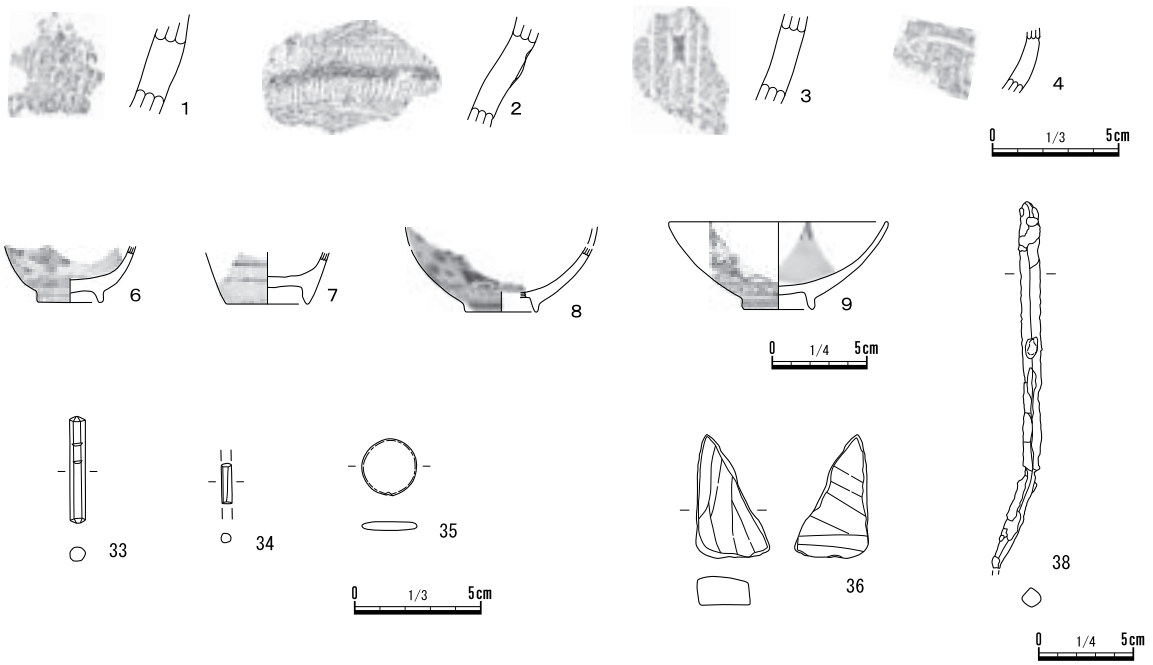
６～17は磁器、18～32は陶器である。

[石 製 品]（第37図33～37、図版15－２－33～37、第25表）

33・34は石筆で、石材はいずれも滑石である。35は碁石で、石材は粘板岩である。36は砥石で、石材は凝灰岩である。37は板碑で、石材は緑色片岩である。

[鉄 製 品]（第37図38、図版15－２－38、第25表）

38は鉄火箸であろうか。



第37図　遺構外出土遺物（1／4・1／3）

図版番号	器 種	法量 (cm)	特　　徴	色　調	胎　土	遺存度	出土位置	時　期
第37図1 図版15-2-1	深鉢	厚 1.1	表面に条痕文か	淡橙色	繊維を僅かに黄褐色粒子・砂粒を含む	胴部破片	87 D	早期末葉 (条痕文系)
第37図2 図版15-2-2	深鉢	厚 1.0	隆帯脇に幅広キャタピラ文／鋸歯文	茶褐色	雲母・角閃石・砂粒を含む	胴部破片	86 D	中期中葉 (勝坂式)
第37図3 図版15-2-3	深鉢	厚 0.9	懸垂文は隆帯と沈線文、磨消し表現なし／ＲＬ縄文／隆帯は大部分が剥落／内面は煤付着	茶褐色	砂粒を含む	胴部破片	87 D	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)
第37図4 図版15-2-4	深鉢	厚 0.6	文様は曲線的な帯縄文／縄文LR	茶褐色	砂粒を含む	胴部小破片	90 D	後期前葉 (称名寺1式)
図版15-2-5	須恵器 坏	厚 0.9	口唇部はやや肥厚／ロクロ成形／ロクロ回転は右回転／東金子製品	青灰色	白色砂粒を僅かに含む	口縁部～体部小片	87D	平安時代 (9世紀後葉)

第23表　遺構外出土縄文・平安時代土器一覧

挿図番号 図版番号	種 別	器 種	法量 (cm)	製 作 の 特 徴 等	推定産地	出土位置	時 期
第37図6 図版15-2-6	磁器	碗	高 [3.0] 底 3.4	高台あり／染付／外面：草花文、圏線／体部中位～底部60％	肥前系	遺構外	近世 (18c～19c)
第37図7 図版15-2-7	磁器	小瓶	高 [2.9] 底 4.6	クリ底／染付／外面：圏線／被熱／胴部下半～底部30％	肥前系	遺構外	近世 (18c後～19c前)
第37図8 図版15-2-8	磁器	碗	高 4.6 口 (11.6) 底 3.8	高台あり／型紙摺り／科学コバルト／外面：鳳凰・竜、雷文繋ぎ／内面：瓔珞文／遺存度20％以下	肥前系	遺構外	近代 (19c後葉)
第37図9 図版15-2-9	磁器	碗	高 [4.5] 底 (4.0)	高台あり／染付／外面：草花文／体部上半～底部破片	肥前系	遺構外	近世 (18c～19c)
図版15-2-10	磁器	碗	高 [3.0]	外面：草花文・雀文／口縁部～体部小破片	瀬戸系	遺構外	近代 (19c後葉)
図版15-2-11	磁器	碗	高 [4.3]	型紙摺り／外面：亀甲文・梅花文／口縁部～体部下半破片	肥前系	遺構外	近代 (19c後葉)

第24表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（1）

挿図番号 図版番号	種別	器種	法量 (㎝)	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版 15-2-12	磁器	仏飯器	高 [2.5]	染付／外面：草花文／口縁部～体部下半小破片	肥前系	遺構外	近世 (19c)
図版 15-2-13	磁器	碗	高 [3.8]	煎茶碗／口縁部は僅かに外反する／白磁／口縁部～体部中位破片	肥前系	遺構外	近世 (19c 前葉)
図版 15-2-14	磁器	鉢	厚 0.6	染付／芙蓉手／体部破片	肥前系	87D 撹乱	近世 (18c 中葉)
図版 15-2-15	磁器	鉢	高 [4.5]	高台あり / 染付／内面：四方襷、見込みに風景文／体部～底部破片	肥前系	遺構外	近世 (18c 後葉)
図版 15-2-16	磁器	鉢	高 [7.6]	型紙摺り／外面：笹・四方襷／化学コバルト／口縁部～底部破片	瀬戸系 か	遺構外	近代 (19c 後葉)
図版 15-2-17	磁器	急須	厚 0.3	急須の把手／把手長さ 5.0㎝・最大径 1.7㎝／把手先端はやや太身／中空／無地／把手破片	瀬戸系	遺構外	近代 (19c 後葉)
図版 15-2-18	陶器	碗	高 [3.2]	白濁釉／体部破片	京焼系	遺構外	近世 (19c)
図版 15-2-19	陶器	鉢	厚 0.8	内外面に緑釉／胎土の色調は灰色／胎土は精錬されている／体部小破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世 (18c 後葉)
図版 15-2-20	陶器	鉢	厚 0.9	鉤縁／内外面に灰釉／胎土の色調は黄白色／胎土は精錬されている／口縁部～体部上半小破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世 (18c 後葉)
図版 15-2-21	陶器	甕	高 [5.0]	高台あり／外面に透明釉／胎土の色調は灰色／胴部～底部破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世
図版 15-2-22	陶器	灯明皿	高 [2.0]	ロクロ成形／内面に灰釉／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／外面に煤付着／口縁部小破片	瀬戸・ 美濃系	87D 撹乱	近世 (18c 後葉)
図版 15-2-23	陶器	灯明受皿	高 [2.0]	台部は欠損か／内外面に灰釉／胎土の色調は白色／皿部破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世 (19c 前葉)
図版 15-2-24	陶器	灯明受皿	高 1.8	内面及び外面口縁部に鉄釉／油溝はヘラ切り／胎土の色調は淡黄褐色を基調／胎土に砂粒を僅かに含む／遺存度 15％以下	不明	遺構外	近世 (19c)
図版 15-2-25	陶器	秉燭	高 [5.7]	台付／外面に透明釉／胎土の色調は明茶褐色／脚台部内面はヘラナデ/脚台部破片	在地系	遺構外	近世 (19c)
図版 15-2-26	陶器	擂鉢	高 [11.3]	受部あり／櫛目９本一単位／内外面に鉄釉／胎土の色調は暗黄褐色を基調／胎土に砂粒を僅かに含む／口縁部～胴部破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世 (17c 前葉)
図版 15-2-27	陶器	擂鉢	高 [3.5]	内面に櫛目、疎／内外面に鉄釉／胎土の色調は明茶褐色／胎土に雲母・砂粒を含む／外面に煤付着／口縁部破片	備前系	遺構外	近世 (19c)
図版 15-2-28	陶器	擂鉢	厚 0.9	内面に櫛目８本一単位、密／胎土の色調は暗灰褐色／胎土に白色砂粒・小石を含む／胴部破片	備前系	遺構外	近代 (19c 後葉)
図版 15-2-29	陶器	徳利	高 [4.6]	外面底部を除き鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土に砂粒を僅かに含む／一部被熱／胴部下半～底部破片	瀬戸・ 美濃系	遺構外	近世 (17c 後葉)
図版 15-2-30	土器	捏鉢	厚 1.0	無釉／内面に指ナデ痕／胎土の色調は暗橙色／胎土に白色砂粒・小石を含む／胴部破片	在地系	87D 撹乱	中世 (16c 後葉)
図版 15-2-31	陶器	甕	厚 0.9	内面に指ナデ痕／胎土の色調は暗橙色／胎土に白色砂粒・小石を含む／胴部破片	常滑	遺構外	近世 (17c 前葉)
図版 15-2-32	陶器	甕	厚 1.6	内面に指ナデ痕／胎土の色調は灰褐色／胎土に石英・白色砂粒・小石を含む／肩部破片	常滑	遺構外	近代

第 24 表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	種　別	種　類	長さ	幅	厚さ	重さ	特　　徴	出土位置
第 37 図 33 図版 15-2-33	石製品	石筆	4.3	0.6	0.5	3.3	断面は円形／色調は灰色／石材は滑石／完形品	遺構外
第 37 図 34 図版 15-2-34	石製品	石筆	1.6	0.4	0.3	0.5	断面は楕円形／色調は灰色／石材は滑石／両端は欠損する／	遺構外
第 37 図 35 図版 15-2-35	石製品	碁石	2.2	2.2	0.3	2.4	色調は黒色／石材は粘板岩／完形品	遺構外
第 37 図 36 図版 15-2-36	石製品	砥石	6.5	3.9	1.6	37.3	使用面は表裏２面と側面１面／色調は白色／石材は凝灰岩／長軸斜めに欠損する	遺構外
図版 15-2-37	石製品	板碑	7.2	8.0	2.2	256.0	側面の一部は残存する／石材は緑色片岩	遺構外
第 37 図 38 図版 15-2-38	鉄製品	火箸か	19.4	1.1	1.1	37.5	頭部は丸味をもち、断面は方形である／先端部を欠損する	遺構外

（単位：㎝，g）

第 25 表　遺構外出土石製品・金属製品一覧

第５章　調査のまとめ

本書は、田子山遺跡第51地点、中野遺跡第55・57地点の発掘調査成果を収録したものである。ここでは、今回検出された遺構・遺物について、地点毎に調査所見をまとめることにする。

第１節　田子山遺跡第51地点の調査成果

本地点からは、縄文時代の土坑１基（211Ｄ）、古墳時代後期の住居跡２軒（56・59Ｈ）、平安時代の住居跡３軒（57・58・60Ｈ）・土坑３基（208～210Ｄ）などが検出された。ここでは、これらの遺構・遺物について、簡単にまとめてみることにする。

（１）有舌尖頭器について

211号土坑からは、縄文時代前期の土器片と縄文時代草創期と考えられる有舌尖頭器が出土した。有舌尖頭器は志木市内では初の出土である。ここでは、有舌尖頭器について所見を述べることとする。

本資料は、先端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。石材は乳白色のチャートである。形態的特徴としては、先端部側縁が緩やかに内反し、中間部にかえし状の三角形の張り出しが顕著であり、やや長めの棒状の舌部であり、全体的に「十字」形を呈する点である。これらの特徴から、「花見山型」（白石　2001）有舌尖頭器と考えられる。素材は、両面に剥離が及ぶため詳細は分からないが、正面の中央付近に一部素材面を残しており、剥片素材であると考えられる。整形加工については、幅が狭く、奥に延びる剥離面が多く認められることから、押圧剥離によるものと考えられる。

近隣での類例としては、富士見市八ヶ上遺跡Ｂ地点（佐々木　1974）が挙げられる。本遺跡からは、隆起線文土器片と共に花見山型有舌尖頭器、石鏃、スクレイパー、剥片・砕片がまとまって出土している。また、富士見市南通遺跡からも単独出土、もしくは弥生時代住居跡覆土中出土の花見山型有舌尖頭器が確認されている（高橋　1983）。

花見山型有舌尖頭器の編年的位置づけについては、標識遺跡となる神奈川県横浜市花見山遺跡（坂本・鈴木・倉沢　1995）、同県川崎市万福寺遺跡（原田・北原・今泉　2005）で隆起線文土器とともに花見山型有舌尖頭器が出土しており、前述の八ヶ上遺跡も隆起線文土器が伴うことから、縄文時代草創期の隆起線文土器段階と考えられる。

（２）古墳時代後期の遺物について

ここでは、古墳時代後期の２軒の住居跡（56・59Ｈ）から出土した土器について、住居跡毎に考えてみることにする。

56号住居跡出土土器（第８図）

本住居跡は、今回の第51地点で最初に検出されていたが、その後、第107地点の発掘調査の際に住居北東コーナー部分が精査され、その成果が先行して報告されている（尾形・徳留・深井・青木　2013）。そのため、今回、第107地点と本地点から出土した土器の接合を試みた結果、８の土師器甕形

土器については、上半部と下半部が接合したため、再実測を行い第８図に掲載した。

本住居跡から出土した遺物をまとめると、出土遺物はすべて土器で、１・２・９～12は土師器坏形土器、５は土師器甑形土器、６～８・16は土師器甕形土器、３・４は須恵器瓶形土器、13～15は須恵器坏形土器である。なお、本住居跡については、本文中に記載したが、覆土上層からは平安時代の土器（13～15）が出土したが、下層及び床面上から古墳時代後期（７世紀後葉）の土器が安定して出土したことから、古墳時代後期に比定している。そのため、本住居跡の古墳時代後期の土器だけの抽出を行った場合の器種構成は、土師器坏形土器（１・２・９～12)、土師器甑形土器（５)、土師器甕形土器（６～８・16)、須恵器壷形土器（３・４）となる。

まず、土師器坏形土器については、1は無彩有稜坏、２は無彩有段坏で、どちらも在地系土師器（尾形　2005・2006）である。

９・10・12は赤色土器で、9・10はいわゆる比企型坏（水口　1989、石坂　1995、尾形　1999)、12はいわゆる続比企型坏（富田　2007）である。さらに、これらはすべて赤い胎土を基調とするため、入間系土師器（尾形　2008）と考えられる。11は黒色土器で、調整・胎土の観察から在地系土師器と考えられる。特に土師器坏形土器については、9～11が口径10㎝程であり、これは須恵器坏形土器がＴＫ217型式において法量の最小化に伴うものであり、７世紀後葉に位置付けられるものである。

土師器甑・甕形土器については、5の甑形土器は底部が穿孔する浅鉢タイプで、市内でも珍しい土器ある。甕形土器は６・16が長甕、７・８が丸甕に分類でき、特に長甕の特徴として、口縁部に最大径をもつことから、７世紀後葉に位置付けすることができる。

須恵器については、３が短頸壷ないし蓋付壷で、４が長頸壷である。いずれも湖西製品と考えられる。特に４の特徴として、肩部があまり張らない点は湖西第Ⅲ期（後藤　1989）の中で捉えられるものであろう。

また、平安時代の遺物としては、13の坏形土器は市内でも珍しい土器で、体部内外面に指頭による成形痕をもつ特徴から、南武蔵型坏と考えられる。この土器は推定口径11.6㎝・器高3.8㎝・推定底径6.8㎝であることから、鶴間氏の編年による４段階に相当するものと思われる（鶴間　2009)。

59号住居跡出土土器（第16図）

出土遺物はすべて土師器である。器種構成は、鉢形土器（１)、甕形土器（２～5）である。特に甕形土器の長甕（３～５）は、４・５が胴部から底部の形態で56号住居跡と同様に口縁部に最大径をもつタイプと推測されるが、3はやや口縁部に最大径が顕著ではないと思われる。時期としては、７世紀後葉に比定されるものである。

（３）平安時代の遺物について

平安時代の３軒の住居跡（57・58・60Ｈ）から出土した土器について、住居跡毎に考えてみることにする。

57号住居跡出土土器（第11図）

器種構成は須恵器坏形土器（１～３)・埦形土器（４)・皿形土器（５・６)、土師器甕形土器（７～10）である。

まず、須恵器坏・埦形土器については、すべて回転糸切り未調整の土器であり、９世紀以降の時期に比定されることから、古代の入間を考える会で編年指標の基準とされる口径と内底径の比率（口径比

率）を参考にしてみることにする。１は口径11.5㎝・底径5.4㎝・内底径4.8㎝・口径比率46%、２は口径11.0㎝・底径5.2㎝・内底径4.4・口径比率47%、４は推定口径13.6㎝・推定底径6.2㎝・推定内底径6.0㎝・口径比率44%である。その結果、内底径はＸ期の5.2㎝～4.4㎝、口径比率はⅧ期の50～45％に該当し、やや食い違うが、法量の縮小化を考えるとⅨ～Ｘ期として比定することが妥当と考えられるため、時期については９世紀末葉に位置付けることとした（古代の入間を考える会　2015）。

土師器甕形土器については、おそらく小型台付甕（７・８）といわゆる武蔵型甕（９・10）がある。これらの特に口縁部の特徴は、すべての土器で強い屈曲の「コ」の字口縁を呈していることから、時期については、根本編年（根本　1999）によるⅦ～Ⅷ期（９世紀後半～10世紀前半）の口縁部が「コ」の字になるもののみの段階に比定できる。

以上から、本住居跡出土土器は、おおよそ９世紀末葉に位置付けるものと考えられる。

58号住居跡出土土器（第13図）

出土遺物は２点のみである。１は土師器甕形土器、２は須恵器壷形土器である。このうち、１の土師器甕形土器は小型台付甕となるタイプであろう。口縁部の「コ」の字口縁がきっちりしていることから、やはり、根本編年により９世紀末葉に位置付けられるであろう。

60号住居跡出土土器（第18図）

器種構成は、須恵器坏形土器（１）・皿形土器（２・３）・埦形土器（４）・壷形土器（５）、土師器甕形土器（６～８）である。

まず、１の須恵器坏形土器であるが、浅身であることから皿形土器であるかもしれない。推定口径13.2㎝の東金子製品であることから、おおよそⅧ期（９世紀中葉）頃に比定される。

４の須恵器埦形土器は、深身の高台付埦で、口径15.5㎝・底径8.0㎝・内底径6.0㎝・口径比率38%である。口径に対する内底径が縮小し、口径比率40％を切る段階であるⅨ期（９世紀後半）の特徴を示している（古代の入間を考える会　2015）。

土師器甕形土器については、すべて小型台付甕である。これらの特に口縁部の特徴は、７が幾分「コ」の字口縁に成りかけてはいるが、６はまだであるため、時期については、根本編年によるⅥ期（９世紀中葉）に比定できる。

以上から、本住居跡出土土器は、須恵器坏・埦形土器から９世紀後葉に比定できるが、土師器甕形土器はやや古い９世紀中葉に比定されるため、今回検出された57Ｈよりもやや古い様相として、ここでは９世紀後葉に位置付けることとした。

第２節　中野遺跡第55地点の調査成果

本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒（16Y）、近世以降の土坑１基（78Ｄ）・溝跡２本（５・6M）が検出された。ここでは、これらの遺構・遺物について、簡単にまとめてみることにする。

まず、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（16Ｙ）であるが、この遺構については、調査時の所見から該期に位置付けているが、住居跡のプランがやや直線的であることと出土土器の中に古墳時代後期の土師器２点が含まれていることから、今後の調査により変更の可能性があることを付け加えること

とする。

近世以降の土坑（78Ｄ）は、地下室である。入口竪坑部は長方形を呈し、５Ｍに切られていることが確認されている。近世の瓦１点が出土しており、19世紀後半の時期が与えられる。

溝跡（5・６Ｍ）については、南北方向に２本平行して検出されている。出土遺物がないため、詳細については不明である。

第３節　中野遺跡第57地点の調査成果

本地点からは、土坑11基（83～93D）・井戸跡１基（７Ｗ）・ピット101（１～101P）本が検出された。なお、調査区東半部から北半部にかけて広範囲にわたり硬化した面が確認されており、これについては、通路として踏み固められた痕跡であるものと思われる。当時の宝幢寺代表役員である金剛氏の話によると、本地点は元々、宝幢寺の旧文殊堂が建っていたということであり、おそらく第29図の「コ」の字状の基礎部分は、その建物部分のものと推測される。そのため、今回検出された遺構・遺物については、宝幢寺関連ないし旧文殊堂周辺に関わるものと考えられ、前述した硬化面はそこへの参拝通路の可能性があるものと推測することができる。

ここでは、これらの遺構・遺物について、簡単にまとめてみることにする。

検出された主な遺構としては、出土遺物から判断して、近世以降の土坑11基・井戸跡１基・ピット101本と調査区に広がる硬化面である。そのため、遺構としては、すべて近世以降として判断したが、新しくは近・現代の資料も含まれている。また、今回の調査の中で、中世に遡る遺物が僅かに出土しているため、ここで簡単に紹介することとする。

中世に比定される遺物としては、硬化面出土の常滑甕（図版14－３－17）で、15世紀まで遡ることができる。また、遺構外出土遺物では、在地系と考えられる捏鉢（図版15－２－30）が16世紀後葉に比定される。さらに近世でもやや古い時期のものとして、遺構外出土遺物に17世紀前葉の瀬戸・美濃系の擂鉢（図版15－２－26）、17世紀前葉の常滑甕（図版15－２－31）が出土している。

以上から、今回出土した中世の遺物が宝幢寺に関連するのであれば、中世以降の資料で最も古い15世紀という時期まで遡ることができ、宝幢寺の起源を追究する場合、今回の調査内容の成果は貴重な資料につながるものと思われる。

［引用・参考文献］

石坂俊郎　1995『田島・棚田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第147集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

尾形則敏　1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第２号　あらかわ考古談話会

2005「第４章まとめ第２節　148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証」『城山遺跡第42地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義―武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例―」『埼玉考古Ⅱ』埼玉考古第41号　埼玉考古学会

2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識―（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例にして―」『埼玉考古』第43号　埼玉考古学会

尾形則敏・徳留彰紀・坂上直嗣・青池紀子・鈴木伸哉　2011『城山遺跡第63地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化

財第46集　埼玉県志木市教育委員会
尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子・青木　修　2013『志木市遺跡群20』志木市の文化財第51集　埼玉県志木市教育委員会
尾形則敏・藤波啓容・鈴木　徹・中村真理　2008『城山遺跡第58・60地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集　埼玉県志木市遺跡調査会
後藤建一　1989「付載　湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集　静岡県教育委員会
坂本　彰・鈴木重信・倉沢和子　1995『花見山遺跡』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
佐々木保俊・尾形則敏　1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第５集　埼玉県志木市遺跡調査会
1996『城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中道第16地点　市場裏遺跡第１地点　田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第２地点　中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集　埼玉県志木市教育委員会
佐々木保俊　1974「付　ハケ上遺跡Ｂ地点発掘調査報告書」『埼玉県富士見市所在　ハケ上遺跡　打越遺跡　北通遺跡　発掘調査報告書』文化財報告第７冊　富士見市教育委員会
志木市教育委員会　1985『志木市の社寺』志木市の文化財第10集
白石浩之　2001『石槍の研究―旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて―』アム・プロモーション
高橋　敦　1983「富士見市内における縄文時代草創期の石器群」『研究紀要』富士見市遺跡調査会
鶴間正昭　2009「南武蔵型坏の成立について」『研究論集　ＸＸＶ』東京都埋蔵文化財センター
根本　靖　1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅱ―土師器煮沸具の変遷について―」『あらかわ』第２号　あらかわ考古談話会
水口由紀子　1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第７号
原田正幸・北原實徳・今泉克巳　2005『万福寺遺跡群』有明文化財研究所　万福寺遺跡群発掘調査団
渡辺　一　1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会　鳩山町教育委員会

［付　　編］

自 然 科 学 分 析

Ⅰ．田子山遺跡出土土器の胎土分析

藤根　久・今村美智子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

一般的に、土器の胎土材料は、粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、材料粘土は元の粘土に含まれていた微化石類がそのまま保存されることから、顕微鏡を用いた微化石類の記載により材料粘土の種類について検討することができる（車崎ほか　1996）。また、混和材についても砂粒物の岩石学的な記載のほか、その他の混入物についても検討することができる。こうした材料の検討は、土器製作の基本的な材料情報を得ると同時に、製作技法の一端を知る手がかりになると考えられる。

ここでは、田子山遺跡や城山遺跡において出土した坏形あるいは甕形土器について、胎土の材料粘土と砂粒の特徴などについて検討した。

２．分析試料

検討した土器は、田子山遺跡から出土した坏形土器６試料、甕形土器２試料、城山遺跡坏形土器６試料、和光市地福寺裏のローム層下の粘土１試料で、試料№.１～15である（第26表）。

ここでは、土器の薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察による方法を行った。各土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の土器薄片（プレパラート）を作成した。なお、№.15の粘土は、予め電気炉850℃、６時間で焼成した。

（１）試料は、岩石カッターなどで２×３㎝程度の大きさに整形し、恒温乾燥機により乾燥した。乾燥後、スライドグラスに貼り付け、平面全体にエポキシ樹脂を含浸させ固化処理を行った。

（２）さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

（３）その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100㎛格子目盛を用いて任意の位置における約50㎛（0.5㎜）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50㎛前後）を対象とし、微化石以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、薄片全面について微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

３．分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した（菱田ほか　1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（含雲母類）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2％の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カ

コウ岩などのSiO２％の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO２％が少ない深成岩、SiO２％が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO２％が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO２％の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状で、閃緑岩のようなSiO２％が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球ガラスの破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。なお、発泡構造を示す斑晶質は、富士火山などから噴出したスコリアの可能性が高い。

［凝灰岩質］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物が固化したものであり、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変化する。溶結凝灰岩とは、高温で固結した凝灰岩で流理構造状の組織が見られる。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細とし、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

［片理複合鉱物類］

複合石英類で、個々の石英あるいは長石類が一定方向に伸びたように平行に配列しているものをいう。なお、これら石英などの粒子の隙間に黄色などの二次的な鉱物（主に雲母類）が見られるものを片理複合鉱物類（含雲母類）とする。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

４．各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第27表）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1㎜前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№１：50～150㎛が多い（最大粒径2.9㎜）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉砂岩質〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、ガラス、複合鉱物類（含雲母類）、［複合石英類］、放散虫化石（２個体）、珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種Pinnularia属、陸域指標種群Hantzschia amphioxys、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い、稲穎珪酸体化石

№２：20～150㎛が多い（最大粒径5.3㎜）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉砂岩質〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、角閃石類、ガラス、［複合石英類］、珪藻化石（淡水種Cymbella属、陸域指標種群Navicula mutica、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い、稲穎珪酸体化石

№３：10～350㎛が多い（最大粒径1.8㎜）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉石英・長石類〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、角閃石類、斜方輝石、雲母類、ガラス、［複合石英類］、珪藻化石（淡水種Nitzschia parvula、Eunotia biareofera、Pinnularia属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№４：30～150㎛が多い（最大粒径1.4㎜）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉石英・長石類〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、ガラス、複合石英類、雲母類、［発泡斑晶質］、珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種Pinnularia属、Epithemia属、陸域指標種群Hantzschia amphioxys、Navicula mutica、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い、稲穎珪酸体化石

№５：200～500㎛が多い（最大粒径2.1㎜）。複合石英類（微細）〉斑晶質〉砂岩質〉斜長石（双晶）、石英・長石類、凝灰岩質、［複合石英類］、単斜輝石、珪藻化石（淡水種Pinnularia属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№６：100～400㎛が多い（最大粒径1.6㎜）。複合石英類（微細）〉砂岩質〉雲母類〉石英・長石類〉複合石英類、［凝灰岩質］、斜方輝石、ジルコン、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№７：10～100㎛が多い（最大粒径1.1㎜）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、凝灰岩質、複合石英類、雲母類、砂岩質、単斜輝石、珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、淡水種Pinnularia属、陸域指標種群Hantzschia amphioxys、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い、稲穎珪酸体化石

№８：30～150㎛が多い（最大粒径2.5㎜）。微細石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、砂岩質、凝灰岩質、角閃石類、雲母類、［複合石英類］、ジルコン、珪藻化石（海水種

Coscinodiscus属/Thalassiosira属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い

№9：20～100μmが多い（最大粒径1.5㎜)。複合石英類（微細)〉砂岩質〉雲母類〉石英・長石類〉凝灰岩質、斜長石（双晶)、斑晶質、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い、稲穎珪酸体化石

№10：50～300μmが多い（最大粒径3.3㎜)。複合石英類（微細)〉砂岩質〉斑晶質〉石英・長石類〉斜長石（双晶)、複合石英類、凝灰岩質、[複合鉱物類（含輝石類)]、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群Stauroneis phoenicenteron、淡水種Pinnularia属、Cymbella属、Eunotia属、Gomphonema属、不明種多産)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№11：50μm以下が多い（最大粒径1.4㎜)。微細石英・長石類》単斜輝石〉複合石英類（微細)〉斑晶質、斜長石（双晶)、砂岩質、斜長石（累帯)、凝灰岩質、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群Melosira anbigua、Melosira granulata、淡水種Pinnularia属、Cymbella属、Melosira属多い、Surirella属、不明種多産)、骨針化石、胞子化石

№12：30～150μmが多い（最大粒径900μm)。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉砂岩質〉複合石英類、カリ長石（パーサイト)、斜長石（双晶)、単斜輝石、[凝灰岩質]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い

№13：20～150μmが多い（最大粒径2㎜)。複合石英類（微細)〉石英・長石類〉砂岩質、凝灰岩質、カリ長石（パーサイト)、斜方輝石、[複合石英類]、放散虫化石（1個体)、珪藻化石（海水種Coscinodiscus属/Thalassiosira属、Actinocyclus属、淡水種Cymbella属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い

№14：50～100μmが多い（最大粒径2.4㎜)。複合石英類（微細)〉砂岩質〉石英・長石類〉斜長石（双晶)、複合石英類、単斜輝石、[凝灰岩質]、珪藻化石（淡水種Pinnularia属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、赤色粒子多い

№15：50μm以下が多い（最大粒径1.2㎜)。石英・長石類〉雲母類》斜長石（双晶)、角閃石類、[複合石英類（微細)、砂岩質]

5．化石による材料粘土の分類（第38図）

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度)、放散虫化石が数百μm、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後)。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2㎜である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、ａ）海成粘土を用いた胎土、ｂ）淡水成粘土を用いた胎土、ｃ）水成粘土を用いた胎土、に分類される。なお、放散虫化石が含まれるものの淡水種珪藻化石が出現する場合には、粘土の分類を淡水成粘土とした。また、微化石類の出現率が極端に低い場合には、粘土の種類は、例えば（淡水成）とカッコ付きで現した。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

ａ）海成粘土を用いた胎土（№８、№９）

これらの胎土中には、海水種珪藻化石Coscinodiscus属/Thalassiosira属や骨針化石が含まれていた。

ｂ）淡水成粘土を用いた胎土（№１～５、№７、№10・11、№13・14）

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。なお、これらには、放散虫化石が含まれる胎土もある。

№10や№11では、Pinnularia属やCymbella属あるいはEunotia属などの破片が多く含まれ、№10の坏形土器では沼沢湿地付着生指標種群Stauroneis phoenicenteron、№11の坏形土器では湖沼浮遊生指標種群Melosira anbiguaなど、特定の堆積環境を指標する珪藻化石が含まれていた。

ｃ）水成粘土を用いた胎土（№６、№12）

これらの胎土は、不明種珪藻化石あるいは骨針化石が含まれていた。

６．砂粒組成による分類

ここで検討した胎土中には、比較的大きな岩石片が含まれている。これら岩石片を対象として起源岩石を推定した。岩石の推定は、砂岩質や複合石英類（微細）を堆積岩類、斑晶質と完晶質を火山岩類、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含輝石類）を深成岩類、凝灰岩質を凝灰岩類、とした。なお、推定岩石の出現頻度に多少の違いが見られたが、特に細分は行わなかった。ここで検出された斑晶質は、発泡構造を示さないことから、富士火山から噴出したスコリアではなく、火山岩類起源の岩片である。

推定した岩石群から、堆積岩類を主体として凝灰岩類や深成岩類あるいは火山岩類を伴うＡ群、堆積岩類を主体として次いで火山岩類を多く含み、凝灰岩類や深成岩類を伴うＢ群に分類した。

№５の田子山遺跡甕形土器、№10および№11の城山遺跡坏形土器はＢ群に分類され、その他の土器はＡ群に分類された（第28表）。

７．考察

ここでは、田子山遺跡あるいは城山遺跡から出土した坏形土器あるいは甕形土器の胎土について、各粘土や砂粒などの特徴について検討した。

材料粘土では、海成粘土や淡水成粘土あるいは水成粘土が識別され、淡水成粘土が多いことが分かった。一方、砂粒は、堆積岩類を主体として凝灰岩類や深成岩類を伴うＡ群と堆積岩類に次いで火山岩類を含むＢ群に分類され、多くの土器ではＡ群に分類され、３胎土がＢ群であった（第28表）。

材料粘土と砂粒組成との関係を見ると、放散虫化石を含む淡水成粘土からなる胎土はＡ群の砂粒組成を示す。一方、城山遺跡の坏形土器のように淡水種珪藻化石を特徴的に多く含む淡水成粘土は、Ｂ群の砂粒組成である。

このように粘土の種類と砂粒組成の組み合わせから、微化石類が少ない海成や淡水成あるいは水成粘土でＡ群の砂粒組成もつ一群、微化石類が少ないＢ群の砂粒組成をもつ一群、多量の珪藻化石を含む淡水成粘土でＢ群の砂粒組成をもつ一群に識別される。

ここで検討した坏形土器は、考古学的には「比企型坏」あるいは「比企・入間型坏」（水口　1989、石坂　1995、尾形　1999）、さらに近年では入間系土師器（尾形　2008）と呼ばれるなど、これらは

地域において生産された要素をもつ土器として注目されている。

ここで一部の胎土において検出された放散虫化石あるいは海水種珪藻化石は、海成層に由来する微化石類である。一方、№10の坏形土器のように沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石を特徴的に含む粘土は、沼沢地成の堆積物、№11の坏形土器のように湖沼浮遊生指標種群の珪藻化石を特徴的に含む粘土は、湖沼成の堆積物である。

このうち放散虫化石を含むような海成層は、比企丘陵において中新世（約520～2、300万年前）の松山層群として分布している（藤本・福田　1980）。なお、同様の地層は、群馬県の藤岡から富岡地域に分布する富岡層群として分布している（松丸　1977）。ただし、文献上放散虫化石の記載がないため具体的な産出層準については不明である。こうした地質学的背景から、少なくとも放散虫化石が検出された胎土は、これら地層が分布する地域において製作されたものと考える。また、放散虫化石を含む胎土と同様の砂粒組成をもつ胎土も状況的にはその可能性が高いと考えられる。

一方、堆積岩類のほか火山岩類を含むＢ群の砂粒組成をもつ胎土は、現利根川や荒川の砂粒に見られる組成ではあるが、具体的な地域はイメージできないがＡ群の組成とは異なった地域の組成と思われる。この違いについては今後の検討が必要である。

なお、比較試料として和光市地福寺崖に露出するローム層下粘土堆積物について同様に調べたが、珪藻化石などの微化石類が全く含まれなかった。

その他の特徴としては、比較的多くの胎土中に赤色粒子が多く含まれている。これらは、利用した粘土中に含まれていた褐鉄鉱が焼成により赤化したものと思われる。なお、この赤色粒子の出現は、微化石類の少ない粘土で、かつＡ群の砂粒組成を示す胎土に見られた。

［引用文献］

安藤一男　1990『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用』東北地理　42、2、73-88

石坂俊郎　1995『田島・棚田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第147集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

尾形則敏　1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第２号　あらかわ考古談話会

2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識―（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例にして―」『埼玉考古』第43号　埼玉考古学会

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子　1996『(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－』日本考古学協会第62回大会研究発表要旨　153-156

小杉正人　1988『珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用』第四紀研究　27、1-20

佐々木保俊・尾形則敏　1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第４集　埼玉県志木市遺跡調査会

地学団体研究会・地学事典編集委員会編　1981『増補改訂　地学事典』平凡社　1612p

藤本治義・福田　理　1980『埼玉県地質図』内外地図株式会社

菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久　1993『岩石学的方法に基づく胎土分析について－弥生時代後期の土器を例にして－』日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集　34-35

松丸国照　1977『関東山地北縁～北東縁の新第三系の層序』地質学雑誌　83-4　213-225

水口由紀子　1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第７号

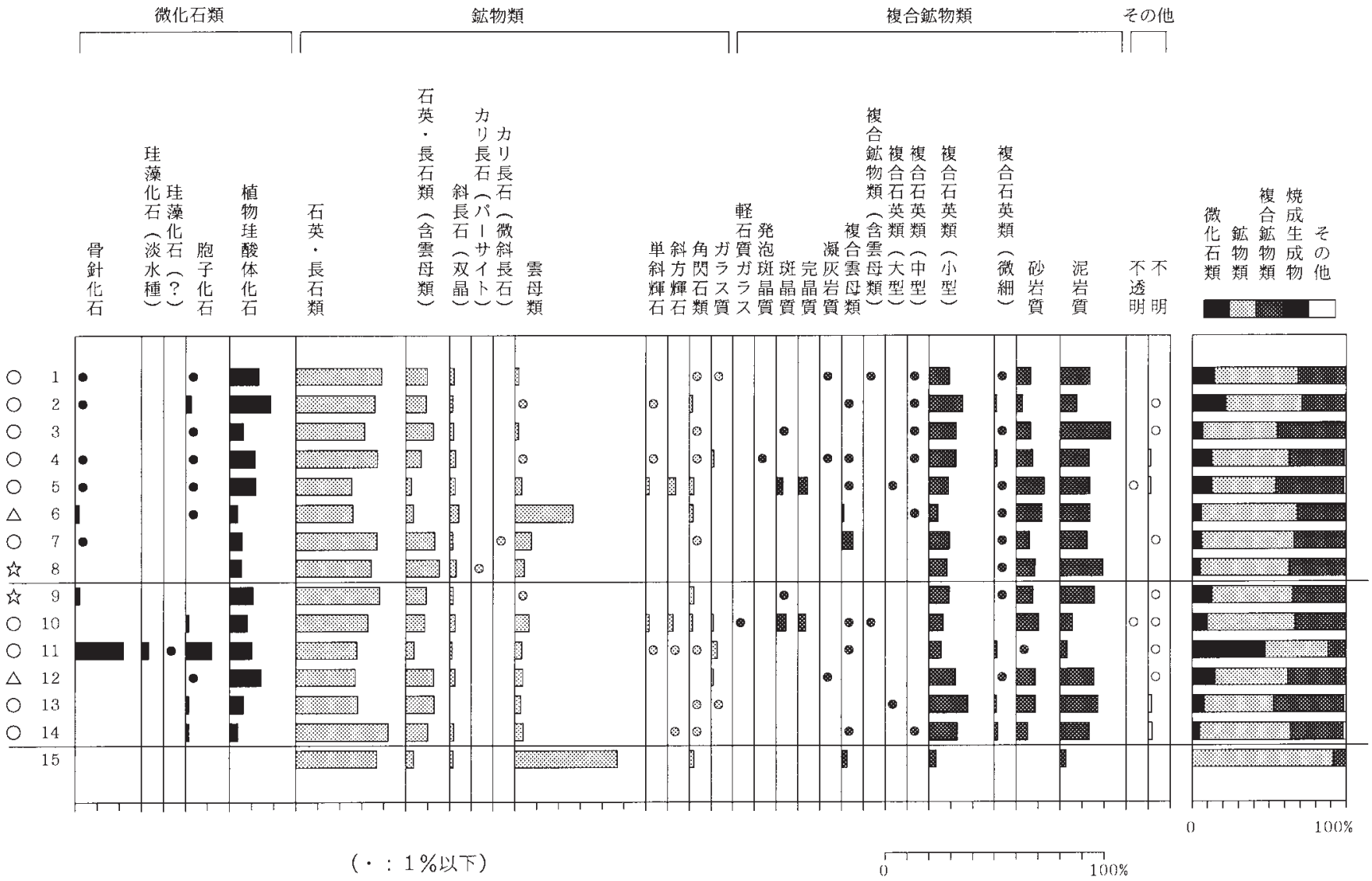
Ⅰ．田子山遺跡出土土器の胎土分析

試料No.	器 種	遺跡名	地点名	遺構名	塗彩	特　　徴	色相、明度/彩度	色	報告書掲載番号	掲載文献
1	坏形土器	田子山	第51地点	56H	赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	7.5YR 5/6	明褐	第8図9	本報告書
2	坏形土器				赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	7.5YR 6/8	橙	第8図10	
3	坏形土器				赤彩	いわゆる続比企型坏／入間系土師器	10YR 6/6	明赤褐	第8図12	
4	坏形土器				黒彩	小型有段坏／在地系土師器	5YR 5/6	明赤褐	第8図11	
5	甕形土器				無彩	長甕／在地系土師器	10YR 7/6	明黄褐	第8図16	
6	甕形土器				無彩	丸甕／在地系土師器	10YR 7/8	黄橙	第8図8	
7	坏形土器	田子山	第48地点	53H	赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	5YR 5/8	明赤褐	第3図3	尾形・深井1999
8	坏形土器				赤彩	いわゆる続比企型坏／入間系土師器	7.5YR 5/6	明褐	第3図6	
9	坏形土器	城山	第35地点	129H	赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	5YR 5/6	明赤褐	第60図4	尾形・深井1999
10	坏形土器				赤彩	大型有段坏	10YR 7/4	にぶい黄橙	第60図13	
11	坏形土器				無彩	大型有段坏／小針型坏	5YR 7/8	橙	第60図18	
12	坏形土器	城山	第1地点	56H	赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	5YR 7/8	橙	第101図1	佐々木・尾形1988
13	坏形土器	城山	第34地点	127H	赤彩	いわゆる比企型坏／入間系土師器	2.5YR 5/8	明赤褐	第49図2	尾形・深井1999
14	坏形土器				赤彩	大型有段坏／入間系土師器	5YR 5/8	明赤褐	第49図3	
15	粘　土	和光市地福寺崖のローム層下粘土				サンプル	2.5Y 7/4	浅黄	参考試料	―

第26表　土器試料とその特徴

分　類　群	試料1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
微化石類															
骨針化石	1	2	―	1	1	3	1	―	5	―	100	―	―	―	―
珪藻化石（淡水種）	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	15	―	―	―	―
珪藻化石（？）	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―	―
胞子化石	2	7	2	2	1	1	―	―	―	3	54	1	3	3	―
植物珪酸体化石	32	50	12	28	22	6	12	10	25	16	46	28	12	8	―
鉱物類															
石英・長石類	95	97	63	90	48	44	78	65	90	64	127	53	54	91	68
石英・長石類（含雲母類）	24	25	25	17	5	6	28	29	22	17	18	25	25	22	7
斜長石（双晶）	5	4	4	7	5	7	3	6	4	5	6	5	―	4	3
カリ長石（パーサイト）	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―	―	―
カリ長石（微斜長石）	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―	―	―	―
雲母類	4	2	3	2	6	45	16	8	2	13	14	7	5	8	87
単斜輝石	―	1	―	1	3	―	―	―	―	3	2	―	―	―	―
斜方輝石	―	―	―	―	7	―	―	―	―	5	3	―	―	1	―
角閃石類	1	4	1	1	4	3	1	―	5	3	4		1	1	4
ガラス質	2	―	―	3	―	―	―	―	―	2	13	2	1	―	―
複合鉱物類															
軽石質ガラス	―	―	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―
発砲斑晶質	―	―		1	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
斑晶質	―	―	2	―	6	―	―	―	1	9	―	―	―	―	―
完晶質	―	―	―	―	8	―	―	―	―	7	―	―	―	―	―
凝灰岩質	1	―	―	1	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―
複合雲母類	―	1	―	1	1	2	11	―	―	1	2	―	―	2	5
複合鉱物類（含雲母類）	1	―	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―
複合石英類（大型）	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―	―	―	1	―	―
複合石英類（中型）	2	1	1	1	―	1	―	―	―	―	―	―	―	1	―
複合石英類（小型）	23	42	25	30	17	7	20	16	22	13	26	24	34	28	6
複合石英類（微細）	1	3	1	3	1	1	1	1	2	―	6	1	2	3	―
砂岩質	16	8	13	18	24	20	13	16	18	20	3	17	17	11	―
泥岩質	33	20	46	32	25	23	26	37	37	11	15	30	33	29	5
その他															
不透明	―	―	―	―	1	―	―	―	―	1	―	―	―	―	―
不明	―	2	2	3	2	―	1	―	2	1	1	1	3	4	―
総ポイント数	243	269	200	242	188	169	212	189	235	196	456	196	191	216	185

第27表　土器胎土および粘土中の粒子組成表



No. 1～8；田子山遺跡、 No. 9～14；城山遺跡、 No. 15；和光市粘土

第38図　土器胎土および粘土中の粒子組成図

試料No.	器 種	遺跡名	地点名	遺構名	粘土の特徴				砂粒の特徴		その他の特徴１	その他の特徴２	報告書掲載番号
					分類	種類（堆積環境）	特徴１	特徴２	分類	砂粒組成（頻度順・》は極端な場合：［ ］は稀）			
1	坏形土器	田子山	第51地点	56H	○	（淡水成）	含放散虫化石など		A	堆積岩類》凝灰岩類、［深成岩類］	赤色粒子目立つ	陸生珪藻、稲穎	第8図9
2	坏形土器				○	（淡水成）			A	堆積岩類》凝灰岩類、［深成岩類］	赤色粒子目立つ	陸生珪藻、稲穎	第8図10
3	坏形土器				○	淡水成			A	堆積岩類》凝灰岩類、［深成岩類］			第8図12
4	坏形土器				○	（淡水成）	含海水種珪藻化石		A	堆積岩類》凝灰岩類、深成岩類、［火山岩類］	赤色粒子目立つ	陸生珪藻、稲穎	第8図11
5	甕形土器				○	（淡水成）			B	堆積岩類》火山岩類〉凝灰岩類、［深成岩類］			第8図16
6	甕形土器				□	水　成			A	堆積岩類》深成岩類、［凝灰岩類］		陸生珪藻、稲穎	第8図8
7	坏形土器	田子山	第48地点	53H	○	（淡水成）	含海水種珪藻化石		A	堆積岩類》深成岩類、凝灰岩類	赤色粒子目立つ		第3図3
8	坏形土器				☆	（海　成）			A	堆積岩類》凝灰岩類、［深成岩類］	赤色粒子目立つ		第3図6
9	坏形土器	城山	第35地点	129H	☆	（海　成）			A	堆積岩類》凝灰岩類、火山岩類、［深成岩類］	赤色粒子目立つ	陸生珪藻、稲穎	第60図4
10	坏形土器				○	淡水成	珪藻化石多産		B	堆積岩類》火山岩類〉凝灰岩類、深成岩類			第60図13
11	坏形土器				○	淡水成	珪藻化石多産	骨針極多産	（B）	［堆積岩類、火山岩類、凝灰岩類］	細粒質		第60図18
12	坏形土器	城山	第1地点	56H	□	水　成			A	堆積岩類》深成岩類、［凝灰岩類］	赤色粒子目立つ		第101図1
13	坏形土器	城山	第34地点	127H	○	（淡水成）	含放散虫化石など		A	堆積岩類》凝灰岩類、［深成岩類］	赤色粒子目立つ		第49図2
14	坏形土器				○	（淡水成）			A	堆積岩類》深成岩類、［凝灰岩類］	赤色粒子目立つ		第49図3
15	粘　土	和光市地福寺崖のローム層下粘土				その他			―	［堆積岩類］			―

第28表　胎土の粘土および砂粒の特徴

図　　版

1. 調査風景

2. 211号土坑

3. 56号住居跡遺物出土状態

4. 56号住居跡遺物出土状態

5. 56号住居跡遺物出土状態

6. 56号住居跡遺物出土状態

7. 56号住居跡遺物出土状態

8. 56号住居跡遺物出土状態（107地点）

図版2　田子山遺跡第51地点

1. 56号住居跡

2. 56号住居跡Ｐ１

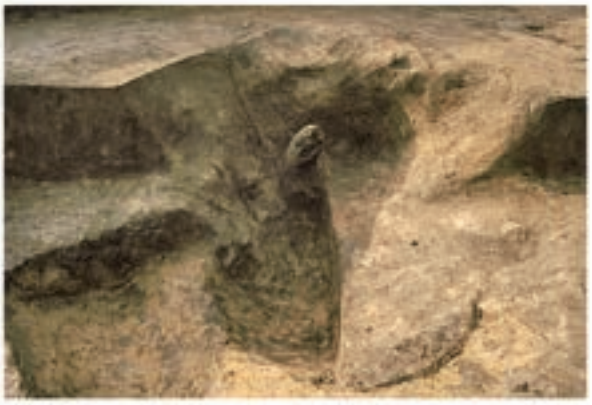
3. 56号住居跡旧カマド

4. 56号住居跡掘り方

5. 57号住居跡遺物出土状態

6. 57号住居跡遺物出土状態

7. 57号住居跡遺物出土状態



8. 57号住居跡カマド支脚出土状態

1. 57号住居跡

2. 57号住居跡掘り方

3. 57号住居跡カマド掘り方

4. 58号住居跡

5. 58号住居跡遺物出土状態

6. 58号住居跡掘り方

7. 59号住居跡遺物出土状態

8. 59号住居跡遺物出土状態

図版4　田子山遺跡第51地点

1. 59号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

2. 59号住居跡

3. 59号住居跡カマド・貯蔵穴

4. 59号住居跡カマド遺物出土状態

5. 59号住居跡掘り方

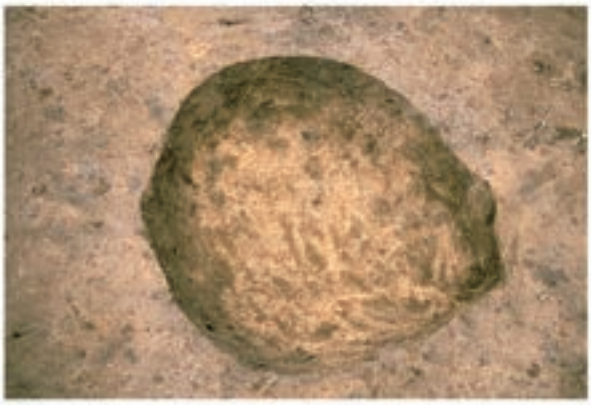
6. 59号住居跡カマド掘り方

7. 60号住居跡遺物出土状態

8. 60号住居跡遺物出土状態

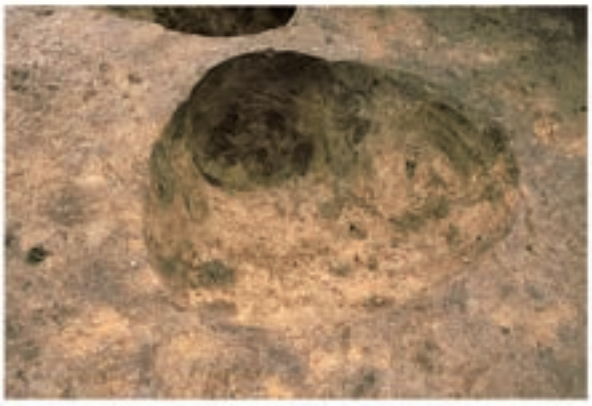
1. 60号住居跡遺物出土状態

2. 60号住居跡掘り方



3. 208号土坑

4. 209号土坑



5. 210号土坑

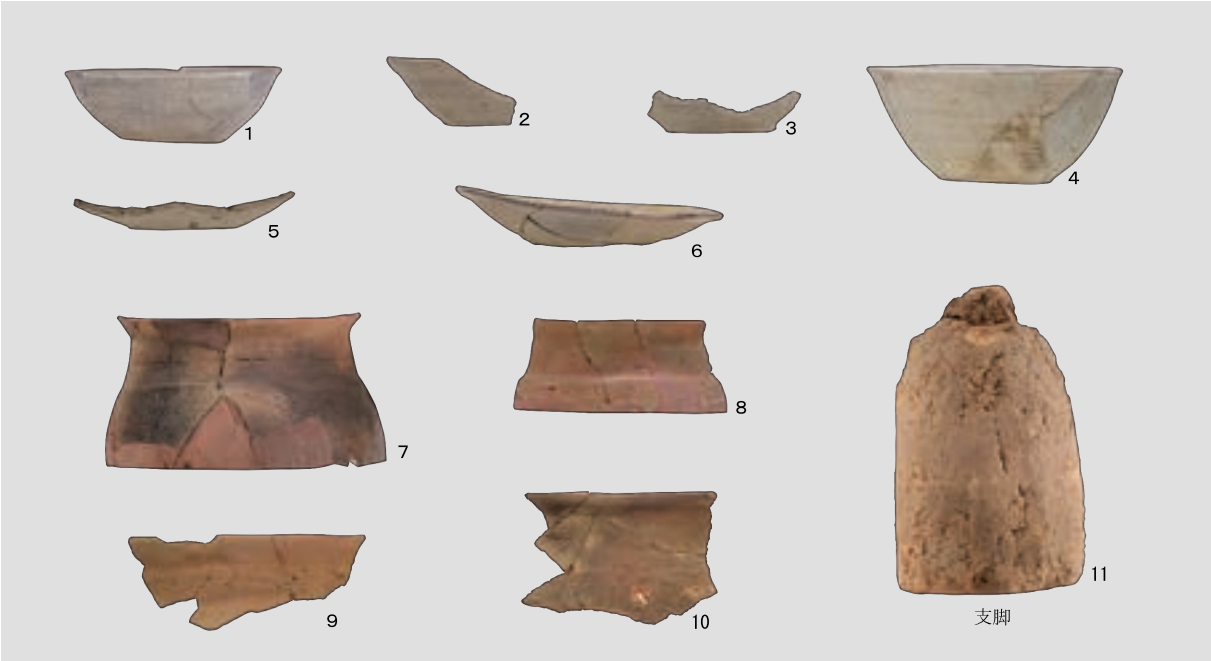
6. 16号ピット

7. (B－8)G　ピット列

図版6　田子山遺跡第51地点

1.211号土坑出土遺物

2.56号住居跡出土遺物

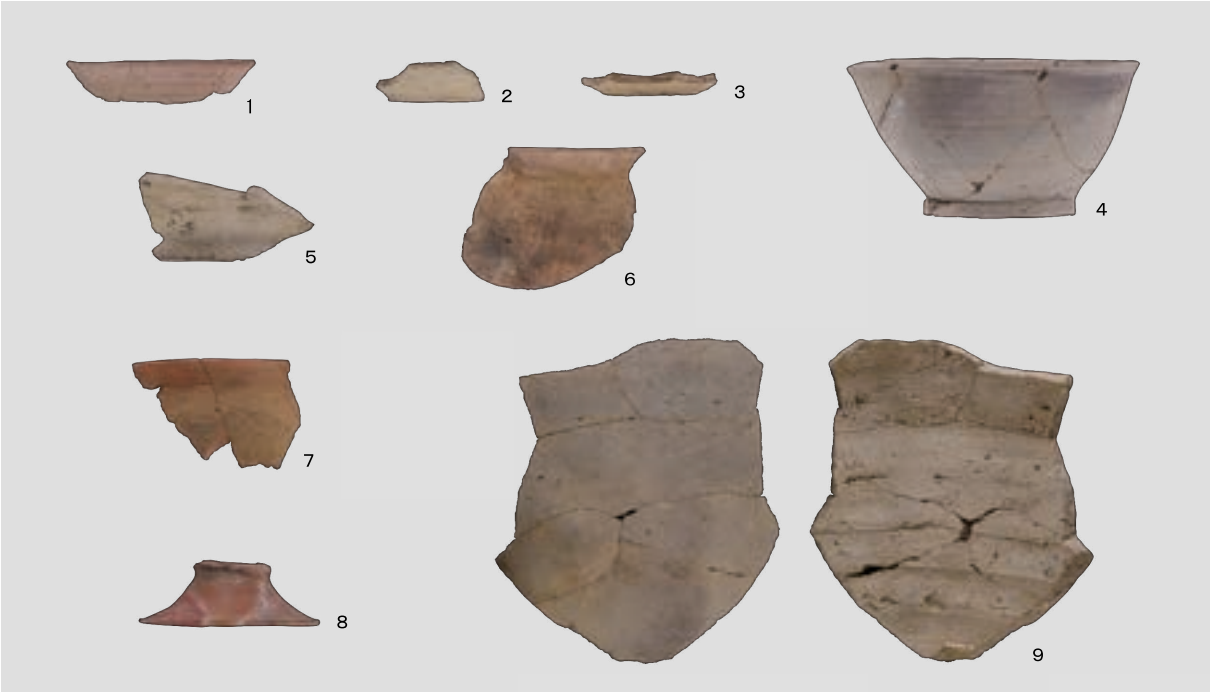


1. 57号住居跡出土遺物

2. 58号住居跡出土遺物

3. 59号住居跡出土遺物

図版8　田子山遺跡第51地点



1. 60号住居跡出土遺物

2. ピット出土遺物

3. 遺構外出土遺物

1．調査風景

2．16号住居跡、5・6号溝跡

3．78号土坑入口竪坑部

4．78号土坑主体部

5．16号住居跡出土遺物

6．78号土坑出土遺物

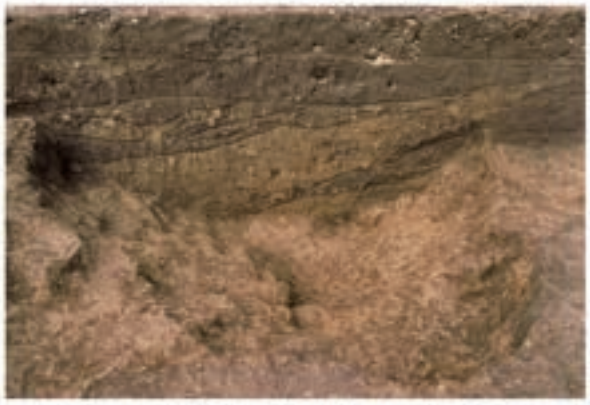
7．遺構外出土遺物

図版10　中野遺跡第57地点

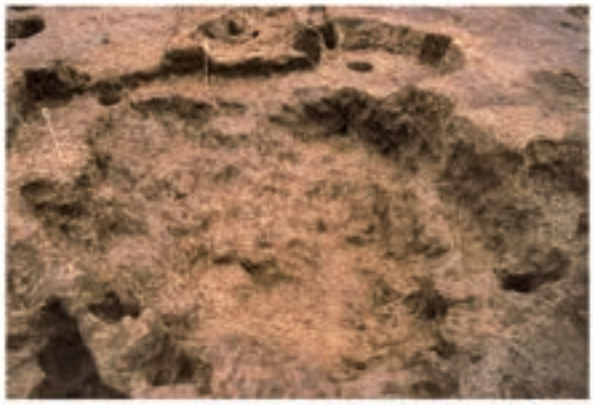
1. 表土剥ぎ風景

2. 調査区整備風景

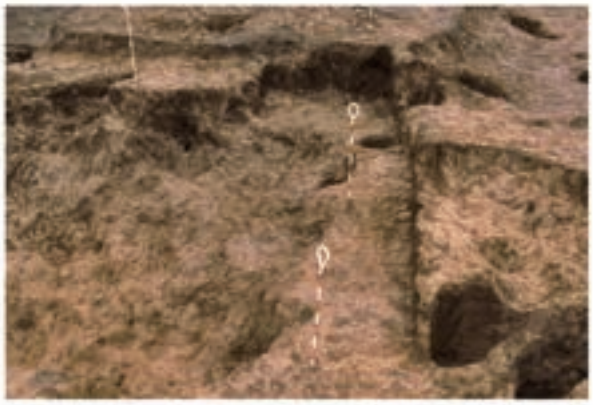
3. 基本層序



4. 83号土坑断面

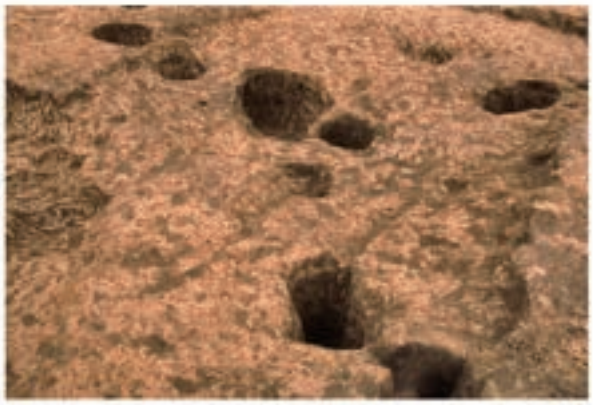


5. 83号土坑

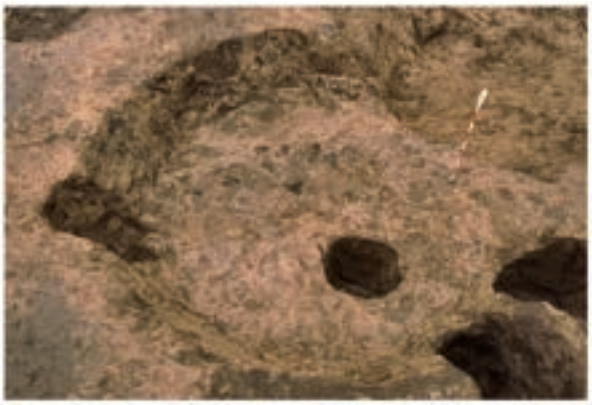


6. 84号土坑

7. 85号土坑

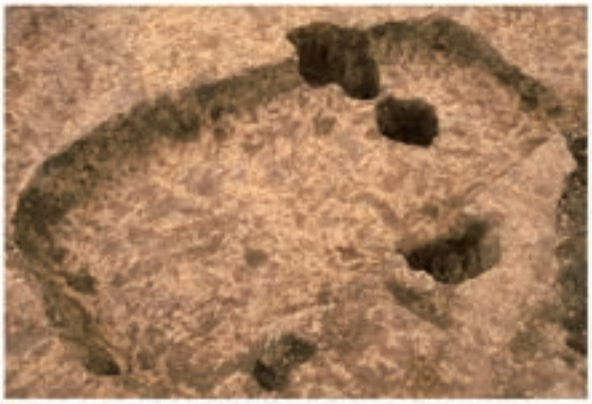


8. 87号土坑・1P他



1. 88号土坑

2. 調査風景



3. 89号土坑

4. 92号土坑

5. 7号井戸跡

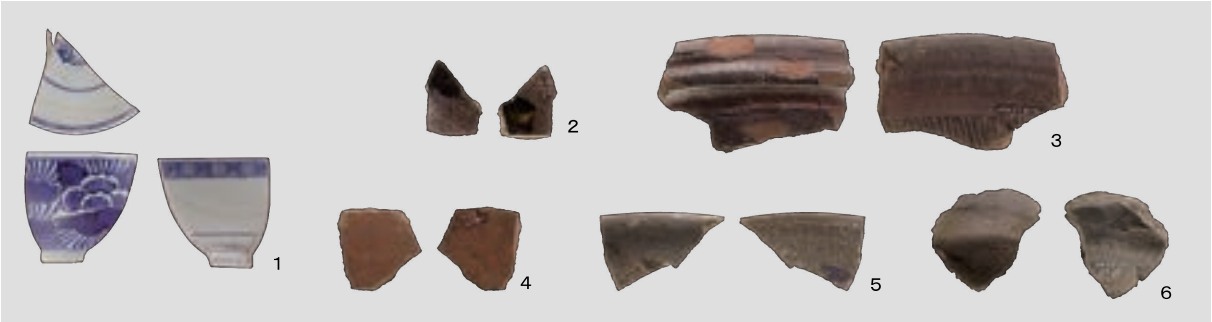
6. 道路状遺構

7. ピット列

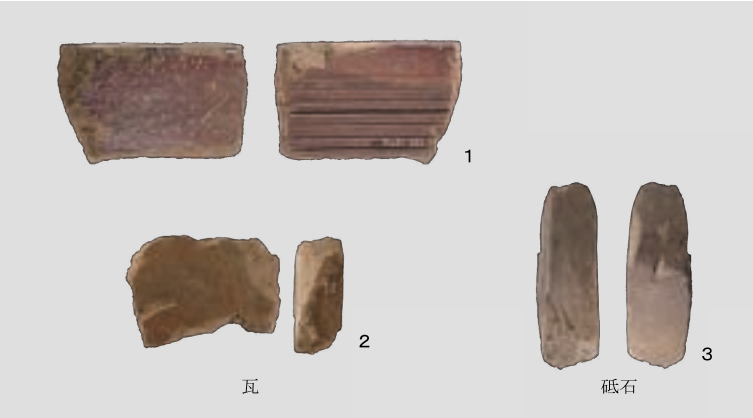
1. 83号土坑出土遺物

2. 84号土坑出土遺物

3. 86号土坑出土遺物

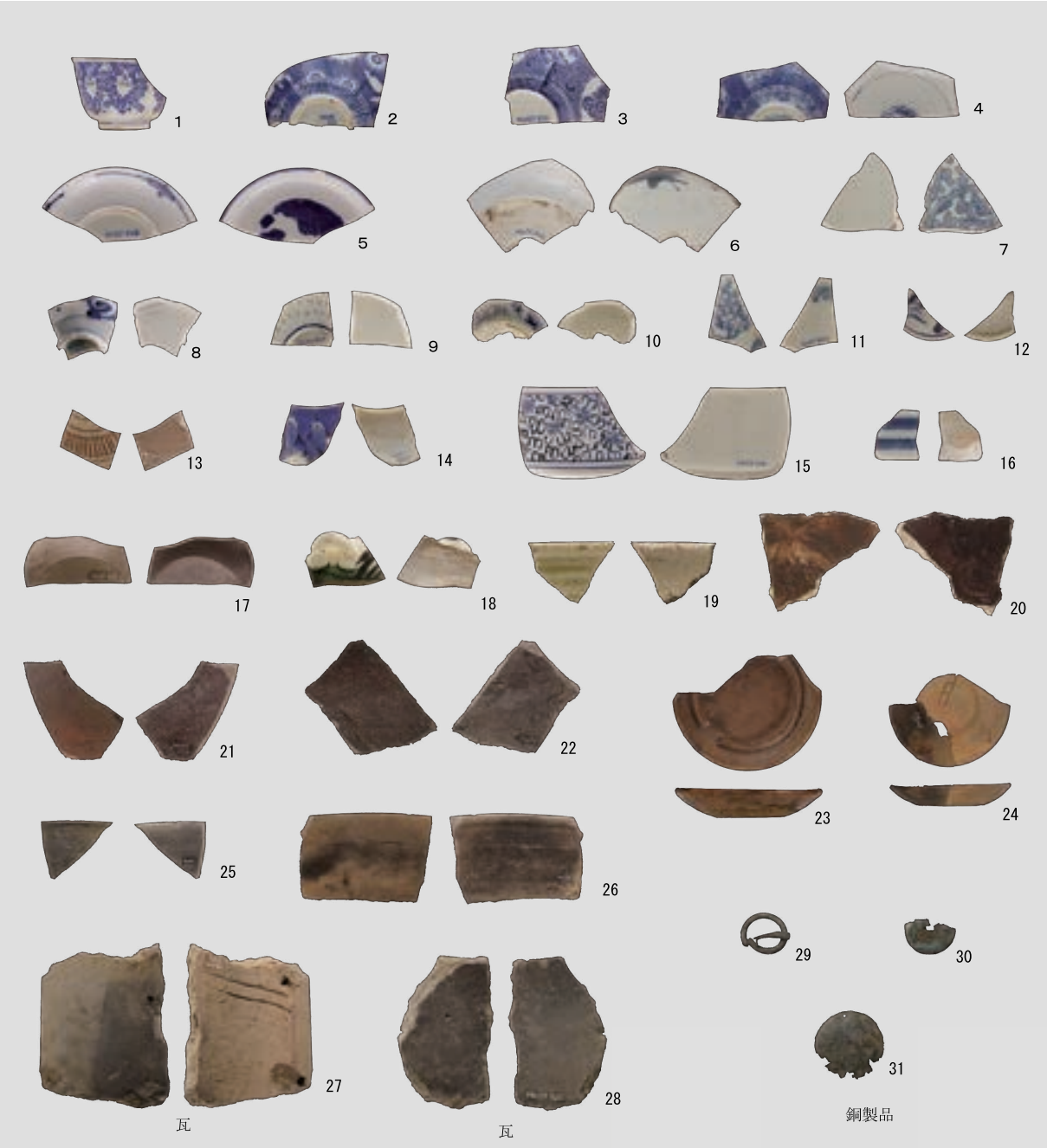


4. 87号土坑出土遺物



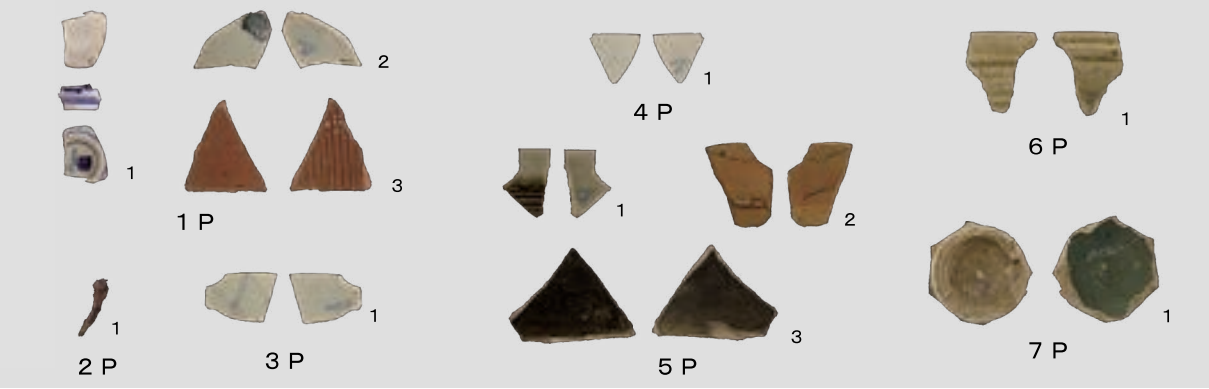
1. 88号土坑出土遺物

2. 90号土坑出土遺物

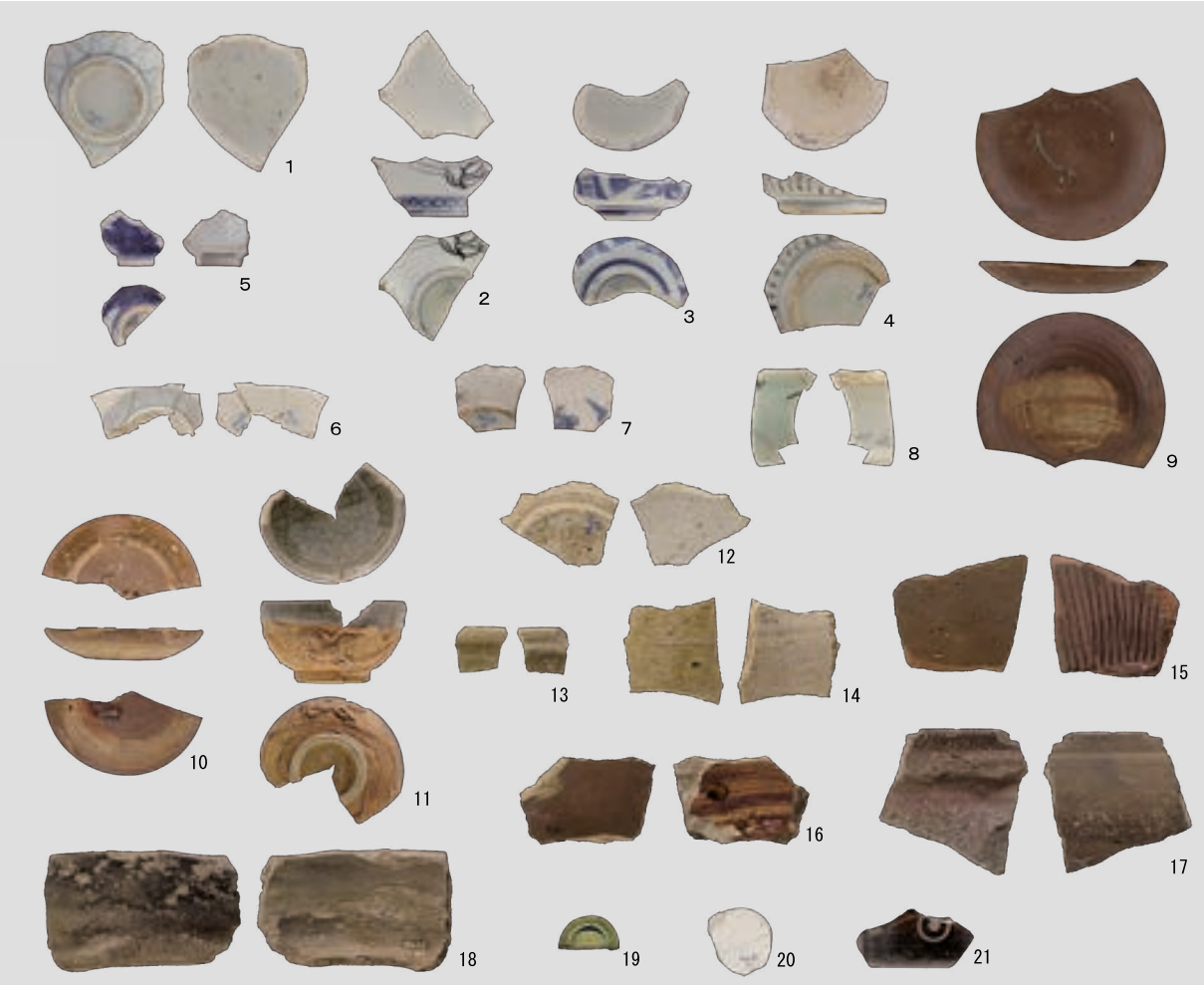


3. 92号土坑出土遺物

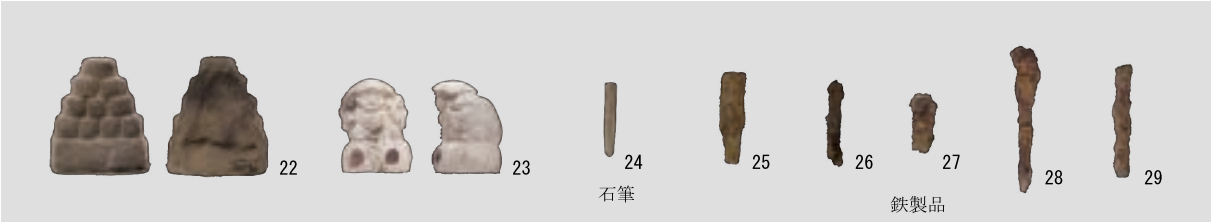
1. 7号井戸跡出土遺物



2. ピット出土遺物

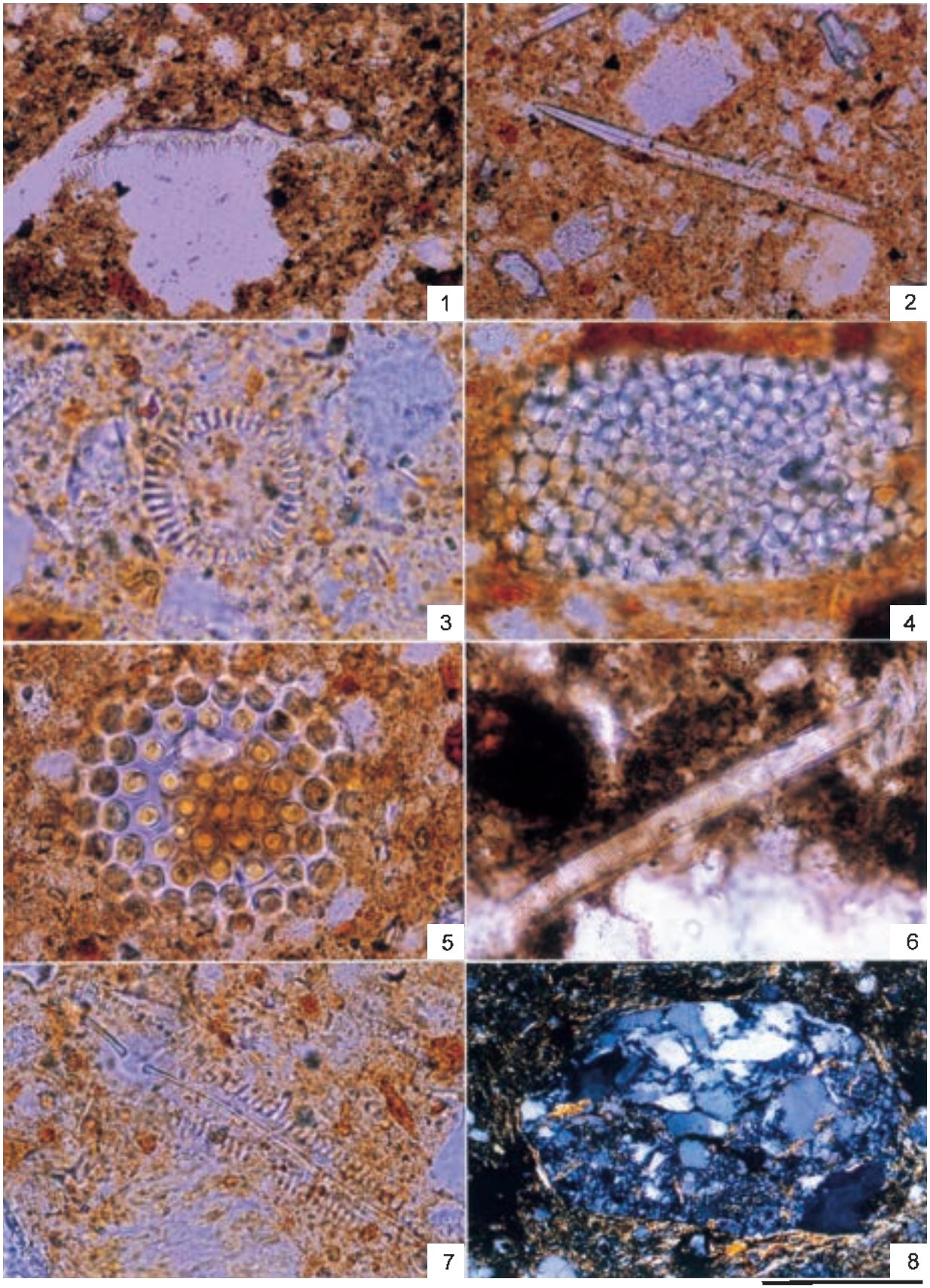


3. 硬化面出土遺物 1



1. 硬化面出土遺物 2

2. 遺構外出土遺物



土器胎土中の微化石類（スケール；No.1・2:100μm、No.3:20μm、No.4 ～ 7:40μm、No.8:200μm）

1.稲頴植物珪酸体　No.9
2.骨針化石　No.11
3.珪藻化石（Melosira 属）　No.11
4.放散虫化石 No.13
5.放散虫化石　No.1
6.珪藻化石（*Eunotia bigcoffera*）　No.3
7.珪藻化石（*Pinnularia* 属）　No.11
8.砂岩質　No.1

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	しきしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ８
書　　名	志木市埋蔵文化財調査報告書８
シリーズ名	志木市の文化財
シリーズ番号	第71集
著者氏名	尾形則敏　大久保　聡　深井恵子
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所　在　地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号　TEL 048（473）1111
発行年月日	平成30（2018）年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積（㎡） （全体面積）	調査原因
田子山遺跡 （第51地点）	志木市本町 ２丁目1729-1・5	11228	09-010	35° 49′ 53″	139° 34′ 58″	19980724 ～ 19980814	431.09 （1,475.17）	宅地造成
中野遺跡 （第55地点）	志木市柏町 １丁目1495-1	11228	09-002	35° 50′ 02″	139° 34′ 19″	20010628 ～ 20010629	60.19	道路造成工事
中野遺跡 （第57地点）	志木市柏町 １丁目1526-1の一部	11228	09-002	35° 49′ 58″	139° 34′ 32″	20010820 ～ 20010908	494.07	不動堂建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田子山遺跡 （第51地点）	集落跡	縄文時代 古墳時代後期 平安時代	土坑　1基 住居跡　2軒 住居跡　3軒 土坑　3基	土器・石器（有舌尖頭器） 土師器・須恵器 土師器・須恵器	縄文時代の土坑（211 D）から有舌尖頭器１点が出土した。
中野遺跡 （第55地点）	集落跡	弥生時代後期～古墳時代前期 近世以降	住居跡　1軒 土坑（地下室）　1基 溝跡　2本	土器 瓦	住居跡（16 Y）は、一部の検出であったため、今後の調査により時期変更の可能性がある。
中野遺跡 （第57地点）	集落跡	近世以降	土坑　11基 井戸跡　1基 ピット　101本 硬化面	陶磁器・土器、銅製品、瓦、銅銭、 陶器、鉄製品 鉄製品 陶磁器・土器、土製品、ガラス製品、石製品、鉄製品、銅銭、	近世以降の大部分の遺構は、宝幢寺関連の遺構の可能性がある。

要　　約

田子山遺跡は、縄文時代～近世・近代にかけての複合遺跡である。今回報告する第51地点からは、縄文時代の土坑１基、古墳時代後期の住居跡２軒、平安時代の住居跡３軒・土坑３基などが検出された。縄文時代の土坑からは、混入品と考えられるが、有舌尖頭器１点が出土した。

中野遺跡は、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡である。今回報告する地点は、第55・57地点である。

第55地点からは、狭小な範囲の中で、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡１軒、近世以降の土坑１基・溝跡２本が検出された。近世以降の土坑は、地下室の形態であったが、主体部の調査については、危険が伴うため、精査はできなった。

第57地点からは、近世の土坑11基・井戸跡１基・ピット101本などが検出された。また、調査区北半部を中心に広い範囲で硬化面が見られたが、これについては、特に宝幢寺関連ないし文殊堂周辺に関わるものと考えられ、硬化面はそうした施設への参拝通路であったものと推測される。

志木市の文化財　第71集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 8

発　行　埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　平成 30（2018）年 12 月 28 日
印　刷　株式会社　白峰社